

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立立川国際中等教育学校

1

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

＊
タイの海岸に打ち上げられたクジラの胃から、80枚まいをこえるプラス

チックの袋ふくろがでてきたというニュースが、2018年6月に流れま
した。5月末に打ち上げられたこのオスのクジラは、残念ながら死んで
しまいました。そこで、おなかを切り開いて調べてみたところ、こんな
にたくさんの袋がみつかったというのです。重さにして約8キログラム
にもなったといいます。この「プラスチックの袋」って、いったいなん
だと思う？

きみたちも見たことがあるはずです。スーパーマーケットやコンビ
ニエンスストアなどで買い物をする、うすくて白っぽい「レジ袋」
に入れてくれるよね。これが、代表的な「プラスチックの袋」なんだ。

クジラは、これらの袋をえさとまちがえて飲みこんだ可能性があり
ます。プラスチックの袋をたくさん飲みこんでしまったために、ほんとう
に必要な栄養をえさからとることができなくなって死んだらしいのです。

もちろん、プラスチックの袋は海で作られたわけではありません。
陸に住んでいるわたしたち人間が作り、そして使ったものです。それが

海に出ていってしまったのです。

みなさんは、海水浴に行ったとき、使い終わったレジ袋をきちんと
持ち帰りましたか。ごみ捨て場でないところに置いてきてしまったこ
とはないですか。こんなレジ袋は、風にふかれたり波にさらわれたり
して、すぐ海に入ります。

それだけではありません。川の水は流れて海に出ていくので、川の
まわりに捨てられたプラスチックの袋も、やがては海に出ていってしま
います。

つまり、わたしたちの生活から出たプラスチックの袋は、陸上できち
んと処理しゅりされないかぎり、やがては海に出ていってしまうものなのです。

それをクジラやウミガメがまちがえて食べる。わたしたちが便利な生
活するために使っているプラスチックの袋が、海の生き物たちを
苦しめているのです。

このように、わたしたちが使ったプラスチックは、ごみとして海に
たくさん流れていっています。たしかに、きれいな海がプラスチック
のごみで汚れるよごるのは困こまるけれど、わたしたちは陸で暮くらしているから、

いったん海に流れ出たプラスチックごみは、わたしたちの生活にはあまり関係がない。そう思うでしょうか？

そんなことはけっしてありません。海に出たプラスチックのごみを、わたしたちは、まわりまわって食べてしまっている可能性があります。

プラスチックは、太陽の光をあびるとぼろぼろにこわれやすくなり、海では波の力で細かくくだけていきます。どんどんくだけて、大きさが5ミリメートルより小さくなったものを「マイクロプラスチック」といいます。「マイクロ」は、英語で「とても小さい」という意味です。

このマイクロプラスチックが、東京湾を泳いでいるカタクチイワシの体内からみつかりました。2015年8月にとった64匹のカタクチイワシを調べたところ、その約8割にあたる49匹からマイクロプラスチックがみつかったのです。えさと間違えて食べてしまったようです。海岸から近い海に多く生息するカタクチイワシは、めざしやしらす干し、煮干しとして、わたしたちもよく食べています。ふくまれていたマイクロプラスチックは1匹あたり最大で15個、平均すると2・3個でした。合計150個のマイクロプラスチックが多かったのは、その86%にあたる129個の小さなかけらでしたが、7%の11個は「マイクロビーズ」でした。

マイクロビーズというのは、ふだん使う洗顔料や歯みがきの中に入っている、プラスチックの非常に小さな粒のことです。顔を洗い流したり口をすすいだりすれば、このマイクロビーズは下水に流れこみます。それが下水処理場でうまく取りのぞかれずに、海に出てしまったと考えられています。いまは、プラスチック製のマイクロビーズを使わないようにする動きがありますが、すでに使われたものが海にただよっているらしいのです。

カタクチイワシは、ふだんからわたしたちがよく食べる魚です。さきほど、ごみは流れて海に出るとお話ししました。ですが、このカタクチイワシの話からすると、海がごみの終着点ではないということですね。プラスチックはごみとなって海に出て、またわたしたちのところに、しかもわたしたちの体にもどってくることになります。

プラスチックは、このように世界中にごみとして広がってしまっています。プラスチックを作りだしているのは、わたしたち人間ですから、このまま放っておくわけにはいきません。世界のあちこちで、プラスチックごみを減らす取り組みが始まっています。

世界の主要国が地球全体の問題について考える首脳会議(G7)^{*}は2018年6月、それぞれ自分の国でプラスチックごみを減らす努力を

していこうという「海洋プラスチック憲章^{*けんしょう}」をまとめました。プラスチックの使用を減らしていくことを、この場で世界に約束したのです。

その翌月^{よくげつ}、世界的なコーヒーチェーンは、使いすてのプラスチック製ストローの使用を2020年でやめると発表しました。ハンバーガーチェーンも、^{*}英国と^{*}アイルランドでプラスチック製ストローを紙のストローにかえていくといっています。日本でも、こうした動きがでています。

プラスチックのごみやマイクロプラスチックについての話を、テレビのニュースや新聞で見聞きすることが増えてきました。テレビや新聞は、世の中でおきていることをなんでも伝えてくれるわけではありません。それが社会にとって大きな問題であり、みんなで解決の方法を考える必要があったり、一人ひとりがどうしたらよいかを考える助けになったりすることがらを選んで、ニュースとして伝えます。つまり、プラスチックのごみは、^{せんもんか}専門家だけが考えればよいのではなく、みんなで考える必要がある問題だということです。

みなさんのまわりを、ちょっと見てみてください。シャープペンやボールペン。スーパーマーケットで売っている肉や魚の容器。^{あうせいせんい}合成繊維でできた衣服。これらはすべてプラスチックです。プラスチックは、わたしたちの生活のいたるところに入りこんでいます。

ふだんの生活では、そのプラスチックがやがてどうなるのかを、あまり考えていなくてもいいかもしれません。じょうぶで長く使えるというプラスチック製品の長所が、いったんごみになれば、自然に分解されることもなく、いつまでも地球を汚したままになるという短所が変わります。プラスチックは、ごみとして考えた場合、あつかいにくい、とても困ったものなのです。

プラスチックごみは、紙などのほかのごみとは分けて回収^{かいしゅう}し、リサイクルすることががすすめられています。では、このリサイクルは、何のためにするのでしょうか。

たとえば、水では汚れが落ちにくいのでお湯を使ったとします。お湯をわかすにはエネルギーが必要です。エネルギー源^{げん}として石油を使ったとすると、必要な石油の量は、そのプラスチック製品を石油から新しく作るより多いという見方もあります。リサイクルのためにきれいに洗おうとしてお湯を使うと、かえってたくさん石油を使ってしまうことになるのです。

また、ジュースを売るとき、ペットボトルの代わりに、くりかえし使えるガラスのびんを使ったとしましょう。たしかにプラスチックの節約にはなりますが、重くなるので、トラックなどで運ぶときに、より多

くのカソリンを使うことになります。プラスチックを使わないようにするためにガソリンをたくさん使うというのでは、何のためにプラスチックを節約しているのかわかりません。

食べ物を包むプラスチックは、その食べ物が傷まないようにする役目もはたしています。もしプラスチックを使わないことにすれば、食べ物が傷んだりくさったりしやすくなって、食べられずに捨てなければならぬ食べ物が増えるかもしれません。これも資源しげんのむだ使いです。

プラスチックをどのようにリサイクルすればよいのか。プラスチックをできるだけ使わないようにしたとき、かえってむだやごみが増えるのではないか。どうすれば資源の節約になり、しかも、プラスチックごみで汚れていない地球でくらすことができるのか。プラスチックは、わたしたちの生活に深く入りこんでいるだけに、さまざまな社会の問題とも結びついています。こうした問題に答えるには、プラスチックごみのことだけではなく、わたしたちの暮らしや社会のしくみ全体を考えていかなければなりません。わたしたちはこれから、どういう社会をどのようにして作っていけばよいのか。それは、わたしたち一人ひとりが考えなければならない問題です。

（保坂直紀「クジラのおなかからプラスチック」による）

〔注〕 タイ—— タイ王国のこと。

生息—— 生物がすんで生活していること。

主要国—— 世界のなかで中心となっている国々。くにぐに

首脳会議しゅのうかいぎ（G7）——（日本・アメリカ・イギリス・ドイツ・

フランス・カナダ・イタリア）の7か国の大統領や首相しゅしやうたちが世界の問題について話し合う会議。

憲章けんしょう—— 理想として決めた、人々にとつて大切な決まり。

英国—— イギリスのこと。

アイルランド—— イギリスの主要部をなす島の西方にある島。

合成繊維ごうせいせんい—— 化学繊維のうち石油などからつくったもの。

〔問題1〕

「クジラの胃から、80枚をこえるプラスチックの袋がでてきた」とありますが、これはなぜですか。五十五字以上七十字以内で書きなさい。

〔問題2〕

「海に出たプラスチックのごみを、わたしたちは、まわりまわって食べてしまっている」とありますが、「わたしたち」が「食べてしまっている」とはどういうことですか。五十五字以上七十字以内で書きなさい。

〔問題3〕

「わたしたちの生活に深く入りこんでいる」とありますが、プラスチックとわたしたちの生活とのかかわりの中でどのような問題点があり、その解決を目指す上でどのようなことを考えなければならないと思いますか。文章全体の内容にそって、四百二十字以上四百六十字以内で書きなさい。ただし、あとの条件にしたがうこと。

条件 次の三段落構成にまとめて書くこと

- ① 第一段落では、プラスチックとわたしたちの生活とのかかわりについて、本文の内容にそって述べる。また、そのときにプラ

スチックがわたしたちの生活とかわっている理由についても述べること。

- ② 第二段落では、①で書いたことをいまえ、地球全体にいきよ
- うをあたえると考えられる問題点について述べる。

- ③ 第三段落では、②で書いたことの解決を目指すために必要なこと、および、あなたが日常生活の中で取り組めることを述べる。

※ 全体として四百二十字以上四百六十字以内で書き、各段落の分量は自分で考えること。

なお、次の《注意》にしたがって書きなさい。

《注意》

段落をかえたときの残りのますめは字数として数えます。

ただし、問題1・問題2は、一ますめから書き、段落をかえてはいけません。

、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

1

次の資料A、資料Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(丸で囲んだ数字が付いている言葉には、それぞれ資料のあとに〔注〕があります。)

資料A

これから社会に出ていこうとする学生たちを対象とした講演会で、学生にこんな質問をしたことがあります。

たとえば、広い体育館があつて「ここで何をしてもいいよ」と言われたら、どうしますか? 「どこでもいいから、寝てください」と言われたとしても、たぶん、ほとんどの人が体育館のど真ん中で寝たいとは思わないはず。

やっぱり、近くに壁があるところに行こうとするんじゃないだろうか。自分の周りに防御^{ぼうぎょ}してくれるもの、守ってくれるものが欲しい。自分がひとりぼっちだと感じないですむような囲いを求めてしまふ。

「自由に生きる」というのは、その囲いを出て、まっさらで何の囲いもない場所に、ぽつんとひとり、立つことなのだと思います。

ものすごい孤独感^{こどくかん}や、心許^{こころもと}なさ、自分自身の頼り^{たより}なさにさらされて、身がすくむような思いをするかもしれない。それを感じないですむように、人は群れで生きるのでしょう。

② 囲いの中にいて、自分の所属する コミュニティーの価値観^{かちかん}に合わせ③ ていれば、安心だし、自分で何かを判断する必要がないのですから、

ラクです。「群衆^{ぐんしゅう}」というのは、つまり人が身を守るための囲いでもあるんです。

そこが自分に合わない場所だと、囲いに合わせることはかなり息苦しい。反対に④ しつくりとくる場所なら、案外苦にならなかったりもする。いずれにせよ、人はその場に適応するために、周りの価値観と自分の価値観の⑤ せめぎ合いを、どうにかやりくりしながら生きています。

どこにいても、マイペースに振る舞える人もいれば、みんなといると自分を出せないという人もいる。自分ではうまく振る舞っているつもりでも、実際は体を縮こ^{ちぢこ}まらせている人もいるはずです。

旅に出て、自分のことを誰も知らない場所に身を置くと、そのことがよく実感できます。それまでの経験や価値観が通用するかどうかもわからない場所で、人は自分を試^{ため}される。ましてそれがひとり旅なら、何かをするたびに自分で判断しなければならいわけで、まっさらな場所で「お前は何者なのか」と問われているような気持ちになるはず⑥ です。そうやって自分で考え、自分で感じ、自分の手と足を使って学んでいくことを「経験」と言うのだと思います。囲いの外に出なければ、血肉となるような経験は得られないでしょう。

質問を変えてみましょう。もし自分が帰る場所も国籍^{こくせき}もなかったとしたら、それでも平気で生きていけますか?

講演会では、圧倒的に「ノー」という答えが多かった。やはり、

⑥ 帰属する場所がないというのは、かなり心許ないのだと思います。

難民の人たちのように、実質的に国籍がない、帰る場所がないという人もいれば、私のように早いうちから海外に行ってしまったせいで日本人であるにもかかわらず、国籍と⑦ シンクロしない感性が育まれてしまう場合もある。

私は今、イタリアに住んでいるのですが、これまで中東のシリア、エジプト、ポルトガル、アメリカ、いろんなところを転々としながら暮らしてきました。

行く先々で受け入れがたい差異を感じることもあれば、その場所に適應するために受け入れざるを得ないこともあって、いろんな土地でいろんな文化や価値観に揉まれるうちに、自分がどこかに所属しているという感覚がどんどんあいまいになって薄れていき、いつの間にか囲いの外に、身ひとつで出ていたというわけです。

(ヤマザキマリ「国境のない生き方 私をつかった本と旅」による)

〔注〕

① 心許なこころもとき……どこかたよりなくて不安なさま。

② 身がすくむ……おそれやきん張、ひ労などでからだがかわばって動かなくなる。

③ コミュニティー……地域社会など仲間意識をもって共同の生活をする

集団。

④ しっくりとくる……物事や人の心がほどよく合っている。

⑤ せめぎ合い……対立してたがいに争うこと。

⑥ 帰属する……特定の国や団体の一員としてそれにしたがう。

⑦ シンクロしない……一つにならない。シンクロはシンクロナイズの略。

資料 B

問題が理解できれば解決できたと同じことだ、とよくいわれる。突然の事件が起こると、解決すべき問題がどこにあるのか、知識や経験のない人はすぐにはわからない。知識があっても、それが机上で暗記しただけの知識では、いざというときに役に立たない。知識は⑧ 経験に裏打ちされて初めて使えるものになるし、そうやって初めて知識といえると考えてもよい。

その一方で、経験さえあれば世の中に通用するわけでもない。個別の経験をいくら積んでも、組織の⑨ 不祥事のように経験とかけ離れた状況が突然現れたときには、しっかりした知識がなければ対応できない。的確に問題を解決するには、危機が起ってからではなく、ふだんから常に問題の理解を⑩ 怠らないことが大切である。

こう考えると、問題を理解し、解決できるかどうかは、問題に関与する⑪ 当事者がいかに「自分のこととして」問題をとらえているにかかっている。⑫ 突発的な問題への⑬ 迅速な対応は、当事者が問題の意味を常に問うているかどうかのカギになる。

自分にとっての問題の意味とは、自分の関心や希望と、具体的な目標やその達成を^⑭阻む制約との間の関係のことである。卒業試験に合格すれば新しい人生が待っているという学生の場合、達成すべき目標は卒業試験に合格すること、制約になっているのは試験の難しさであり、問題の意味とは人生が開けるといふことである。

また、問題を解くには、まず問題を発見し、理解しなければならぬ。^⑮混沌とした情報のなかから、自分にとって意味のある目標、それを達成するための手段、目標の達成を妨げるいろいろな^⑯制約条件を見つけ出すことが、まず大切になる。むしろ、問題がわかれば解けたと同じことだといわれるように、意味のある問題を発見したり理解したりすることのほうが問題を解くより大事になることも多い。

問題の発見や理解、問題の解決、これらはどれも思考のはたらきによるものである。ところが、こうした思考のはたらきは、複雑であるにもかかわらず、誰でも身につけていくことができる。問題解決のための思考のはたらきは、生後二カ月ぐらいから始まり、生涯にわたって発達していく。問題の意味を発見し、理解し、解決していく思考のはたらきは、誰にでも、またどんな現実の場面にも登場する基本的な心の機能の一つである。

思考とは、いろいろな情報を心の中で結びつけたり、組み合わせたり、並べ替えたり、比較したり、^⑰系列化したり、変換したり、新しい情報を創り出したりするはたらきのことである。また、こうしたはたらきを総合して、まわりの状況や心の中が細かく変化しても、それにとらわれず、

いろいろな状況のどこが似ているか、何が原因で何が結果なのかを深く探ること、論理的にしっかりと判断をすること、新しい情報を創造することなどを、一貫して扱う心のはたらきである。また、こうしたはたらきによって、さまざまな情報の間の関係を創り出し、^⑱構造化していくことも、思考の機能の大事な部分である。

問題解決とは、何が問題かを理解するとともに、その問題を解く方法を見つけることであり、問題を発見することも含む。また、意思決定とは、行動がもたらす価値を予測して適切な行動を見出したり、複数の行動の予測価値を比較して適切な行動を選択することという。

問題解決と意思決定の間にも深い関係がある。たとえば、問題を解くときに一度に解けてしまうことは^⑲稀で、^⑳副次的な目標を立て、その副次目標を達成するための目標をさらに立てたり、試行錯誤を繰り返して答を模索したり、意思決定を次々と繰り返すことが多い。

(安西祐一郎「心と脳―認知科学入門」による)

〔注〕

- ⑧ 経験に裏打ちされて……経験によって、信用できる状態になって。
⑨ 不祥事……よくない事件。
⑩ 怠らない……なまけたり、さぼったりせず、するべきことをする。
⑪ 当事者……そのことがらに、直接関係している人。
⑫ 突発的な……とつぜん起こるような。
⑬ 迅速な……とてもすばやい。
⑭ 阻む……じゃまをする。
⑮ 混沌とした……物事が複雑にいり混じって、区別がはっきりしない。
⑯ 制約条件……活動の自由を制限する条件。
⑰ 系列化したり……つながりや関係を整理したり。
⑱ 構造化していく……仕組みを作っていく。
⑲ 稀……めったにないこと。
⑳ 副次的な……中心となることがらに続くような。

〔問題1〕

資料A

に、いつの間にか囲いの外に、身ひとつで出ていたというわけです。とありますが、「囲いの外に出る」とはどのようなことだと筆者は考えていますか。百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や・や□）なども字数に数えなさい。

〔問題2〕

資料B

で、問題がわかれば解けたと同じことだといわれるとありますが、筆者がこのように述べる理由を百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や・や□）なども字数に数えなさい。

〔問題3〕

資料B

に、問題解決とは、何が問題かを理解することともに、その問題を解く方法を見つけることとあります。

あなたが資料Aの自分のことを誰も知らない場所に身を置くという状況ようになったとき、どのように問題を解決していきますか。

資料A、資料Bの内容をふまえて、具体例をあげながら四百字以上四百五十文字以内で説明しなさい。

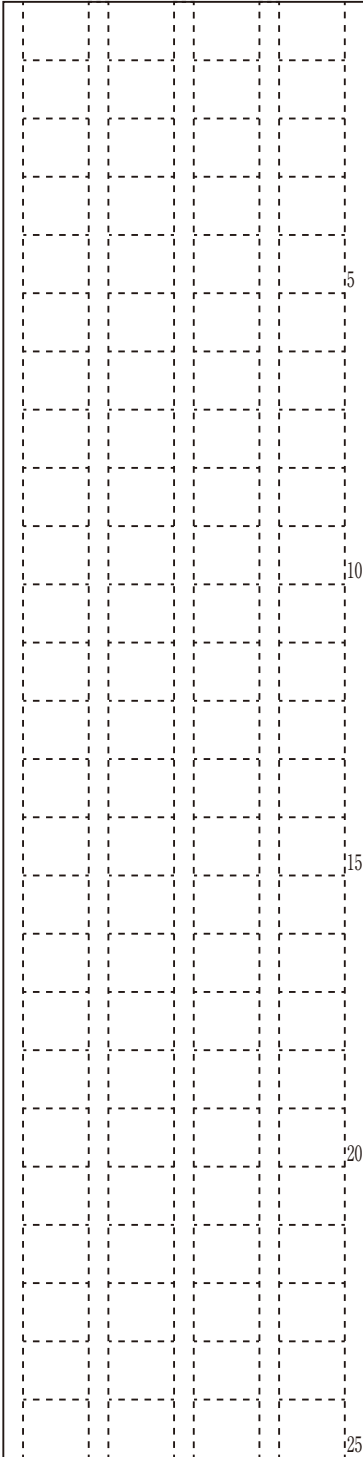
ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や・や□）も字数に数えなさい。

ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や・や□）も字数に数えなさい。

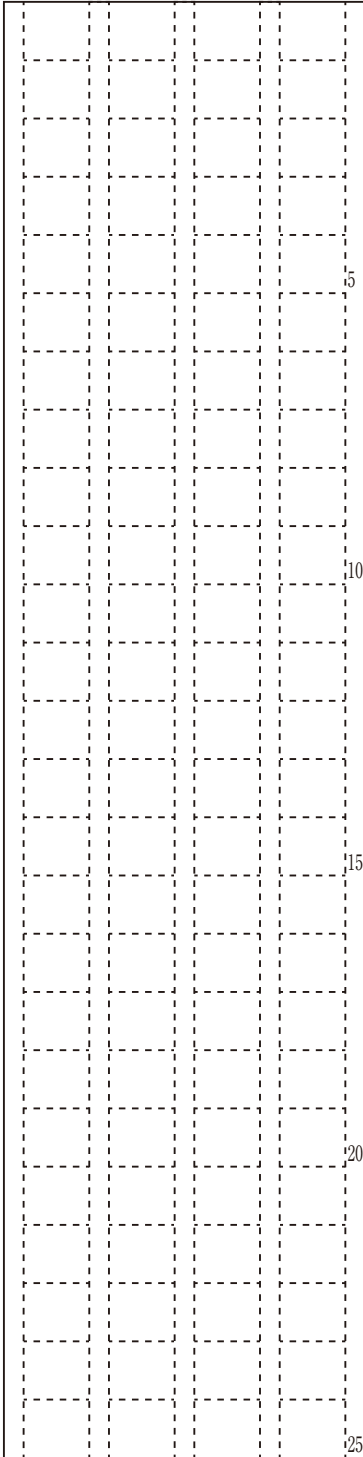
解答用紙 適性検査Ⅰ

1

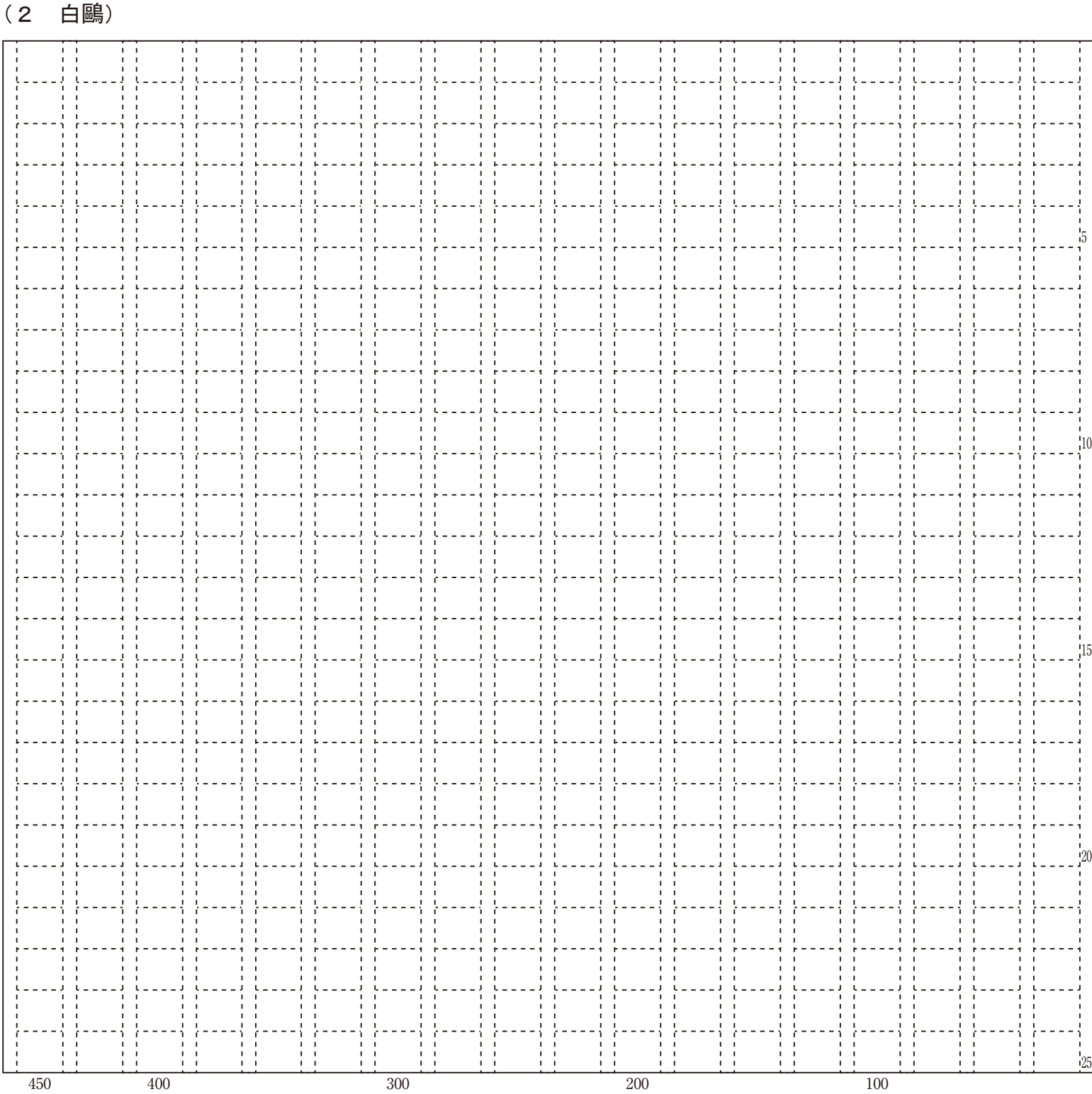
〔問題1〕



〔問題2〕



〔問題3〕



※									

※

※				

※

※				

※

受 検 番 号

得 点
※

※のらんには記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**6** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立南多摩中等教育学校

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

サカナだって考えているはずだ。でも何を？ どのように？ どれぐらい複雑に？ どれぐらい深く？

感覚や運動も含めて、脳のどのようなはたらきが「サカナの考え」を作り出しているのかを明らかにしたい。とは言うものの、正直なところ、研究はほとんど進んでいないと言ってよい。

サカナはヒトが理解できるような言語をもっていない。

「今、何を考えてそんなことをしたんですか」

などと聞くわけにはいかない。行動とか、感覚器とか、脳のつくりなんかから少しずつ解きほぐしていくことになる。

サカナがもっているしくみ、たとえばサカナの心の作られ方、を理解することは、人間の理解にもつながる。もちろん、サカナにはサカナなりの、ヒトにはヒトなりの心がある。その一方で、進化的に共通の祖先をもっている以上、基本的な、かつとても重要な部分で、心のしくみを共有しているのだ。

サカナたちが何を考えながら生活しているのかを想像することは、別の角度から人間を眺めることでもある。もちろん、わたしたちはサカナではない。だから、本当の意味で「サカナであるということとはどういうことか」を理解(実感と言ったほうがよい)するのは難しい。

どうしても、擬人化を通じて理解に「近づく」しかない。

サカナに限らず、動物を研究するうえで、擬人化というのは一種のタブーとなっている。客観的でないというわけだ。でも、動物の心を理解しようとする試みを、擬人化なしで乗り切ろうというのはかえって無理があるのではないか。

だってわたしら人間だもの、人間の心身を通してしか物事を見ることはできない。

マグロそっくりに泳ぐロボットを作ったって、ナマズのヒゲの感覚を再現するプログラムを作ったって、結局は、それが「どんな感じか」を理解したがつているのは人間ですからね。

こう考えると、擬人化も全否定されるべきものではないはずだ。もちろん、単なる当て推量ではなく、科学的な事実を踏まえたうえでの話だけだ。

サカナは水の中に棲んでいるし、膨大な種類(2万5000種を超える。哺乳類はその5分の1以下)が、それぞれの得意分野を活かした生き方をしている。人間を基準にしたものさしでは測りきれない。

だからといって、あきらめる必要はない。さいわいわたしたちは想像し、共感するという優れた能力をもっている。

サカナたちが一体何を考えながら生活しているのかを想像してみたい。驚くべき能力と、もしかしたら豊かな内面的世界が広がっているかもしれない。

サカナは概して臆病である。

よく慣れたベツト魚は別として、人が近づいたらさっと逃げる。物陰に潜り込んで、しばらく出てこない。

サカナに限らず、野生動物には、危ない（かもしれない）対象からの距離に応じて、「安全圏」「警戒圏」「逃避圏」のような、警戒度の程度が異なる範囲がある。

安全圏なら、捕食者がいてもものんびりエサを食べたりしている。しかし、ひとたび人間とかが警戒圏に入ってくると、一斉にそちらを向いて、いつでも反応できる体勢をとる。さらに接近して逃避圏に入ると、わっと逃げたり隠れたりする。

学生時代、わたしは瀬戸内の海の近くに住んでいた。瀬戸内海には、いくらでも素潜りに適した海岸があるのだが、だいたい決まった場所に行く。K島の先端あたりがお気に入りであった。この海岸には大きな流木が打ち上げられていて、これが遠目には恐竜のように見えた。わたしはここを勝手に恐竜海岸とよんでいた。その流木は今もつない。海岸は岩場で、いろんなサカナが泳いでいる。10センチメートルぐらいのメジナの子どもが群れをなしている。ゆっくり2メートルぐらいの距離まで近づくと、一斉にこちらを向く。

とぼけた正面顔がぎっしり並んでいる。噴き出しそうになるが、海中で噴き出すとかなり危険である。こらえつつも少し近づくと、メジナたちは一斉に岩陰に隠れる。

サカナが何かに注意を向ける時、背ビレ、腹ビレ、尻ビレを立て、胸ビレ、尾ビレを広げて水中で静止する。対象がはっきりしていれば、これに正対する。

これを定位反応という。最大限の情報を得ようとする行動である。この時たいい呼吸がゆっくりになる。

人間でも、注意を向ける時は似たような状態になる。緊張して、息を詰めてじっと見つめ、耳を澄ます。

自分にとって脅威ではないと判断すれば、注意を解く。もしくは、好奇心の強いサカナであれば、対象に接近してさらによく吟味する。

サカナにも好奇心はある。ダイビングや釣りなどで、サカナをよく見る機会がある人たちはそれを疑わない。でも、「サカナにだって好奇心はあるんですー」と声高に叫んだところで、「気のせいだよ」と言われればそれまでである。

それじゃあちゃんと測ってやろうじゃないの。

どうやって調べるかというと、まず1尾のキンギョが入った大きな水槽を用意する。この水槽の真ん中に、30分間だけ赤色のウキを浮かべる。

これまで経験したことのない物体（新奇物体と言う）に遭遇したキンギョは、ウキに対して定位反応を示す。しばらくすると定位反応に続いてウキをつつき始める。ウキをつつくというのは、積極的な探索行動である。

ウキはただのプラスチックの玉だけど、初めて見るものなので、警戒しつつ探索する。よって、つつき回数は少ない(図白丸)。これを毎日繰り返すと、5日目には、ウキを浮かべた途端に「おお、今日も来たか」というように盛んに定位反応とつつき行動を行うようになる。ただし、毎日同じことの繰り返しなので、ウキを浮かべてしばらくたつと注意を向けなくなる(図黒丸)。

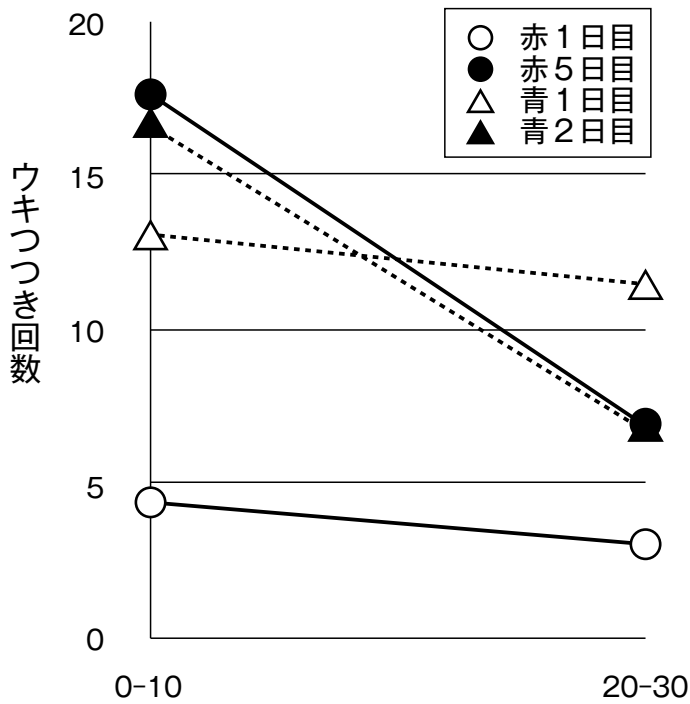


図 ウキを入れて最初の10分間(0-10)と最後の10分間(20-30)のつつき回数。キングヨ12尾の平均。

これって、飽きちゃったってこと?

そこで、6日目には同じ形の青色のウキを浮かべてみた(キングヨにはちゃんと色がわかる)。すると、

「お、いつものと似ているけど、色が違うぞ。特に警戒するほどでもなさそうだが、じっくり調べてやるか」

ということで、30分間頻繁につつき続ける(図白三角)。

次の日にまた青いウキを浮かべると、「お、また青が来たか」というわけですぐにつつき始める。しかし、赤ウキの時と代わり映えがしないので、すぐに飽きてしまつてつつかなくなる(図黒三角)。

さて、この研究から何がわかったかというと、何のことはない、わたしたちが経験的に知っているサカナの行動を客観的・定量的に示したということだ。でもそれが難しい。

これをもつて、サカナにも好奇心があると言ってよいだろうか。「好奇心」というと、それに基づく行動よりも、どちらかと言うと内面的な心のもちようを指す時に使われる。好奇心は「自発的な探索行動」の下敷きになっている。先ほど紹介したキングヨの行動は、わたしたち人間が「好奇心をもつて」自発的に探索する行動と対応していると考えてよいだろう。だとすると、キングヨの探索行動は「サカナ的好奇心」の発露と考えるのが自然ではなからうか。

(吉田将之「魚だって考える」による)

〔注〕

感覚器——目は光、耳は音などいろいろなし激を感じ取る器官。

擬人化——人以外のものを人にたとえて言い表すこと。

タブー——してはならないこと。

概して——おおざっぱにいつて。だいたい。

捕食者——他の生物をつかまえて食べる生物。

素潜り——せん水用の器械、器具などを用いずに水中にもぐる
こと。

正対——真正面に向き合うこと。

吟味——よく調べること。

ウキ——魚をとる時につり系につけて水にうかせ、目印にするもの。

発露——現れ出る状態のこと。

〔問題１〕

ウキに対して^{ていはんのう}定位反応を示す。とありますが、この時キンギョが取った行動とその目的を、四十字以内で説明しなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一ますめから書き始めること。

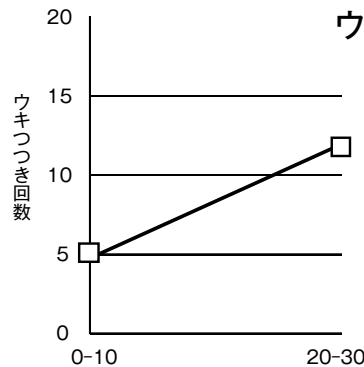
〔問題２〕

次の日にまた青いウキを^う浮かべると、とありますが、さらに次の日にこの水そうに青いウキと同じ形の黄色のウキを浮かべるとします。本文中の調べた結果をもとに考えると、キンギョはどのような反応^{はんのう}を示すと考えられますか。ただし、キンギョは黄色が見分けられるものとして。

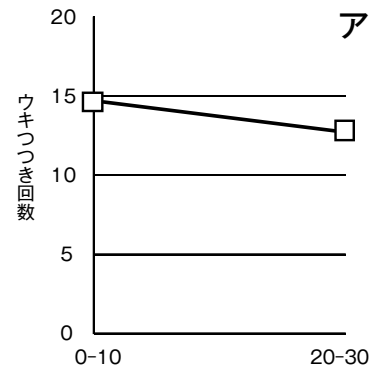
(1) キンギョの反応を表したグラフとして、あなたの考えと最も近いものを、次のアからエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(2) (1)のように考えた理由を、四十五字以上五十五字以内で具体的に書きなさい。その際、「けいかい」という言葉を使わず。

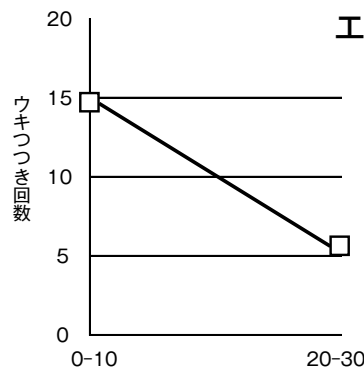
なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一ますめから書き始めること。



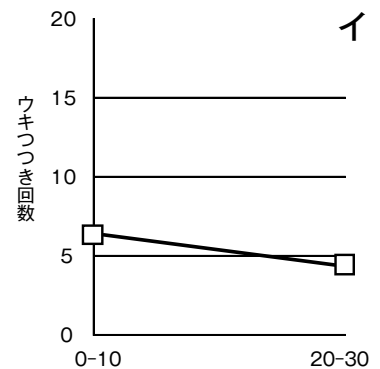
ウキを入れて最初の 10 分間 (0-10) と最後の 10 分間 (20-30) のつき回数。キンギョ 12 尾の平均。



ウキを入れて最初の 10 分間 (0-10) と最後の 10 分間 (20-30) のつき回数。キンギョ 12 尾の平均。



ウキを入れて最初の 10 分間 (0-10) と最後の 10 分間 (20-30) のつき回数。キンギョ 12 尾の平均。



ウキを入れて最初の 10 分間 (0-10) と最後の 10 分間 (20-30) のつき回数。キンギョ 12 尾の平均。

〔問題3〕

筆者は「サカナの考え」に興味をもち、実際にサカナを用いて研究しています。このように、実際に行動することであることは多くあります。同じようにあなたが興味をもち、本やインターネットなどで得た知識をもとにして、実際に見たりふれたりしたことより深く理解できたあなたの経験について、次の〔手順〕と〔きまり〕にしたがって、四千字以上五百字以内で書きなさい。

〔手順〕

- 1 あなたが興味をもったことを書く。
- 2 1に対して、本やインターネットなどを用いた調査でわかったことを書く。
- 3 1、2をもとにして、実際に見たりふれたりしたことで、あなたの理解がどのように深まったかを具体的に書く。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。かくだんらく
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）

○。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

[illegible][illegible][illegible]

この中には何も書かないこと

[illegible]

受 検 番 号

得 点
※

※のらんは、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1

次の文章1と文章2とを読み、あとの問題に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

丁大学で植物学の研究をしている本村紗英は、研究室の仲間や出入りの洋食店店員である藤丸陽太とともに、構内の植え込みの一角に植えられているサツマイモの収穫を手伝うことになった。自分もこれまで何度となく目にしていた植え込みにサツマイモが植えられているとは思ひもなかったことに気づき、本村はもつと植物というものに敏感にならなければ、と考える。

反省した本村は、しゃがみこんで植え込みのサツマイモの葉を眺めた。地表に近い場所で、大小の葉が一生懸命に太陽へ顔を向けている。ひしめきあいながらも、互いの邪魔にならぬようにということなのか、葉柄の長さはさまざまだ。長い葉柄を持ち、周囲の葉から飛び出したものの。葉柄は短いけれど、ほかの葉のあいだからうまく顔を覗かせているもの。

けなげだ、とつい擬人化して感情移入してしまう。頭がいいなあ、と感心もする。植物に脳はないから、頭もお尻もないわけだが、それでもうまく調和して、生存のための工夫をこらす。人間よりもよっぽど頭がいいなと思うことしきりだ。

だが、植物と人間のあいだの断絶も感じる。本村は人間だから、な

んとなく人間の理屈や感情に引きつけて、植物を解釈しようとする癖が抜けない。けれど、脳も感情もない植物は、本村のそんな思惑とはまったく隔絶したところで、ただ淡々と葉を繁らせ、葉柄の長さを互いに調節し、地中深くへと根をのばす。より多く光と水と養分を取りこみ、次代に命をつなぐために。言葉も表情も身振りも使わずに、人間には推し量りきれない複雑な機構を稼働させて。

そう考えると、どれだけ望んでも本村には永遠に理解できない、気味悪く得体の知れぬ生き物のように、植物が思われてくるのだった。サツマイモの葉っぱのほうは、本村が「ちよつとこわいな」と思っていることなど、もちろんまるで感知していないだろう。これからイモを掘られるとは微塵も予想せず、この瞬間も元気に光合成を行っている様子だ。本村とは少し距離を置き、藤丸もしゃがんでサツマイモの葉を眺めていた。「うお」と藤丸が小さく声を上げたので、本村は顔をそちらに向けた。

「葉っぱの筋がサツマイモの皮の色してる。すげえ」

藤丸は独り言のようにつぶやき、よりいっそう葉に顔を近づけて、何枚かを熱心に見比べている。

本村は手もとの葉を改めて眺めた。言われてみれば、たしかに。ハート型の葉に張りめぐらされた葉脈は、ほのかな臍脂色だった。「こういう色のイモが、土のなかで育ってますよ」と予告するみたいに。

血管のような葉脈を見ていたら、最前感した気味の悪さは薄らいだ。たしかに植物は、ひととはまったくちがう仕組みを持っている。人間の

「常識」が通じない世界を生きている。けれど、同じ地球上で進化してきた生き物だから、当然ながら共通する点も多々あるのだ。

自分の理解が及ばないもの、自分とは異なる部分があるものを、すぐに「気味が悪い」「なんだかこわい」と締めだし遠ざけようとしてしまふのは、私の悪いところだ。うーん、人類全般に通じる、悪いところかもしれない。本村はまたも反省した。人間に感情と思考があるからこそ生じる悪癖だと言えるが、「気味が悪い」「なんだかこわい」という気持ちを乗り越えて、相手を真に理解するために必要なもまた、感情と思考だろう。どうして「私」と「あなた」はちがうのか、分析し受け入れるためには理性と知性が要求される。ちがいを認めあうためには、相手を思いやる感情が不可欠だ。

植物みたいに、脳も愛もない生き物になれば、一番面倒がなくて気楽なんだけど。本村はため息をつく。思考も感情もないはずの植物が、人間よりも他者を受容し、飄々と生きているように見えるのはなんとも皮肉だ。

それにしても、藤丸さんはすごい。と本村は思った。私がつだうだ考えているそばで、藤丸さんはサツマイモの葉っぱをあるがまま受け止め、イモの皮の色がそこに映しだされていることを発見した。なんてのびやかで、でも鋭い観察眼なんだろう。きっと藤丸さんは、だれかを、なにかを、「気味悪い」なんて思わないはずだ。一瞬そう感じることがあったとしても、「いやいや、待てよ」と熱心に観察し、いろいろ考えて、最終的には相手をそのまま受け止めるのだろう。おおらか

で優しいひとだから。

*かんたん
感嘆をこめて藤丸を見てみると、視線に気づいた藤丸が顔を上げ、照れたように笑った。

(三浦しをん「愛なき世界」による)

〔注〕

葉柄——葉の一部。柄のように細くなったところ。(図1)

擬人化して——人間以外のものを人間と同じに見立てて。

隔絶した——かけはなれた。

微塵も——すこしも。

葉脈——葉の根もとからこまかく分かれ出て、水分や養

分の通路となっている筋。(図2)

最前——さきほど。さっき。

飄々と——こたわりをもたず、自分のペースで。

感嘆をこめて——感心し、ほめたたえたいような気持ちになって。

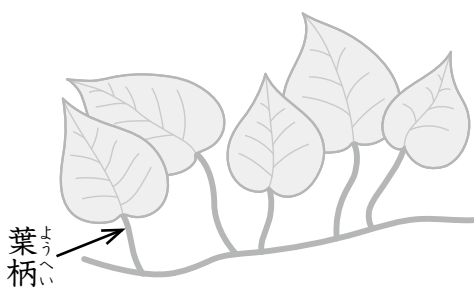


図1

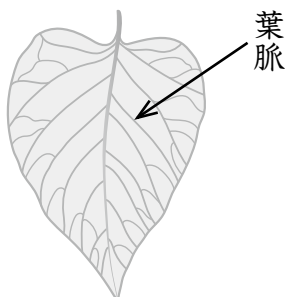


図2

文章2

ばくは昔からガという虫が好きだ。そもそも、なぜ昼間飛はないで夜飛ぶのだろうというところに興味がある。

昼間飛んだらいいじゃないか。暗いと敵がいなくて安全だというが、夜に出てきてエサを探索敵もいる。暗ければ安全とは決していえないだろう。

実際に、昼間飛ぶガもいる。それは夜飛ぶガの苦勞はしていないはずだ。それでも夜飛ぶなら、昼間飛ぶよりどこがいいのだろう、などと考えているとますますなぜ夜飛ぶのか、わからなくなってくる。

それぞれに、それぞれの生き方があるのだ、といういいかげんな答えしか残らない。

それなりに苦勞しているんだ、としかいいようがない。

しかし、それなりに、どういう苦勞をしているのだろうということ、いろいろ考えてみるのがおもしろい。それは哲学的な思考実験に似ている。

* エポフィルスにせよ、ガにせよ、苦勞するには苦勞するだけの原因があり、仕組みがある。それは何かということを探るのだ。

たとえば節足動物は、なぜ節足動物になってしまったか、ということから考える。たまたま祖先がそうだったから、彼らは体節を連ねる外骨格の動物になっていった。

すると体の構造上、頭の中を食道が通り抜けることになり、脳を発達させると食道にしわ寄せがいくようになった。ではどうしたらいいか。

樹液や体液、血液といった液状のエサを採ることにした。それが、その形で何とか生き延びる方法だった。節足動物といういきものは、そういう苦勞をしている。

動物学では、現在の動物の形が必ずしも最善とは考えない。

そうならざるをえない原因があり、その形で何とか生きているのだと考える。

なぜそういう格好をして生きているのか、その結果、どういう生き方をしているのか。そういった根本の問題を追究するのが動物学という学問なのだと思う。

いろいろないきものを見ていくと、こんな生き方もできるんだなあ、そのためにはこういう仕組みがあって、こういう苦勞があるのか、なるほど、それでやっと生きていられるのか、ということが、それぞれにわかる。

わかってみると感激する。その形でしか生きていけない理由を、たくさん知れば知るほど感心する。

その感激は、原始的といわれるクラゲのような腔腸動物でも、高等といわれるほ乳類でもまったく同じだ。

このごろ、よく、生物多様性はなぜ大事なのですかと聞かれる。ばくは、簡単に説明するときはこんなふうにいる。

* 生態系の豊かさが失われると人間の食べものもなくなります。食べものも、もとは全部いきもので、人間がそれを一から作れるわけではないのですから、いろんなものがいなければいけないのです、と。

ただそれは少し説明を省略したい方で、ほんとうは、あらゆるいきものにはそれぞれに生きる理由があるからだと思っている。

理由がわかって何の役に立つ、といわれれば、別に何の役にも立ちませんよ、というほかない。しかし役に立てるためだったら、こんな格好をしていないほうがいいというものがたくさんある。

人間も、今こういう格好をしているが、それが優れた形かどうかはわからない。これでも生きていけるという説明はつくけれども。

だからこそ動物学では、海の底のいきものも人間も、どちらが進化していてどちらが上、という発想をしない。

⑦ いろんないきものの生き方をたくさん勉強するのいいと思う。ぼくはそれでとてもおもしろかったし、そうすることで、不思議に広く深く、静かなものの見方ができるようになるだろう。

いきものは全部、いろいろあるんだな、あっていいんだな、ということになる。つまりそれが、生物多様性ということなのだと思う。

(日高敏隆「世界を、こんなふうに見てごらん」による)

〔注〕

思考実験

——(起こりにくいことが)もし実際に起こったらどうなるか、考えてみることに。

エポファイルス

——カメムシの仲間。水中に住みながら空気呼吸をする。

節足動物

——ガヤクモなど、足にたくさん節をもつ動物。

体節を連ねる外骨格の動物

——体のじくに沿って連なった、

からやこうでおおわれている動物。

腔腸動物

——クラゲやサンゴなど、口から体内までの

空所をもつ、かさやつつのような形をした水中の動物。

生物多様性

——いろいろなちがった種類の生物が存在すること。

生態系

——生物とまわりの環境とから成り立つ、た

がいにつながりのある全体。

〔問題1〕

藤丸、藤丸さんというように、同一の人物について、書き分けがされていますが、その理由について、四十五字程度で分かりやすくまとめなさい。

〔問題2〕

⑦ いろいろな生きものの生き方をたくさん勉強するのいいと思う。とありますが、筆者がそう思うのは、どのようなものの見方ができるようになるからでしょうか。〔文章1〕の表現を用いて、解答らんに合わせて四十字程度で答えなさい。

〔問題3〕

次に示すのは、〔文章1〕と〔文章2〕についての、ひかるさんとかおるさんのやりとりです。このやりとりを読んだ上で、あなたの考えを四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、下の条件と〔きまり〕にしたがうこと。

ひかる――

〔文章1〕を読んで、「ちがい」ということについて、いろいろと考えさせられました。

かおる――

「ちがい」という言葉が直接使われてはいませんが、〔文章2〕にもそういったことが書いてあると思います。

ひかる――

わたしも、みんなはそれぞれがっていると感じるべきがあります。

かおる――

学校生活のなかでも、「ちがい」を生かしていった方がよい場面がありそうですね。

条件

次の三段落構成にまとめて書くこと

- ① 第一段落では、〔文章1〕、〔文章2〕それぞれの、「ちがい」に対する向き合い方について、まとめる。
- ② 第二段落では、「ちがい」がなく、みんなが全く同じになってしまった場合、どのような問題が起こると思うか、考えを書く。
- ③ 第三段落では、①と②の内容に関連づけて、これからの学校生活のなかで「ちがい」を生かして活動していくとしたら、あなたはどのような場面で、どのような言動をとるか、考えを書く。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。（まずめの下に書いてもかまいません。）
- 。と」が続く場合には、同じまずめに書いてもかまいません。
- この場合、。で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのまずめは、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのまずめは、字数として数えません。

問題 1

[illegible]

45

50

40
20

受 検 番 号

得	点
※	

※のらんには何も記入しないこと。

得点



問題 2

[illegible]

45

ものの見方。

40 20

問題 3

✱	✱	✱	✱
---	---	---	---



(2 小石川)

[illegible]

440

400

300

200

100

20

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、7ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

次の「文章A」と「文章B」を読んで、それぞれの文章に
関する設問に答えなさい。（※印の付いている言葉には本文のあ
とに「注」があります。）

「文章A」

本の葉しおりが好きだ。

スピン（紐ひも）が付いている本は便利だけれど、スピンの付いて
いない本に、どの葉を使うか考えるのは楽しい。

革かわのもの、金属製のもの、プラスチックのもの、そして圧倒あつどうてき
的に多い紙のもの。いろいろ持っているが、クリップタイプのもの
はページに痕あとが付くので使わない。

どこかに旅行に行つて、お土産屋みやげやさんに入った時も、葉がある
とつい買つてしまう。既に売すでるほどたんまり持っているのに、で
ある。

それどころか、常に葉になる紙を探さがしている。お菓子かしの包み
紙や、一筆箋※こっぴつせんの表紙など、少し厚みがあつて綺麗な紙きれがあると、
葉のサイズに加工する癖くせがついている。そんなこんなが引き出し

ひとつに、入りきれないほどぎっしり詰つままっている。どうしても
捨すてることができない。

ここ数年は、洋服を買った時に付いているタグを葉にするの
がマイブームだ。某ぼうアメリカ資本※のファストファッションのタ
グは、厚みといい大きさといいデザインといい、葉にぴったりで
ある。そんな話をしたら、長いつきあいの編集者も同じことをし
ていると聞いて、なんとなく嬉うれしかった。

そのくせ、使う葉はだいたいいつも同じものに決まっているの
で、「これ、葉になるな」と加工したものや、タグを転用したも
のは引き出しに詰め込まれたままになってしまふ。時々引き出し
を開けて、ああ、こんなのもあった、これもあったと取り出して
眺ながめてみるが、結局また引き出しに戻もどして閉しめるだけだ。

しかも、これだけ葉を持っているくせに、旅先で読む本には葉
を使わない。なぜかというと、以前、お気に入りの葉を持って旅
に出たのだが、旅先で落としてきてしまい、とても悔くやしい思いを
したからである。だから、旅先で読んでいる本は葉代わりにオビ
を挟はさんだり、中に入っているチラシを挟はさんだりしている。我われなが
ら、なんだか矛盾※むじゆんしていると思う（こういう時のための葉で
はないか！）。

数年前までは、毎晩寝る前に本を一冊読みきれていたの、あまり葉を使うことはなかった。しかし、ここ数年、夜に弱くなつてすぐ眠くなってしまうようになり、読みかけの本がどんどん増えて、葉を挟んだままになっている本があちこちに積んである。

※読みさしの本は、気になるものだ。挟まれたままの葉が「早くここから出してくれ」と訴えているように感じる。すまんすまん、今、ちょっと続きを読む時間がないんで、もうしばらくそこで我慢してくれ、と言いたくなる。

その一方で、挟んだ葉がほんの少し上に出ている本の姿に惹かれる。「今読んでいる途中です」という風情にグッと来るのだ。電車の中で、向かい側に座っている人が本を読んでいて、降りる駅だと気付いてハッとして、サッと葉を挟んで立ち上がる姿にも、なぜかじーんとする。

結局のところ、私は「本を読む」という行為に魅せられているのだと思う。人が熱心に本を読んでいる姿には、どこかハッとさせられるものがある。そう感じるのは私だけではないらしく、昔から読書する人の姿はよく絵に描かれてきたし、その姿ばかり集めた写真集も出ている。

本を読んでいると、猫が膝や本に乗ってきて邪魔をする、という話もよく聞く。猫から見ても、人が本を読んでいる姿にどこか不思議なものを感じるのかもしれない。恐らく、主人がどこか別の世界に行ってしまったことに気付いていて、引き戻そうとしているのではないだろうか。

あらゆる情報が「流れてくる」ものや「享受する」ものになり、自分が情報を選んでいるのか、選ばれているのか、もはや不明である。モニター上で見る大量の文字情報は、みんなのつぺりと澄まし顔をしていて、どれが本当なのか、どれがダミーなのかちっとも分からない。もしこれが本ならば、だいたい一目見て、ぱらぱらめくってみれば、そのたたずまいや気配から、胡散臭いものか、真つ当なものか直感で判断できるのに。

モニター上で接する情報は、「読んで」いるのではなく、「眺めて」いると思えない。何かを調べようとしても、目にしたそばから消えてゆくし、あとに残るのは自分が物事の表層を撫でて、付け焼き刃にもならないものを、誰かとの会話で口にするためだけに引っ張ってきたという後ろめたさのみ。あまりにも膨大な情報の海に、誰もが難破しかけている。そのくせ、本当に知りたい

ことはネット上で手に入れられたためしがない。

「本を読む」というのは、それとは全く似て非なる行為だ。本という物体を手にとって開き、著者と対峙するのは、とても個人的で能動的な行為なのだと思う。一冊一冊が、まさに著者との一対一の真剣勝負。ガチンコ勝負は、いつだって面白い。だからこそ、こんなにも強く魅せられてきたし、これからも魅せられ続けるのだろう。

さて、溜まっていた仕事もようやく終わりに近付いた。この原稿を書き終わったら、しばらく積んでおいた本から一冊取り出して、閉じこめられていた葉を救出することにしよう。

(恩田陸「葉の救出」による)

〔注〕

一筆箋——かんたんな手紙や文を書くための紙。

タグ——商品についているふだ。

資本——ある仕事をするのに必要なお金。元手。

ファストファッション——最新の流行を取り入れながら、低価格におさえた衣料品を売る店の商品。

矛盾——ものごとの前後のつながり方が合わないこと。

読みさし——読みかけ。

享受——受け入れて自分のものにするここと。

ダミー——実物のように見せかけたもの。

胡散臭い——なんとなくあやしい。

付け焼き刃——そのときだけを、うまくごまかすためのやり方。

後ろめたさ——悪いことをしたと感じて、気がかりであること。

難破——こわれたり、しずんだりすること。

似て非なる——見かけは似ているが、実体は異なること。

対峙——向かい合うこと。

能動的——自分のほうから、働きかける様子。

ガチンコ勝負——正面からぶつかり合う本気の対決のこと。

〔問題1〕挟はさまれたままの葉しおりが「早くここから出してくれ」と

訴うったえているように感じる。とありますが、なぜ筆者はそのように感じるのですか。このときの筆者の気持ちをふまえて四十字以上五十字以内で書きなさい。ただし、下の〈注意〉にしたがうこと。

〔問題2〕「読んで」いるのではなく、「眺ながめて」いるとありますが、筆者は、「読む」とことと「眺める」ことをどのような

にとらえていますか。それぞれあなたの考える具体例をあげながら百八十字以上二百字以内で説明しなさい。ただし、下の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉・段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じまずめに書きます。この場合、最後のまずめに書いた文字と記号で一字と数えます。

・。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。

〔文章B〕

私たちは自分の人生を、何となく一つのお話のようにまとめたものとして考え、そして生きています。ところで、何が私たちの人生にそうした統一性を与えているのでしょうか？ルソーによれば、それは「感情」です。「この仕事で……ただ一つのみになる忠実な道案内がある。それは一連の感情のつながりであり、これがわたしの存在の連続をしるしづけ、また、その感情の原因あるいは結果になった事件の連続をも明らかにする」。これまでに体験した感情を私はふたたび感じなおすことができるし、そのとき、その感情を引き起こしたもののやその感情が引き起こしたこともまた見えてくる、そしてその感情のつながりこそが、私の人生を一つのまとまったものになっているのだ、というわけです。ごくあたりまえの考えだと思われるかもしれませんが、ところが、そうでもないのです。

実のところ、私たちの人生にまとまりをもたらしているのは「言葉」です。感情や記憶はともあやふやなもので、それらをただ追いかけていても一つのお話などでできあがりません。たとえばありのままに再現できたとしても、それは脈絡を欠いた事実の

集まりにしかならないでしょう。言葉にしてみたとき、はじめて人生は統一性を持ちはじめます。親や親戚から聞いた子供のころの話、人に喋った体験談、人から聞いた自分についての話……それ自体が言葉からなるそういう小さなお話を、言葉を使って組み合わせ、私たちは自分が主人公である一つの物語を作り上げています。言葉はぼんやりしたもの、よく分からないものにかたじけなく意味を与える力を持っていて、人生もまた例外ではないのです。だからこそ、ふつう自伝は物語としてきれいにまとまっているのです。アウグスティヌスの『告白』も、自伝としての性格も持つデカルトの『方法序説』も、現在という到達点に向けてきれいに整えられています。それゆえ、そこでは主人公が立派に成長しמושるでしよう。

そしてこう考えてみると、『告白』でルソーが少しも成長しないことや、この本に（ぼんやり読んでいればあまり気にはなりません）支離滅裂なところが多いこともよく理解できます。「あれ、さっきと言っていることが違う……」ということがよくあるのですけれど、それはルソーが「感情」をよりどころとしたことに一つの原因があるのです。

ルソーはこうも言います。「矛盾があるとしても、それは自然

のなせるわざであって、わたしのしわざではない」。自然なしい感情とは矛盾したものだ、というのではありません。そのつどの感情や、それをいま思い起こしている私が感じていることには嘘はなく、ただそれを言葉で表現したときには辻褃のあわない点が出てきたりもする、ということです。言葉へのルソーの不信には根深いものがあります。

ルソーは感情を重視した——これだけだったら、ルソーはそう考えたというただそれだけで終わりです。問題は、それでもルソーは言葉で自伝を綴っている、ということです。

ルソーは言葉を軽視し、感情を重視しました。ではなぜ彼は、その感情のつながりを言葉に変えていくのでしょうか？ それは、やはりそうしなければ人生はくつきりとしたかたちを取ってはくれないし、自分のことを相手に伝えることもできないからです。言葉はときに感情を裏切り、ありもしない統一性をでっちあげたりもすれば、思わぬ誤解の原因になりもするでしょう。しかしそうした不誠実で扱いにくい言葉に身を任せることではじめて、私たちは自分の人生を（ただ生きるのではなく）生きなおし、それにかたちを与えることができます。言葉は、感情を伝達するためのたんなる乗り物ではありません。それは、感情にかた

ちを備えさせる型のようなものでもあれば、感情を飼いならすための紐でもあり、感情を押しつぶす枠でもあり、感情が相手へと透明に伝わるのをさまたげる薄い膜のようなものになりもするのです。

感情と言葉とのこの葛藤は『告白』の全体を貫いていて、ある意味では『告白』を書いたもともとの動機でさえあるでしょう。ルソーは、感情に揺さぶられてはつきりしたかたちを持ってくれない自分に「言葉」というよりどこを与えて安定させようとするのだけど、でもそのとき感情と言葉はそれぞれが支配権と正当性を主張してきて、その争いはどこまでもやむことがないのです。

（村山達也「人間の自然」による）

〔注〕

※ ルソー——十八世紀のフランスの哲学者。てつがくしゃ

※ 脈絡——ものごとのつながり。みやくらく

※ アウグスティヌス——四世紀ごろの古代ローマ帝国の哲学者。ていこく

※ デカルト——十六世紀ごろのフランスの哲学者。

※ 支離滅裂——ばらばらでまとまりのない様子。しりめつれつ

※ 辻褄のあわない——ものごとの前後のつながり方が合わないこと。つじつま

※ でっちあげる——ありもしないことを本当にあったことのように作りあげること。

※ 葛藤——たがいにゆずらず対立すること。かつどう

〔問題3〕 そうでもないのです。とは、どういうことですか。

四十字以上五十字以内で書きなさい。ただし、次の

〔注意〕 にしたがうこと。

〔問題4〕 その争いとはどういうことですか。あなたの考える具

体例をあげながら、筆者の考えにそって百八十字以上

二百字以内で説明しなさい。ただし、次の〔注意〕に
したがうこと。

〔注意〕 ・段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じますめに書きます。この場合、最後のますめに書いた文字と記号で一字と数えます。

・。と」が続く場合には、同じますめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。

適性検査Ⅰ

1

〔文章A〕

〔問題 1〕

[illegible]

50 25

受 検 番 号

--	--

得点

[illegible]

※のらんには何も記入しないこと

〔問題 2〕

[illegible]

200 100 25

〔文章B〕

〔問題 3〕

[illegible]

50 25

〔問題 4〕

[illegible]

200 100 25

(2 三鷹)

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は2ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立桜修館中等教育学校

次の**文章A**は、科学史家の村上陽一郎^{むらかみよういちろう}が「教養」とは何かについて書いた本の一部分で、「多くの知識やその広がり
が教養の一要素になっている」と述べたあとに続くものです。**文章B**も同じ本の一部分で、「教養を身につけるとは、き
ちんとした人間として、正しいと思う方向に向かって自分を造り上げていくことなのではないか」と述べたあとに続くも
のです。この二つの文章を読んで、あとの**問題**に答えなさい。（*印の付いている言葉には、文章のあとに〈言葉の説明〉があります。）

文章A

でも私^{わたし}は、教養にはもう一つ、決定的に大きな要素が含ま^{ふく}れている、と確信しています。それは、自ら
を立てることに必要なのが教養だと思うのです。「立てる」と言っても、「人より先にする」という意味
ではなく、「揺^ゆるがない自分を造り上げる」という意味です。あるいは、自分に対して^{*のり}則^{もと}を課し、その
則^{もと}の下で行動できるだけの力をつける、と言い換^かえてもいいかもしれません。

文章B

つまり、何を材料にして自分を造り上げるか。広い知識や広い体験は決定的に大事な材料の一つです
けど、全部ではない。造り上げるというと、いかにも何かがちがちに造り上げた完成品ができてしまう
ように見えますけど、そうじゃないんですね。自分というものを固定化するのではなく、むしろいつも
「開かれて」いて、それを「自分」であると思わず作業、そういう意味での造り上げる行為^{こうゐ}は実は
永遠に、死ぬまで続くわけです。

〈言葉の説明〉

則^{のり}…人の行動や判断のよりどころとなる考え方。

（村上陽一郎^{むらかみよういちろう}「あらためて教養とは」による）

新潮文庫 刊

問題

この二つの文章は、それぞれどのようなことを言いたかったのだとあなたは考えますか。解答らん①には、**文章A**について百字以内、解答らん②には、**文章B**について百四十字以内で、それぞれあなたの考えを分かりやすく書きましょう。なお、**文章A**については「教養とは」という書き出しで、また、**文章B**については「教養を身につけるとは」という書き出しで書きましょう。（それぞれの解答らんには、あらかじめ書き出しの語句が印刷されています。）

また、この二つの文章を読んで、あなたは「自分を造り上げる」ためには何が必要だと考えますか。解答らん③に、あなたの考えを、自分の体験や経験などを交えながら、いくつかの段落だんらくに分けて、四百字以上、五百字以内で分かりやすく書きましょう。

（書き方のきまり）

- 題名、名前は書かずに一行めから書き始めましょう。
- 書き出しや、段落だんらくをかえるときは、一まず空けて書きましょう。ただし、解答らん①と②については、あらかじめ印刷されている語句に続けて書き出すこととし、段落をかえてはいけません。
- 行をかえるのは段落をかえるときだけとします。会話などを入れる場合は、行をかえてはいけません。
- 読点どうてん↓、や 句点↓。かぎ↓「などはそれぞれ一まずに書きましょう。ただし、句点とかぎ↓。」は、同じますに書きましょう。
- 読点や句点が行の一番上にきてしまうときは、前の行の一番最後の字といっしょに同じますに書きましょう。
- 書き出しや、段落をかえて空いたますも字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。
- 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直しましょう。

[illegible]

100

[illegible][illegible][illegible]

解
答
用
紙

※	1
※	
※	
※	

受	検	番	号

得	点
※	

※のらんには、記入しないこと

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一

 問1 から

一

 問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから9ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認^{かくにん}しなさい。
- 6 解答用紙は二枚^{まい}あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

日々をいろいろる季節や風景、住まいや家並み、人びとの姿や道具。どちらをむいても、私たちの日々をとりまく環境は、どんどん変わってきました。これからも変わりつづけるにちがいありません。変化や新しさは、時代の表情を変える力をもっています。

けれども、そう言えるのは、目に見えるものについてです。モノの変化、かたちの変化、暮らしの変化、暮らし方の変化といった目に見える変化が、わたしたちにもたらすもつとも大きな変化は、実は、目に見えないものの変化ではないか、と思います。

目に見えないものの変化というのは、すなわち言葉の変化です。言葉の変化というと、流行語や若者言葉の変化と考えられがちですが、そうではなく、言葉ほど、目に見えないものの変化を反映しているものはないのです。

ごく普通の何でもないような言葉に見える。しかし、その言葉によって、自分が生かされていると感じている言葉というのがあります。

たとえば、「梢」という言葉です。

木の枝の先を言う言葉です。「梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここや杉の幹へ、蠟燭で照らしたやうな弱い日なたを作つてゐた。歩いてゆく私の頭の影や肩先の影がそんななかへ現はれては消えた。なかには「まさかこれまでが」と思ふほど淡いのが草の葉などに染まつてゐた。試しに杖をあげて見ると、ささくれまでがはつきりと写つた」。梶井基次郎の「笈の話」という文章です。

こういうふうには「梢」という言葉が、私たちの見ている風景のなかに、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということを考えるのです。ふだんわたしたちはいまは木を見上げるということをしなくなっています。文章の題の「笈」も、水を引く樋をさす言葉ですが、いまは普段に見るものでなくなつて、その言葉が表していた趣というものは、わたしたちの語彙にはすでにありません。

あるいは、「しげしげ」という言葉。

「寢床から抜け出し縁側に出る。煙草に火をつけ、うらうらとした陽ざしの中へゆつくりと煙を上げる。激しい勢で若葉を吹き出している庭前の木や草を、しげしげと眺める。「俺は、今生きて、ここに、こうしている」こういう思いが、これ

以上を求め得ぬ幸福感となつて胸をしめつけるのだ。心につながるもの、目につながるものの一切が、しめやかな、しかし断ちがたい愛惜の対象となるのもこういう時だ。これは、尾崎一雄「美しい墓地からの眺め」の一節。

「しげしげと眺める」というしんとした動作から、「心につながるもの、目につながるもの」への愛惜が生まれてくる秘密が、ここにはさりげなく語られています。こういうふうな「しげしげと」という動作を表す言葉が、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということを考えます。私たちは今日ますますスピードをあげて生きることに追われて、「しげしげと目の前の風景を眺める」習慣をなくしてはいないでしょうか。そして、そのために「幸福感」をも。

もう一つ、「本」という言葉。

本という言葉は、いまでももちろん日々親しい言葉です。しかし、本という言葉が喚起する次のような感情は、いまはもう私たちに日々の親しいものではなくなっています。「その頃の本は読むものだった。古本屋にはいい本が置いてあつてそれを漁つて歩くのが楽しみだった。一体に本にはその匂いというものがあつて本が選りすぐられたものであるに従つて本の匂いがそこに漂う。その中から一冊を手に入れるのはその

匂いを持つて帰るようなものだった」。これは、吉田健一『東京の昔』の一節。

活字という文字には匂いがあつた。新聞には新聞の言葉の匂い、辞書には辞書の活字の匂いがありました。言葉は意味だけでできているのではなくて、文字には墨の匂い、インクの匂い、紙の手触り、風合いがありました。本を手にする、本を読むことは、そういう感覚を覚えるということでもあつたけれども、そういうふうな「本」という言葉も今日では、もうなくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉として、ある親身な感覚を喚起する言葉というふうではなくなっています。

本来、そのまわりにさまざまなものを集めるのが、言葉の本質です。風景を集める。感情を集める。時間を集める。ヴィジョンを集める。人を集める。記憶を集める。そういう言葉を自分のなかにどれだけでもついているかが、胸のひろさ、心のゆたかさをつくる。

こんなふうな、語彙の行く末をたずねてゆくと、そこに見えるてくるのは、わたしたちの日々の心の風景です。いまは言葉が使い捨てになつていないか、どうか。言葉を使い捨てることは心を使い捨てることです。いまは心が使い捨てになつていないか、どうか。

モノは豊富になったけれども、逆に語彙が乏しくなった。そのため、さまざまな言葉によってわたしたちがずっと得てきた心のひろがりや陰影やゆたかさ、奥行きが削られて、わたしたちの日々のあり方が狭く窮屈なものになってしまっているとするば、問題です。

言葉むなしければ、人はむなし。語彙というのは、心という財布に、自分が使える言葉をどれだけゆたかにもっているかということ。その言葉によって、いま、ここに在ることが生き生きと感じられてくる。そういう言葉を、どれだけもっているか。いまは、言葉のあり方というのが、あらためてそれぞれの日常に、切実に問われているときのように思われます。

(長田弘『なつかしい時間』問題のため一部改編)

〔注〕

- * 径…道のこと。
- * ささくれ…物の先端が細かく割れていること。
- * 語彙…言葉の集まりのこと。
- * 愛惜…大切にすること。名残惜しいと思うこと。
- * 喚起…呼び起こすこと。

問1

① 自分が生かされていると感じている言葉 とあります
が、同じ内容を述べている部分を二十字以上二十五字以内で抜き出し解答らんに合うように書きなさい。

問2

② 試しに杖をあげて見ると、ささくれまでがはつきりと
写った とありますが、このようなことを試して、どのようなことが確かめられたのですか。解答らんに合うように書きなさい。

問3

③ 「幸福感」をも とありますが、この後にどんな言葉が続くと考えられますか。後に続く言葉を解答らんに合うように書きなさい。

問4

④ 言葉を使い捨てること について (1)、(2) の問いにそれぞれ答えなさい。

(1) 「言葉を使い捨てること」とはどういうことですか。

解答らんに合うように十字以上十五字以内で書きなさい。

(2) (1) で答えたようなことにならないためには、どのようなことに気を付けたらよいですか。本文の内容をふまえつつ、あなた自身の考えを次の条件にしたがって書きなさい。

条件 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

また、文章は、五十字以上六十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

＊夜探検のため①に天測の準備を始めたのは、すでに出発が一カ月半後に迫った二〇一二年九月下旬のことだった。まだ夏の暑さを引きずっていたその日、私は西武池袋線沿線の自宅を出発し、自転車で家から十分ほどのところにある池袋の大型書店に向かっていた。

天測というのは簡単に説明すると、天体を利用しておこなうナビゲーション技術である。もう少し具体的に、天体の高度を測ることと言いかえることもできるだろう。六分儀などで太陽や星の高度を観測し、その観測値をもとに所定の計算をおこなう、自分のいる地球上の緯度や経度を求める一連の作業のことだ。天測で探検すると決めたのはいいが、準備を始めた時点で私はこの技術について何も知らなかった。今説明したような内容はもちろん後から調べて分かったことで、最初は天測が天体の高度を測ることだという基本的知識さえなかった。そこで、出発が近づいたその日、まずは本屋に行って手ごろな教科書がないか物色することにしたわけだ。

地下駐輪場に自転車を止め、エスカレーターで七階の理工

書コーナーに上がると、〈海事〉という書棚に様々な船舶関係の本がならんでいた。一冊一冊背表紙のタイトルを確認し、関係のありそうな本をパラパラとめくるうち、『天文航法』という、紙の箱に入った赤い布張りの、古本屋で見かけるような立派な装丁の本を見つけた。天測で海を航海する方法を天文航法と呼ぶのでタイトルのにはぴったりだ。

頁をめくって内容を確認してみると、天球の説明といった基本事項から始まり、時間と経度の関係や、緯度と経度を求めるための理論と計算方法で中身は埋め尽くされている。よし、これだ、これを読みさえすれば天測をマスターできると、私はひそかに心で拳を握りしめた。だが現実に横文字の記号や複雑そうな計算式、しばしば登場する三角関数の記号を見ていると、正直、赤く燃えあがっていたやる気の炎も急激に鎮静化するのを感じる。何しろ数学は高校二年生の途中で断念して以来、テストで二十点以上とった記憶はなかったし、今では六桁以上の数字を扱うこともめつたにない。眩暈をおぼえた私は本を閉じ、もつと別の、『小学生でも分かる天測入門』的なフレンドリーな本を探した。しかし結局そういう本は見つからず、最後は覚悟を決めて『天文航法』という本を携えてレジに向かった。

案の定、読み始めてからわずか三日で私は音を上げそうになった。そもそも机の前で居住まいを正して勉強したのが何年ぶりのことだったのか、もはや思い出すことさえできない。

『天文航法』を読み始めて最初に分かったのは、天測の方法ではなく、自分の学習能力の憂慮すべき現状だった。系統立てて知識を頭に刻み込むという作業をこの二十年ばかり怠っていたせいで、私の脳内の神経細胞の結合は相当弱まり、読んで理解したと思っても、次の日にはその内容を全部忘れていたのだ。それにこの本には数式だけではなく、〈出没方位角算法〉〈子午線高度緯度法〉〈北極星緯度法〉等々といった、甲冑をきた鎧武者のようないかめしい字面の専門用語がつきつきとあらわれる。頁をめくって次に何が書かれているのか確認するたび、私は登山で巨大な岩壁があらわれたときのような威圧感をおぼえた。だが、出発まで時間がない。毎日めげずに勉強するうち、基本原理と計算方法は何とか習得することができた。

(中略)

今回、GPSではなく、その天測を位置決定の手段として選んだのにはちょっとした経緯があった。じつは私は前年の二〇一一年に初めてカナダで極地の長い旅を経験したのだが、その旅での違和感が、今度の天測で旅をするという発想につながっ

ている。

この二〇一一年の旅は色々な意味で大変意義のある旅だった。初めて極地に向かうことにした私は、いきなり条件の厳しい冬の極夜ではなく、まずは比較的行動しやすい季節に、かつ現在オーソドックスとされる通常のやり方で旅することに決め、友人である北極冒険家の荻田泰永君を誘ってカナダ北極圏に向かうことにした。〈極地の旅に都合のいい季節〉というのは具体的にいえば太陽が昇ってもう十分に明るくなり、かつ海の結氷も申し分ない三月下旬から五月であり、〈現在オーソドックスとされる普通の方法〉というのはGPSとか衛星携帯電話を使い、軽量で頑丈なプラスチックの橇を引いて歩くということだ。もちろんオーソドックスな手法でも三月〜五月の北極は十分に厳しい世界で、氷点下四十度にまで冷え込む寒さのなか、われわれは北極熊がうろろする乱氷帯を越え、百キロ近い重さの橇を引いて連日のように三十キロ近く歩きつづけた。六十日後に出発地から千五十キロ南にあるジョアヘブンという集落に到着したが、旅がそこで終わったわけではなかった。五月半ばにこの集落を再出発し、今度は雪解け期でずぶずぶとなったツンドラの大湿地帯の縦断に取りかかった。氷の割れた大河をボートでわたり、泥まみれになった湿地を練り歩き、

ようやく最終目的地であるベイカーレイクにたどり着いたときには、季節はすでに初夏を迎え、無数の蚊にぶんぶんとたかられて身体中をぼりぼりとかきむしっていた。このように旅は期間にして百三日間、総延長で千六百キロもの長きにおよんだ。空間的な距離の移動という観点からみると、たしかにひとつの達成ではあったし、肉体的な疲労という点でも苛酷な旅だったのだが、しかし率直にいうと、私は旅をしているときからずっと、なにか届くことができていない……という虚しさを払拭できずにいた。北極熊の出現におののき、寒さに痛めつけられ、傷つき、疲労し、飢えたことは間違いない。そのことを一冊の本にもまとめたが、北極が持つ茫漠さや泥沼のような深みを体感できたかという点、そこまでは至らなかった気がしたのだ。

(中略)

届くことができていない……と感じた一番の原因は、明らかにGPSと衛星携帯電話という二つの現代機器を使用したことにあった。GPSや衛星携帯電話を持っていくと、私と北極との間に見えない壁ができてしまう。GPSというのは人工衛星からデータを受信する機械であり、また衛星電話は最終的には他人による救助要請を前提にしている。いずれも自分以外の

力をあてにした装備だという点で共通している。自分と自然の間に、第三者たる機械が介在することで自然への没入感がどうしても弱まってしまうのだ。

とりわけGPSを使用すると北極という旅の対象への関わり方が薄くなる。GPSではなく、たとえば地図とコンパスで位置を決める場合、まわりの山や谷に目をやり、次に地図のほうに目を落とし、その山や谷が地図上のどこにあるか確認する。このとき周囲の山や谷といったランドマークは、私という身体的な実体を空間のなかに位置付けるためのリアルな支点としての機能を果たしている。風景を見わたし、何か目印になる山の頂上や尾根筋、谷の向きなどを見つけ、それを地図のなかに見出して自分の位置を求めるというプロセスを経ることで、周囲の風景への志向性が高まり、私と周囲の地形との間にある種の抜き差しならない関係性が生じるのである。読図でこうした作業を常時繰り返していると、私という実体は周囲のあらゆる地形と目に見えない糸で結ばれ、風景と調和し、空間のなかでがっちり安定して存在しているという感覚を得ることができ。ひと言でいえば風景を自分の世界に取り込むことができるわけだ。ところがGPSを使うとこうしたプロセスが全部、抜け落ちる。別に自分で何か作業しなくても、テントのなかでば

ちつとボタンを押すだけで地図上の位置が分かるので、周囲の地形を確認する必要もない。風景に対する志向性はなくなり、何らかの関係性も生じない。風景はただ私と関わりのないものとして素通りし、無意味なものとして私の世界から抜け落ちるのだ。その結果、私は風景とのつながりを失い、北極に居るのに北極を感じることができない、北極の北極たる本質に届くことができないという遊離感を感じていたのだ。

(角幡唯介『極夜行前』問題のため一部改編)

〔注〕

- * 極夜：北極や南極で一日中太陽の昇らない状態が続く現象。
- * 六分儀：太陽や星の高度を観測する道具。
- * 三角関数：数学の分野の一つ。
- * 乱氷帯：海が凍り、高低差が激しくなった場所。ここでは特に歩きにくい場所を意味する。
- * ツンドラ：北極周辺の、凍結した大平原。
- * 払拭：ぬぐいさること。
- * 茫漠：広々としてとりとめのないさま。
- * 介在：二つのものの間に存在すること。
- * ランドマーク：特徴的で、目印になるものこと。
- * 遊離感：他と離れて存在するかのように感じること。

問1

① 天測^① とは何ですか。本文の言葉を用いて、三十字以上四十字以内で解答らん^②に合うように説明しなさい。

問2

② 拳^①を握りしめた。とありますが、なぜ筆者は拳を握りしめたのですか。その理由を次の条件にしたがって書きなさい。

条件 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

また、文章は、三十字以上四十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

問3

筆者はGPSや衛星携帯電話などの現代機器を使用する方法と、地図とコンパスを用いて旅をする方法の両方について述べています。もし、あなたがどこか見知らぬ土地を旅するなら、現代機器を使用する方法で旅をしたと考えますか。それとも地図とコンパスを用いる方法で旅をしたいと考えますか。どちらか一つの方法を選び、その理由とともに次の条件にしたがって書きなさい。

条件1 段落構成^{だんらく}については、次の①から③にしたがうこと。

① 二段落構成で、内容のまとめりやつながりを考えて書きなさい。

② 第一段落では、現代機器を使用した旅のよさと、地図とコンパスを用いた旅のよさ、両方のよさの要約を書きなさい。

③ 第二段落では、あなたが見知らぬ土地を旅するときに、現代機器を使用して旅をしたいと考えるか、それとも地図とコンパスを用いて旅をしたいと考えるか。その理由とともに書きなさい。

条件2 解答は原稿用紙^{げんこう}の正しい使い方で書き、書き出しは一まず空けて書き始めなさい。

また、文章は、二百字以上二百四十字以内で書きなさい。

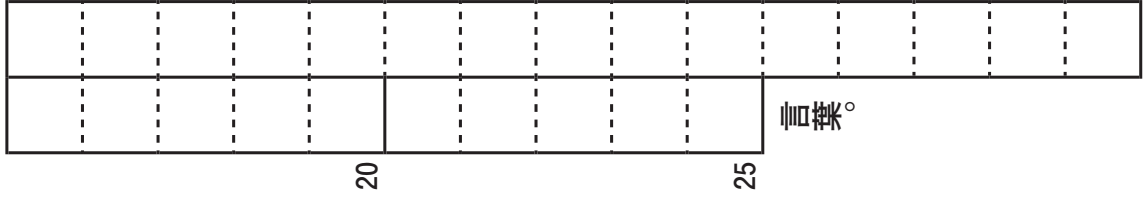
、や。や「なども一字と数え、改行などで空いたますも字数に数えます。

適性検査1 解答用紙（1枚め／2枚中）

受検番号

一

問 1



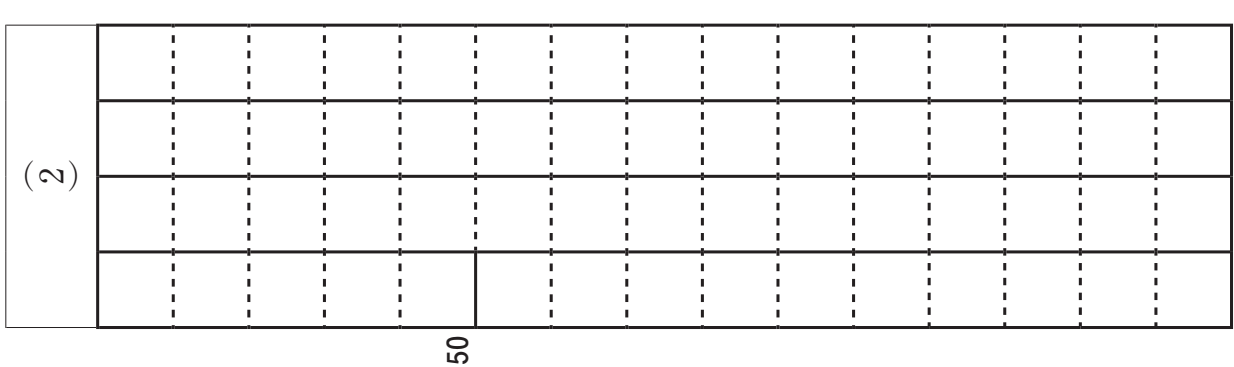
問 2



問 3

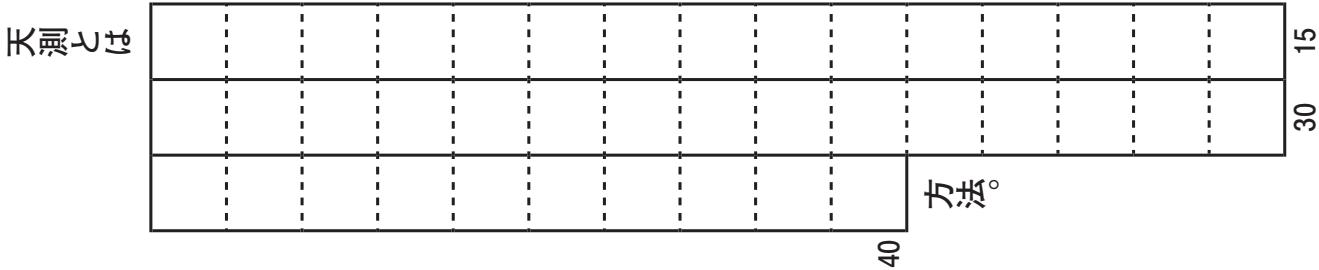


問 4

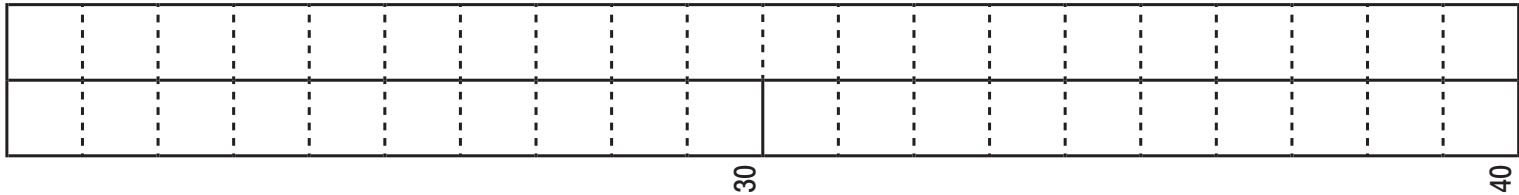


二

問 1



問 2



号
番
受
檢

問 3

[illegible]

100

200

240

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立立川国際中等教育学校

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

数年前から、日本では15歳以下の子どもの数より飼われている犬猫の数が上回ったといわれている。犬猫以外にもモルモットや小鳥、金魚など多種にわたるペットがいる。日本は世界でも有数なペット大国となった。

一方で、日本はロボット大国としても知られている。人間の代わりに重い荷物を運ぶ産業用ロボット、深海など危険な場所で働く探索用ロボット、診療や手術を補助する医療用ロボットなど、さまざまな用途で開発され、すでに実用化されているものもある。最近ひととき注目を浴びているのがヒューマノイド（人間型）ロボットだ。

電池を搭載した手のひらサイズのミニロボットは、アメリカのグランドキャニオンの登頂に成功した。乾電池の性能を証明する試みだったが、見ている私たちは、ロボットがロープを登るたびにがんばれと声援を送りたくなった。このロボットを製作した高橋智隆氏によると、これからはロボットに仕事をしてもらうのではなく、ペットのようにつき合えるヒューマノイドの時代だという。

ロボットは20世紀初めに登場し、その後主体性を人間に委ねる機械として定義されるようになった。^{*} アイザック・アシモフのロボット三原則（人間への安全性、命令への服従、自己防衛）は有名である。

それが時代を経て、人間に愛護される対象として生まれ変わろうとしているのだ。

私は、ペットや動物とロボットは対極的な存在だと思う。動物は人間とは姿形が違（ちが）うし、コミュニケーションの方法や求めていること、理解の仕方も異なる。それでも私たちは動物に話しかければ、彼らなりの方法でそれにこたえてくれるはずだと思（おも）っている。単に私たちが彼らの反応を勝手に解釈（かいしゃく）しているだけかもしれないが、それを証明するのは難しい。それに、そんなことを確かめなくても支障（ししょう）はない。ペットと共存（きょうぞん）できていれば、私たちは満足感を覚える。

ロボットは正反対だ。人間がつくったから、人間の計算通りに動いてくれないと困（こま）る。仕事を効率よく安全に進めるために、不満を言うことなく、同じことを何度でもくり返してくれる。融通（きゆうう）は利（き）かないが、人間の望む通りに改善（かいぜん）し動か（動か）すことができる。だから、その前で人間は不安を抱（いだ）かない。何トンもあるトラックが目（め）の前に迫（せま）ってきても不安を感じないのに、ゾウが目（め）の前に迫れば恐怖（きょうふ）にかられる。それはゾウの心が読（よ）めず、人に慣（な）れていても何をするか完全（かんぜん）には予測できないからだ。ヒューマノイドはいくら外見（がいけん）が人間に似（に）ていても、機械である限りそのような不安を覚えずにすむ。ロボットは動物のよ（よ）うな命（いのち）や魂（たましい）をもっていないからである。

その常識（じょうしき）がどうやら変わりはじめた。今、動物の姿（すがた）をしたロボットたちが人間の世界で活躍（かつやく）ははじめ、安全で手間（てま）のかからないペット

として人々の心を癒やしている。ヒューマノイドがそういった特徴をもって人間の世界に入ってくるかもしれない。現代の技術では、人間の語りにロボットが反応するだけでなく、人間に語りかけてくれることも可能だそう。人間のしたいことを先回りして提案してくれるものもできつつある。ネット上のマーカー*のように、その人の過去の注文にもとづいて次に求めるものを提案してくれるのである。

ペットの動物とロボットとの溝は急速に埋まりつつある。ひょっとしたら、子どもの代わりにロボットをもつ人が増えるかもしれない。ロボットはいつまでも子どもでいてくれるし、不満を言わずに介護までしてくれるからだ。

しかし、ロボットと動物の違いは重要だと私は思う。生物は自分が生きるために自己主張をし、成長し、やがて死んでいく。私たちに制御できない自然の営みだ。それに寄り添い、共感することで、自分も生物であることを実感する。動物を完全には操作できないから、その主張を認め、相手を信頼しようとする。その心の動きは相手が人間であっても同じことだ。

ヒューマノイドの登場は人間が今、自己主張せずに気遣ってくれるパートナーを求めていることを示唆している。ただそれは、ロボットを人間にするのではなく、人間のロボット化、機械化を意味してはいないだろうか。

最近の人工知能（AI）ブームは、人間のロボット化を加速しているような気がする。人工知能は膨大なデータを瞬時に分析することができ、深層学習によって必要なソフトを自動的に探しあて、適切な分析方法を考案することができる。今、さまざまな場所で利用されつつあり、生活は効率的に便利になってきている。それは喜ばしいことだが、同時に人間がAI的になってきていることが危惧されているのだ。

AIを東大に入学させようとするプロジェクトを実施してきた新井紀子さんは、AIは文章の意味を理解することが苦手だという。ある言葉にまつわるこれまでのデータを検索し、それが使われてきた文脈に沿って解答するので、その言葉が使われているその文章の意味を読んでいるわけではないからだ。たとえば、おいしいイタリアンレストランを教えると質問し、その後でまずいイタリアンレストランはと問うと、同じ場所を答えるという。レストランを探すとき、「まずい」という言葉がほとんど使われないので、「うまい」場所に収斂してしまうのである。

驚いたことに、日本の中高生にAIの苦手な質問をしてみると、かなりの割合で誤って答えてしまうという。これは、子どもたちの頭脳がAI的になっているせいだと新井さんは言う。文章の意味を考えずに、言葉を検索して頭のなかで個々の属性だけをつなぎ合わせているのである。

これは、人間が言語を手にして以来、脳の中身を外部化してきた当然の、しかし大いに危惧すべき結果なのではないかと私は思う。

言語は、環境を名づけ、それをもち運びせずに他者に伝える効率的なコミュニケーションである。見えないものを見せ、現実にはないものを想像させて、人間に因果的な思考や抽象的な概念をもたらした。文字は言葉を化石化させて時間や空間を超えて伝達できる道を開き、電子メディアの登場は画像や映像の技術を革新して、人間の視覚と聴覚の世界を急速に拡大した。これらの過程を通じて、人間はそれまで脳にとどめておいた記憶や知識を外部のデータベースに収納し、そこにアクセスさえすればいつでも利用できるシステムを構築したのである。

少し前まで頭で覚えていたことが、今ではスマホのなかに納まっている。友人の電話番号も、地理情報もこういったデータベースに頼らざるを得なくなっている。生まれたときからスマホを手に行っている子どもたちは、こういったICT社会に慣れてしまっている。そのうち、データを利用して考えることさえも、Aに任せてしまうようになりはしないだろうか。文章を読解する能力をもたなくても、Aさえあれば生きていける。でもそうなったとき、人間は動物ではなくロボットに近い存在になっているのではないだろうかと私には思えるのである。

(山極寿一「ゴリラからの警告『人間社会、ここがおかしい』」による)

〔注〕

搭載——つみこむこと。

アイザック・アシモフ——アメリカの作家。

対極的——正反対。

融通は利かない——その場や状況にうまく対応できない。

マーケット——売り買いの場。

示唆している——それとなく示している。

危惧されている——悪くなるのではないかと心配されている。

収斂——おさまること。

属性——そのものがもとも持っている性質。

因果——原因があつて結果があること。

抽象的な概念——いくつかの物事を、似ているところに目をつけてひとまとめにし、改めてとらえなおされた性質や関係などの意味内容（「美」、「愛」、「正義」など）。

データベース——情報を集めて、すぐにさがせるようにしたもの。

〔問題1〕

「何トンもあるトラックが目の前に迫^{せま}ってきて不安を感じないのに、ゾウが目の前に迫れば恐怖^{きょうふ}にかられる」のはなぜですか。六十以上七十以内で書きなさい。

〔問題2〕

「かなりの割合^{わりあい}で誤^{あやま}って答えてしまふ」とありますが、どのように誤って答えてしまふのか。五十以上六十字以内で書きなさい。

〔問題3〕

「人間は動物ではなくロボットに近い存在になっているのではないだろうかと私には思えるのである。」とありますが、人間が「ロボットに近い存在になる」ということは何を失うことだと本文から読みとれますか。また、そのことについて、あなたはどのように思いますか。見たこと、聞いたことなどの中から具体的な一例をあげてあなたの考えを四百六十以上五百字以内で書きなさい。

なお、次の《注意》にしたがって書きなさい。

《注意》

段落^{だんらく}をかえたときの残りのますめは字数として数えます。

ただし、問題1・問題2は、一ますめから書き、段落をかえてはいけません。

、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

1

次の資料A、資料Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(丸で囲んだ数字が付いている言葉には、それぞれ資料のあとに〔注〕があります。)

資料A

翻訳者^{ほんやくしゃ}として大切なのは、「こだわりを捨てて読み、こだわりをもって訳す^{やくす}」姿勢^{しせい}ではないかと思う。

こだわりを捨てて読むとは、とりあえず自分の考えにかかわらず、書いてあることをまっすぐに聞くということである。たとえば、原子力発電に賛成する人がある科学記事を読む場合と、原子力発電に反対する人が同じ記事を読む場合とをくらべたら、おのずと読んだあとの感想はちがってくる。しかし翻訳者は、このような読み方をするべきではない。翻訳者はあくまで原著者^{げんちやしゃ}の思いをまっすぐに受けとめなければならぬ。

じつはこの姿勢は、コミュニケーションのなかで養われる。相手のいうことを批判^{ひはん}しながら聞いた^きたり、偏見^{へんけん}をもって聞いた^きたりするのではなく、まずは相手のいうことをそのまま聞く。湖の水面に小石を投げるとしずかに波紋^{はもん}が広がっていく。湖が自分で、小石が話している人だと思っ

てほしい。湖面は小石の投げられ方を正確^{はんえい}に反映^{はんえい}する。
こだわりを捨てて読めたら、次はこだわりをもって訳さなければならぬ。わたしのこだわりは、翻訳^{ほんやく}した文書も、うつくしく流れるよう

な日本語でありたいというものだ。読者に翻訳した文章だとわすれてもらえたら、それがいい。むかしから、翻訳のうまい下手^{へた}は日本語の力のせいか、外国語の力のせいか、という議論^{ぎろん}がある。わたしの答えは「翻訳の力はすぐれた日本語力に負っている。外国語力は翻訳の前提にあるべきで、あらためて問われる必要はない」だ。だから、翻訳をやりたいなあと思っている人は、^① ゆめゆめわすれないでほしい。日本語の力をつけることを。

異文化^{いぶんか}のなかで書かれたものを、原文^{ちゆうげん}に忠実^{ちゅうじつ}でありながら流れるような日本語にする。そのために必要なのは、言葉をたくさん知っていることだと思う。要は語彙力^{ごいりよく}(ボキャブラリー)が豊富であることだ。それにはなんといっても、多読が大切だ。あるいは自分の好きな作品を徹底的^{ていてき}に^② 精読することだろう。学校の古典の授業もばかにしてはいけない。^③ 連綿と生きつづけるうつくしい日本語は古典にルーツがある。わたしの高校のときの古典の先生は泣く子もだまる先生で、古典をとんでもなくたくさん読まされた。この経験はいまになって、おおいに役立っている。

また、翻訳力リサーチ力ともいえる面がある。とくにノンフィクションの本を訳しおえたときは、該当ジャンル^{がいてん}の一端^{ちゆうたん}の知恵^{ちえ}がついている。知的好奇心^{ちてきこうしん}の^④ 旺盛^{おうせい}な人にはたまらないはずだ。

リサーチをするときにもっとも気をつけるべきことは、もとの資料や情報にあたるということだ。こうしたものを「第一次資料」というが、世の中には「第二次資料」「第三次資料」があふれているから、安易に

それにとびついてはいけない。第一次資料をさがすのは楽ではないが、翻訳書が信頼にたたるためには、どうしても必要なことである。

いまはインターネットでどんな情報もひいてこれられるけれど、それだけに「第一次資料」がわかりにくくなっているから注意しなければならぬ。中学生・高校生のときから、わからないこと・疑問に思ったことは、すぐに調べるくせをつけておくと思う。なにが本当の情報かを見わかるのに特効薬はないから、若いうちからなんでも興味をもつて、つきつめていくしかないだろう。

(たかおまゆみ「わたしは目で話します

——文字盤で伝える難病ALSのこと　そして言葉の力」による)

〔注〕

- ① ゆめゆめ……決して
- ② 精読……内容をよく考えながら細かいところまで読むこと。
- ③ 連綿……長く続いて絶えることのないさま。
- ④ 旺盛……さかななこと。

資料B

ネット社会の隆盛が本の市場にあたえた影響は少なくありません。本がかつてほど売れなくなったのは、明らかにネットの普及にあります。しかし、私はこの流れがそのまま続くとは思いません。再び本が見直される時代がくると見ているのです。

コンピュータはビッグデータなど情報を整理するスピードに関しては非常に優れていますが、その情報の真偽など質を見極めることはできません。

一つひとつの情報が、どこの誰が責任をもって発しているのかが見えないがゆえに、いい加減な情報で溢れかえってしまう。

誰が発信しているのかは、とても重要なことです。たとえば、「東京都によれば」といえば、知事なのか、都の何課の職員なのか、誰がいったのかということになります。情報の信頼性を最低限担保するものとして、どこの誰がいつているのかがわからなければ、信じるに値しない情報ということになります。

その点、ネットと比べて、本は発信する人が誰なのかがはっきりとわかります。たとえ極端な意見であっても、読み手はこの人が責任をもって書いているんだと安心して読み進められます。

書き手の氏名がきちんと入っていることは、これからの時代、強みではないでしょうか。

ネットはこれまでは光の部分ばかりにスポットライトが当てられて

きましたが、信賴性の欠落という影の部分が、これからいろいろな問題を伴ってクローズアップされていくように思います。

同じことでも、本を通して知ることと、ネットを通して知ることとは違います。

たとえば、新大陸を発見したクリストファー・コロンブス（1451ころ〜1506年）についてネットで数行で紹介されているものを目を通すのと、コロンブス個人や ⑥ 大航海の背景にある当時のヨーロッパの ⑦ 地政学について記述した関連書物を読むのでは、同じ「知る」でも、その意味合いがかなり違います。

ネットで検索すれば、簡単に知ることができます。しかし、そこで得られるのは単なる情報にすぎません。細切れの断片的な情報をいくらかたくさん持っていて、それは知識とは呼べません。

なぜなら情報は「考える」作業を経ないと、知識にならないからです。考えることによって、さまざまな情報が ⑧ 有機的に結合し、知識になるのです。読書で得たものが知識になるのは、本を読む行為が ⑨ 往々にして「考える」ことを伴うものだからです。

何かについて本当に「知る」ということは、少なくとも知識というレベルにまで深まっていなければならないと思います。

（丹羽宇一郎「死ぬほど読書」による）

〔注〕

⑤ 担保する……おぎなう。保証する。

⑥ 大航海……十五世紀から十七世紀にかけて、ヨーロッパ人が新航路を開いたこと。

⑦ 地政学……政治と地理的条件との関連を研究する学問。

⑧ 有機的……多くの部分が集まり強く結びついておたがいに関連し合いながら全体を形作っているさま。

⑨ 往々にして……しばしば。

〔問題1〕

資料A

に、翻訳の力はすぐれた日本語力に負っている。とありますが、筆者がこのように述べる理由を百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

〔問題2〕

資料B

で、本当に「知る」とありますが、それはどのようなことだと筆者は考えていますか。百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

〔問題3〕

資料B

の信頼性の欠落の例を一つあげ、なぜ信頼性が欠落してしまうのかその理由を説明しなさい。その上で、その信頼性を高めるためにはどうしたらよいか、

資料A

資料B

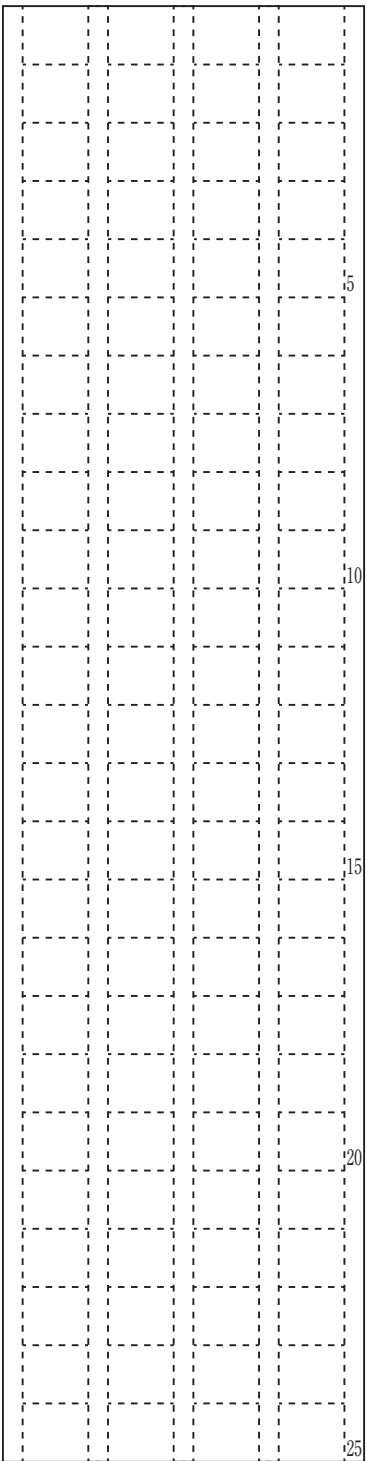
の内容をふまえて、あなたの考えを四百字以上四百五十字以内で書きなさい。

ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

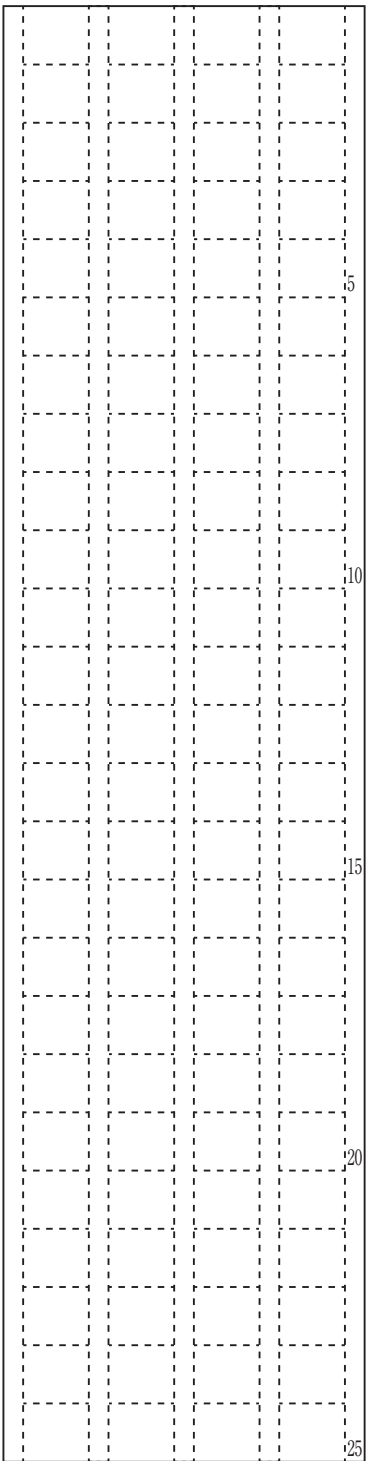
解答用紙 適性検査Ⅰ

1

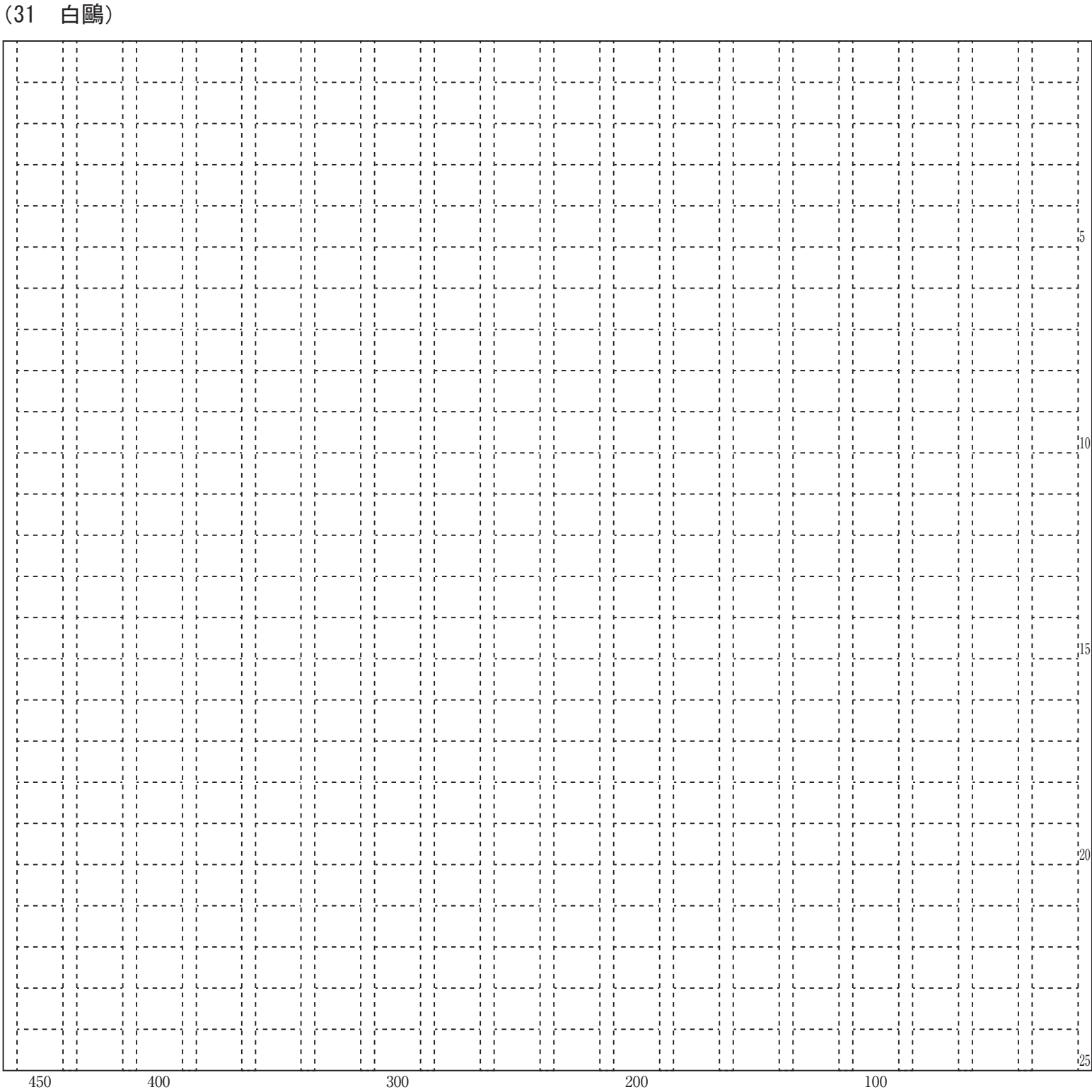
〔問題1〕



〔問題2〕



〔問題3〕



※									

※

※				

※

※				

※

受 検 番 号

得 点
※

※のらんには記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立南多摩中等教育学校

次の文章は、画家である安野光雅さんが書いたものです。これを読んで、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

人の意見にまどわされないようにするためには、どんなことにも、心が動かされない頑丈な地点に立って、つまり人がどうであろうと、自分はあわてない、という堂々とした考えかたが必要になります。

テレビでこういつていた、新聞にこう書いてあった、などと、自分の意見はなく、ただただ人のいうことを本気にするだけというのは良くないと思います。

「自分で考える」ことは、前向きな姿勢の第一歩です。自分でやろうという気持ちが大変だと、わたしは思っています。

以前、あるサイン会でこんなことがありました。

絵を描いている人から、小さい声で「どんな鉛筆を使っているんですか。紙は何ですか？」と聞かれました。そのときわたしは「いくらでも教えるけれども、わたしに聞かないほうがいいのにな、自分で見つけた方が勉強になるのになあ」と思いました。

自分の考えで責任を持つてものごとに取りくめば、たとえ失敗したり、間違ったりしたとしても、改めることができます。

自分で考え、判断することの中から、これはほんとう、これは嘘、ものごとを見極めていけるようになっていきたいと思います。『学問』とは、何がほんとうか、何が嘘かを判断していく、そのためにあるのだと

もいえます。

「自分の考え」がなくなってきた、ということは困ったことで、「自分の考え」がないと、無責任になってしまいます。人の意見に振りまわされたり、まどわされたりして過すようでは、おもしろくない生きかたになってしまいます。

わたしは、街から街、国から国へと、ときに迷いながら旅をして、スケッチをしてきました。その場で腰をおろして絵を描いていると、その絵がうまくいかなくても、何とも心豊かな時間が過ぎていきます。そして、不思議なことに、同じ時間をかけていても、普段よりたくさん絵が描けます。そこに立っている木に、何を感じて描くか。そのことで絵は違ったものになるのだらうと思っています。

実際にスケッチをした場所は、写真で見た場所よりも、ずっと心に残るものです。写真を見て絵を描くことはできますが、わたしの場合、その写真に似た絵は描けても、実物を見て描いたものとはどこか違ってきます。人と会ったときがいい例で、写真で見た感じと、実際に会った感じが違うことがあるのと同じだらうと思います。

*デカルトは、あらゆる本を読みつくしたあと、旅に出ました。実際に世の中に入って、世間と交わって、さまざまなことを学びとていこうとしたのです。偶然かどうかわかりませんが、建築家の安藤忠雄さんもたくさんの本を読みおえ、旅に出ています。そして、「自分でいろいろなことをつかみとっていく。そして実際のものから勉強をする。それが学びである」といっていました。

わたしは本を読むことをすすめています、できるのであれば、本を読むのと同時に、旅に出るといいと思っています。^{*}物見遊山^{ものみゆざん}もいいけれど、本^②が語っている「ほんものの様子」を、実際に見にいっただけだ、いいと思うのです。

わたしも、ほんものを見てよかったなと思ったことがあります。

ヒエロニムス・ボスは、オランダ出身の画家で、^{*}ピーテル・ブリューゲルはボスの影響^{えいきやう}を受けたといわれています（影響を受ける、といういいかたは嫌いですが）。ボスの絵がどうしても見たくなり、スペインまで行きました。

ボスの絵はそんなにたくさんは残っていませんが、三連の祭壇画^{*さいだんが}があつて（「快樂の園」^{その}プラド美術館蔵^{そう}）、それがすごくおもしろい。現代の作家もあのような絵を描けばいいのに、と思うほどです。

魚に足がはえていたり、魚の口から人の足が出ていたり。デッサン的にはおかしいものもあるのですが、それがおもしろくて、見にいってよかったと思いました。

ボスのような細かいところまで描いた絵は、むしろ画集の方が、細部までよく見えるのではないかといわれるけれど、ほんものの絵を見ると、どうやって描いたんだろうと思うほど、その丁寧^{ていねい}な、描く過程の積みかさねのようところが見えてきたり、画集ではわからない雰囲気^{ふんいき}が、直接伝わってきたりします。

もちろん、ほんものの絵でも、ちょっと見ただけでは「きれいな色の絵だな」というくらいにしか見えないかもしれません。けれども、もっ

とよく見ると、目に見えるものだけでなく、絵で描かれている人の気持ちや、やりとりの様子や、いろいろな話題が想像できます。そして、さらに絵を描いた人、画家の気持ちも想像できるのです。もちろん想像の域^{いき}を出ませんが、わたしは絵を見ると、いつもそんなことを考えています。

子どもたちに、本を読んでもらいたい、と先に書きましたが、どのような年代の人でも、本を読んでもらいたいと思っています。本を読まない人たちに、本を読んでもらえるよう、いろいろ書いてみたりしているのですが、これはなかなか難^{むずか}しいことです。

本を読むことは、心の体操^{たいそう}だと思っています。本を読んで「心を磨^{みが}ぎ、鍛^{きた}え、心が満ち足りること」は、心の中を美しくします。

本を読まないでも、生きていけます。でも、本を読んで生きた人は、同じ十年生きていても、二十年も三十年も生きたことになります。本にもいろいろありますが、多くの本には勉強^{べんきやう}し、苦勞^{くろう}し、発見した先人がのこしたことが書いてあります。

本を書くとき、人は漠然^{ばくぜん}と書くのではなく、言葉にする段階^{だんか}でよく考えています。それが、本をすすめる理由のひとつです。本はその著者^{ちやしや}が責任を持って、発言していると、デカルトもいっています。

本が読まれなくなったことは、文明の変化ともいえますが、わかりやすくいえば、テレビや、スマートフォンの持つ手軽なおもしろさに押^おされてしまったのだと思います。テレビは積極的に「おもしろさ」をわたしたちにさしだし、「おもしろがらせて」くれます。それに対して、

本は、「自分で読む」ということをしなければ「おもしろさ」がわかりません。そして、こちらから積極的に働きかけなければ、何もしてくれない、という違いがあります。

テレビや映画は、受け身で見ることができません。特にテレビは、視聴者をできるだけたくさん集めようとするので、見る人があまり考えなくても楽にわかる、あるいは知ることができるようにならされています。

一方、「本を読む」ということは、文字で書かれた場面や時間の経過を、自分自身でつかんでいくことになります。

もちろん、テレビや映画でも台本は「本」ですから、ディレクターや、監督など、制作者はそれがなくては仕事ができません。けれども見る方は、その「本」を制作者が調理したものを見ています。

本は、自分が行こうとしなければだれも連れていつてはくれません。それと比べて、テレビはつけてしまえば、勝手に情報がやってくるので、自分でその道をたどらなくても、最後まで連れていつてくれます。その意味で本とテレビとは比べて考えるものではないのかもしれないかもしれません。

そもそも本は、ひとつの道を自分でたどりながら読み、内容が理解できていく、そのことがおもしろいのです。

「本を読む」とこと、「自分で考える」ことはつながっていると思います。

「本を読む」ことは、自分の考えかたを育てること」です。とにかく、子どもたちには、自分で考えるくせをつけてほしいと思います。だれか

偉い人がいつていたからとか、テレビでいつていたからとか、判断を他人に任せるようではつまらないではありませんか。でも、自分で考えるためには、日頃の訓練が必要です。頭がやわらかいうちに、たくさん本を読んで、世の中にはいろんな考えかたがあることを知りたいものです。

（「かんがえる子ども」安野光雅による）

〔注〕

デカルト — フランスの哲学者。

物見遊山 — あちこちを見物して回ること。

ピーテル・ブリューゲル — オランダの画家。

祭壇画 — 教会に飾る絵。

〔問題1〕

テレビでこういつていた、新聞にこう書いてあった、などと、自分の意見はなく、ただただ人のいうことを本気にするだけというのは良くないと思います。とありますが、テレビや新聞の情報に対してどうするのが良いと筆者は言っているでしょうか。二十字以上二十五字以内で書きなさい。

なお、や・や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

〔問題2〕

本が語っている「ほんものの様子」を、実際に見にいったらいいと思うのです。とありますが、それはなぜでしょうか。本文の内容にそって二十字以上二十五字以内で説明しなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

〔問題3〕

「本を読むことは、自分の考えかたを育てること」と筆者は言っていますが、それはなぜでしょうか。また、本を読むこと以外で「自分の考えかたを育てる」にはどうしたらよいでしょうか。次の〔手順〕と〔きまり〕にしたがって、四百字以上五百字以内で説明しなさい。

〔手順〕

- 1 なぜ「本を読むことは、自分の考えかたを育てること」になるのか、本文の内容にそって理由を書く。
- 2 1で書いたことをふまえ、本を読むこと以外で「自分の考えかたを育てる」にはどうしたらよいか、あなたの体験をもとにして、あなたの考えを書く。

〔きまり〕

- 最初の行から書き始める。
- 各段落の最初の字は一字下げて書く。だんらく
- 段落をかえたときの残りのまずめは字数として数える。
- ゝや。や「なども、それぞれ字数に数える。ただし、。と」は同じますすに入れ、一字と数える。

[illegible]

1

[illegible][illegible]

〔問題 3〕

--

✖

※のらんは、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**8** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出**しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1 次の文章1は、絵本作家のかこさんと、聞き手である

林公代さんとの対話です。（――は林さんの発言を表します。）これと、あとに続く文章2を読んで、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

――先生の本を拝読したところ、科学絵本を出すにあたって既に出版されている科学の本をお調べになり、他の本に欠けていて、かこ先生が実現したい点を三つ見出されたと書かれていました。「大事な原則を先に書き、例外を後にすること」、「過去の未来への科学の営みを動的にとらえること」、「個々の科学だけでなく、科学の全体像を提示すること」です。改めて、先生が科学絵本を書かれるとき何を大事になさっているか、お聞かせいただけますか。

かこ 今の三つのことをベースにして、さらに言うと、読んでくださる方は大人ではなくて子どもさんですから、少なくとも二〇年は私よりも長生きするはずです。だから、その子どもさんが成人したときに、「なんだ、昔読んだ本と内容がちよつと違うじゃないか」なんてことになったら、大変問題になります。ですから、二〇年後にも通用するという見通しを持って書かなければいかん。

――二〇年後ですか。

かこ はい。ところが学者さんというのは非常に慎重で、仮説としてはいろいろとおっしゃるのだけれど、論文には確実でないことは

なかなかお書きにならないですよ。だから論文などから読み取って、「二〇年後にはこうなるはずだ」ということを見越して書かないといけない。ですから僕は、絵本を作るときの学説とは少々違うものも大胆に取り上げてね。

――科学絵本のために、論文まで読み込まれていたのですか。

かこ そうです。一番苦心したのは、『地球』（一九七五年）という科学絵本で取り上げたプレートテクトニクス論です。絵本を書いていた当時はまだ仮説でしたが、これ以外にいい理論がなかったのです。いろいろな地球内部のことを説明するにはプレートテクトニクス論が一番妥当であろうと。日本の学会ではプレートテクトニクス論が一九八〇年代まで、なかなか受け入れられなかったそうです。日本で唯一、この理論を積極的に取り上げたのが、東京大学の竹内均さんです。

――日本で一九八〇年代によく受け入れられた理論を、先生は一九七五年に絵本として出版されていたとは驚きです。竹内さんといえば、東大名誉教授で、のちに科学雑誌の編集長になられた方ですね。

かこ はい。竹内均さんに最新の理論を聞いて、僕は納得して絵本にしたのです。竹内さんが、出来上がった『地球』をご覧になって、「絵本でも（プレートテクトニクス理論を）描く時代になったのか」とものすごく喜んでくださいました。当時、竹内さんは教育番組を多数持っておられて、その質問役を仰せつかって。

——なるほど。先生は科学絵本をお書きになるたびに、毎回たくさん論文を読み込まれて、二〇年後も通用する理論だと見極めてから書かれるのですか。

かこ 子どもさんは「これが正しい」と思って読んでくださるのに、違っていたのではなはだ申しわけないし、それ以上に出版の意義がなくなる。科学の本であれば、^{*}ここに慎重であるべきです。ただ現状を述べただけなら、どなたでも現在の資料を集めればできるでしょうけれども、多少技術の^{*}ことをかじった端くれとしては、それだけの見通しを持って皆さんに提供しないと申しわけない、というのが僕を書くときの心がけです。

——でも論文から、その理論が二〇年後通用するかどうか評価するのは難しいことではないですか。

かこ 科学者としては当たり前のことです。そういう「実証的」なことをちゃんとやっておかないと、必ずどこかで問題が起きます。

——どんな話でも必ず事実を調べるのは、実証的・科学的な態度ですね。

かこ それから、たとえば生き物を描くときに、ウサギがオオカミを

み殺すことは逆であり、あり得ない。やっぱりオオカミがウサギを追いかけるのでなければならぬだろう。私はたとえ童話であっても、「自然法則」に逆らわない範囲で、子どもさんに楽しんでいただくものを書きたい。それを逆にするようなことは、とても私には書けません。

——童話でも、自然法則がその下敷きにあるべきだと。

——実は先生にお話をうかがうにあたり、『宇宙』を読み直しましたが、宇宙に関する原理原則や、^{*}壮大な宇宙の時間と空間をどうやってとらえればいいかが順序だてて描かれていて、これに匹敵する宇宙の本は今もないと改めて確信します。一九七八年のご出版ですから、約四〇年も読み継がれている本ですね。科学絵本がどのように生み出されるか、『宇宙』を例に具体的にお聞きしたいでしょうか。

かこ はい、どうぞ。この本を作った一九七〇年代は人間の宇宙への進出がどんどん進んだ時代で、私は学者さんのご努力に^{こた}応える意味で、しっかりとまとめなければいかんと思ってやりました。

——そもそも、なぜ宇宙の本を書くと思われたのでしょうか。この本の前に『海』（一九六九年）や『地球』という科学絵本が出ていますが、その延長線上で「次は宇宙だ」と思われたのですか。

かこ まあ単純に言えばそういうことです。しかし、ただ宇宙は大きくて、星があつて、というだけの物語では本当の理解ということにはならない。どうして宇宙船は落ちてこないのかなど、まず原理原則を子どもさんにわかるようにしてもらおうと考えました。

——まさに、そこがこの本の特徴ですね。

かこ はい。（宇宙のように）遠くの場所へ行く乗り物は、速い速度を出さないといけない。それをわかってもらうために、まずは身近な昆虫なり、動物の速さから始めて、次に人間が作るものでは、鉄砲玉や大砲も速いだろうと。それらをうんと速くすると、遠くへ遠くへ行つて、ついに着地しないで地球をぐるっと回ってくるんじゃないかと。

——それが地球を回る人工衛星と同じなんだよと。

かこ そいう説明の仕方をすれば子どもたちも理解してくださるだろうと考えて、速さについて順を追ってゆっくりと記述しながら、だんだんと遠い宇宙へ一緒に旅をするということを中心にしました。

だから、一番身近なところで始めるために、たくさんのノミがぴよんぴよん跳ねるところから始めたのです。

——小さなノミが自分の大きさの何倍もジャンプするという事実から、想像力がふくらみます。

かこ 子どもさんに興味を持ってもらえればと思ってね。キャラクターを絵本に登場させたり、ギャグを羅列したりという方法もあるのでしようけれど、僕はそういうやり方はあまり好きではありません。子どもさんといえど、真つ当な面白さにぶつかると「もつやめなさい」とこちらが言いたくなるぐらいに熱中して、突き進んじゃう。それは子どもたちと接して見せつけられたものですから。

本来、人間の持つ「生きよう」という意気込み、興味、好奇心を喚起すれば、あとは子どもたちが自分の力でぐいぐい開拓していく。それが真つ当な科学教育なり、科学絵本の行く道だろうと思うんです。アニメにしたり漫画化すればいいだろうという、ちやちな教育姿勢では、子どもさんの本当の意味での発達というか、伸びていくための「エンジン」にはならない、というのが僕の説ですね。

——具体的には、子どもたちはノミのことは知っていても、そのノミが身体の一〇〇倍以上も高く、遠くへ飛ぶことは知らない。その事実を

見せることで子どもたちの関心や興味をひき、そこから高さや距離へ広げていくというお考えだったのでしょか。

かこ それが子どもさんの琴線に触れるのではないかと思いました。なんとかしてそういう琴線に触れるような、真つ当なもので押しなから、絵本にいろいろなものをちりばめていくというのが、当時の僕を考え方でしたね。

(かこさとし「談・林公代「聞き手」「科学の本のつくりかた」による)

〔注〕

拝読した——読ませていただいた。

動的に——変化するものとして。

論文——意見や研究の結果を、筋道を立ててのべた文章。

文章。

プレートテクトニクス論——地球のつくりに関する理論。

妥当——実情によく当てはまっていること。

学会——学問研究のための学者の団体やその会合。

仰せつかつて——命じられて。

ことに——中でも。特に。

技術のことをかじった端くれ——技術のことを少しでも学んだ者。

原理原則——基本的な決まり。

匹敵する——同じ程度の。

羅列したり——ならべたり。

真つ当な——まともな。

喚起すれば——よび起こせば。

ちやちな——いいかげんで内容がない。

エンジン——原動力。

琴線に触れる——心の奥底を刺激し感動させる。

文章2

とかく科学の本というと、肩がこる、知識が覚えられる、学校の成績に少しでも役立つ——というような意識が先にたちがちですが、私^{わたくし}の場合、(1)おもしろくて、(2)総合的で、(3)発展的な内容を、これからの科学の本の軸にしたいと心がけています。

おもしろいというのは、一冊の本をよみ通し、よく理解してゆく原動力になるだけでなく、もっとよく調べたり、もっと違うものをよんだりするというように、積極的な行動にかりたてるもつとも大事なエネルギーとなるものです。よい本だけれど一頁よんだらねむくなったとかいうのでは残念なきわみなので、私は内容がよければよいほど、おもしろさというものが必要だと考えています。しかし、おもしろさという口にいっても、子どもだからとて、いや子どもだからこそ、いつも下品でゲラゲラくすぐりだけをよろこぶわけではありません。必ずしだいに内容の深い次元の高いものに興味を^{はってん}発展させ昇華してゆくものと、私は考えています。

二番目の総合性に関連していえば、個々の分野ではすばらしく深い精緻な本が多いのですが、それらは分化し細分化されたまま、その本質や全体像が明示されていない^{*}うらみがありました。日本の科学技術の泣き所の一つに、やはり総合力のなさや学界の断層の問題が多くの方から指摘されています。したがって、こまかな個々の分野は他の方におまかせして、私はあまり他の方がおやりにならない総合性をめざしてみたいと考えているものです。

第三の発展性については、今日の科学技術の様相を、ただ現状だ

けとか、いまいえる限りといったように静的に提示するだけでは十分ではありません。なぜそのような^{*}なってきたかという姿勢の延長としての未来、どう臨むのが好ましいのかという態度、そうした科学観や社会への視点、未来への洞察といった点が、これからの科学の本、しかもこれからの将来に生きる子どもたちのための本としては不可欠であると私は考えています。そのことは、好むと好まざるとにかかわらず、作者に態度を明確にすることを迫るでしょう。

(かこさとし『地球』解説 による)

〔注〕 残念なきわみ——非常に残念。

くすぐり——笑わせようとする事。

昇華してゆく——高めてゆく。

精緻な——くわしくて細かい。

うらみ——残念な点。

泣き所——弱点。

学界——学問の世界。

断層——意見などの食い違い。

様相——ありさま。

静的に——変化のない、あるいは少ないものとして。

洞察——見通し。

〔問題1〕

⑦* 真^{まこと}つ当^{あた}な面白^{おもしろ}さにぶつかると思いますが、「真^{まこと}つ当^{あた}な面白^{おもしろ}さにぶつかる」と、子どもはどうなるのかこっさんは考えているでしょうか。

文章2 の中から探^{さが}し、解答らん^{さだめ}に合うように二十四字以上三十五字以内で答えなさい。（、や。も字数に数えます。）

〔問題2〕

① これからの将来^{しょうらい}に生きる子どもたちのための本とありますが、そのためにかこっさんはどのような態度で本を書いていくのでしょうか。

文章1 のかこっさんの発言の中から探^{さが}し、解答らん^{さだめ}に合うように二十四字以上三十五字以内で答えなさい。（、や。も字数に数えます。）

〔問題3〕

下に示すのは、**文章1** と **文章2** を読んだ後の、ひかるさんとある友だちとのやりとりです。このやりとりのあと、ひかるさんが示したと思われる考えを、四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、下の条件と次ページの〔きまり〕にしたがうこと。

ひかる――

文章1

と **文章2**

を読んで、科学の本を読んでみたくなりました。

友だち――

たしかに、かこっさんが、むずかしそうな専門^{せんもん}知識^{ちしき}まで調べた上で本を作っていることはよくわかりました。でも、それだと、私^{わたし}たち子ども向けの本としてはつまらない本になってしまふと思います。

ひかる――

それは誤解^{ごかい}のような気がします。それに、私はかこっさんの考えを知って、本を読むときに心がけたいこともできました。

友だち――

そうですか。ひかるさんの考えをくわしく教えてくださいます。

条件

次の三段落^{さんだんらくこうせ}構成^{けいせい}にまとめて書くこと

① 第一段落では、友だちの発言^{ごんげん}の中で誤解^{ごかい}をしていると思う点を指摘^{ししてき}する。

② 第二段落では、①で示した点について、**文章1** と **文章2** にもとづいて説明^{せつめい}する。

③ 第三段落には、①と②とをふまえ、ひかるさんがこれから本を読むときに心がけようと思^{おも}っている点を書く。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
 - 最初の行から書き始めます。
 - 各段落の最初の字は一字下げて書きます。だんらく
 - 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。だんらく
 - 、や・や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）
 - 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、」で一字と数えます。
 - 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
 - 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。
-

問題 1

[illegible]

受 検 番 号

得	点
※	

※のらんには何も記入しないこと。

問題2

24		
35	という態度。	20



〔問題3〕

✖	✖	✖	✖
---	---	---	---

(31 小石川)

[illegible]

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、7ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立三鷹中等教育学校

1

次の「文章A」と「文章B」を読んで、それぞれの文章に関する設問に答えなさい。（※印の付いている言葉には本文のあとに「注」があります。）

「文章A」

小学生のレンちゃんが住んでいる町には、こまごました古道具を売っている「銀杏堂^{ぎんなんどう}」というお店があります。とても小さなお店で、高田さんというおばあさんが働いています。お店に置いてある品物についてレンちゃんが質問すると、高田さんとお話をしてくれました。

すきとおった緑色の石が、古びた品物のすきまで光っていました。いままでこの石があることに気づかなかったなんて、ふしぎです。

レンちゃんはその石を、古道具の山からほりおしました。石はずしと重たく、あかちゃんのこぶしくらいの大きさがありました。表面はきらきらしているのに、なかからぼんやりと発光しているかのような緑色は、つねに色をかえてゆらめくオーロラの

ようでした。石のなかをのぞくと、まるでふしぎな緑の世界が閉じこめられているみたいです。

「よく見てごらん。なかに、四つ葉のクローバーが入っているのが見えるだろ？ なに、見えない？ 不器用だねえ。角度をかせれば見えるよ。どれ、かしてごらん」

高田さんが角度をかえながら石を光にかざし、ある角度でレンちゃんに見せました。するとたしかに、小さな四つ葉のクローバーが見えました。

「それはエメラルドだよ。そんな大きなエメラルドはめったに目にかけられないね。もちろん、ほんものさ。といっても、見つかった場所が場所だからね、いわゆるエメラルドと同じにあつたいいものかどうか、さだかじゃないがね」

「どこで見つけたの？」

「それはね、ほんとうにうっとりするような、美しい思い出だよ。いまでも夢じゃないかと思うようなね」

そこで言葉をきって、もったいぶっている高田さんのほうに、レンちゃんがやっとエメラルドから目をはなして向きなると、高田さんはゆっくり話しはじめました。

「わたしがまだ、[※]うら若いおとめだったころの話だよ。[※]春うらら

の、[※]かすみがかった日に、わたしが桜の木の下で泣いていたらね、
そばに[※]ユニコーンが立っていたのさ。

あんまりしずかにたたずんでいたから、いつからそこにいたものか、ちっとも気がつかなかったけどね。そうっと近づくと、おどろいたことにユニコーンも泣いているんだよ。声もたてず、しずかにね。うるんだガラスのような^{ひとみ}瞳から大^{おお}つぶの^{なみだ}涙が、あとからあとからころがり落ちてくる」

「どうしてユニコーンは泣いてたの？」

「わからない。でも、なんだかとってもあわれで、わたしはユニコーンの^{せなか}背中をさすってやったんだ。そうっとね。手をふれたらユニコーンは逃^にげてしまうかと思ったのに、逃げなかった。それどころか、むしろ背中をさすってほしかったようだった。よほど苦しかったんだね。緑^{はいろ}がかった灰色の目からこぼれる涙と、舞^まいちる桜の花びらがね、どちらも音をたてず、はらはらと落ちてきて、それはそれは美しかった。

わたしは自分の悲しみもわすれて、ただただユニコーンの背中をさすっていたんだ。その手ざわりをいまでもおぼえているよ。真^{しんじゆいろ}珠色に[※]光るビロードのような背中を。わたしがうっとりとなでていると、そのうちに、ユニコーンが苦しそうに、あえぎはじ

めた」

「どうしたの？」

「わたしもどうしたのかわからず、おろおろして、ひたすら体をさすってやることしかできなかった。そしたらとつぜん、ユニコーンがなにかを吐^はきだしたんだ。どうやら、それが胸^{むね}につかえて苦しんでいたらしい」

「なにがつかえてたの？」

「このエメラルドさ。この大きな石が、ユニコーンの胸につかえていたんだ。ユニコーンは、この石を吐きだすときゆうに元気になって、子鹿^{こじか}のようにかるやかに、どこかへ走り去ってしまった。わたしは一人、とりのこされた。ユニコーンに気をとられているあいだはわすれていた自分の悲しみが、じわじわとぶりかえしてきた。いや、それどころか悲しみは、ユニコーンに会うまえよりも、いっそうひどくなってしまった。だって、わたしが泣いていても、わたしの背中をやさしくさすってくれる人はだれもいない。しない。

そう思ったら、涙のかたまりの石のようなものが、のどにつかえてくるのをかんじた。あのユニコーンの石のようにね。だれかわたしの背中をさすって、この石を吐きださせてくれたらいいの

に。そうしたら、あんなふうに、はれればと、かるやかにかけだして行けるのに。

そんなやりきれない気持ちでユニコーンの残していった石を見つめていると、ふと、見えたんだ。石のなかに埋^うまっているクローバーが。しかも、ただのクローバーじゃない、しあわせのシン^{*}ボルの四つ葉のクローバーが。

そのとき、わたしはこう思った。このエメラルドはユニコーンの悲しみの結晶^{けっしょう}だ。でも、そのなかにはしあわせが埋^うまっている。もし、わたしののどにつかえている石も、このエメラルドと同じものだとしたら？ その石のなかにも、四つ葉のクローバーが埋^うまっているのかもしれない。

そう思ったら、とつぜんさっきまでわたしを苦しめていた悲しみが、宝^{たから}のようにいとおしくなった。悲しみの石がこんなに美しいものなのだとしたら、わたしは一生この胸に、この石をかかえて生きていってもかまわないと思えた。

それでわたしは、のどにつかえた悲しみの石を、ごくり、と飲みこんだのさ」

レンちゃんはびっくりしました。こんなに美しい石が、高田さんの胸にも入っているなんて。高田さんをとても美しくかんじま

した。

「高田さんはこのエメラルドと同じくらい、きれい」

「おや、あんなふうになってくれるなんて、うれしいね。ありがとう。うん、そうね、人を美しく見せるのは、しあわせなときだけではないかもしれないね。ひめられた悲しみもまた、人を美しく見せるものかもしれないね」

(橘^{たちばな} 春香^{はるか}「銀杏堂^{ぎんなんどう}」による)

〔注〕

※ うら若い——とても若い様子。

※ 春うらら——日の光がのどかで気持ちのいい春の様子。

※ かすみがかった——春のころ空気中の水蒸気すいじょうきが雲のように地上に

広がっている様子。

※ ユニコーン——ヨーロッパの伝説上の動物。体は馬に似てい

て、額に一本の角がある。

※ ビロード——きぬ・わた・毛などで織った、やわらかくつ

やのある織物。

※ シンボル——考えや気持ちなど形のないものを、色や形に

たとえて表したものの。

〔問題1〕もったいぶっているとありますが、高田さんはなぜこ

のような様子だったのですか。三十字以上三十五字以
内で書きなさい。ただし、下の〈注意〉にしたがうこと。

〔問題2〕

わたしは一生この胸に、この石をかかえて生きていつ
てもかまわないと思えた。とありますが、このような
高田さんの思いや、生き方についてあなたはどうか考え
ますか。あなたの考えを、具体的な理由をあげながら
百八十字以上二百字以内で説明しなさい。ただし、次
の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉・段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これ
らの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の
文字と同じますめに書きます。この場合、最後のます
めに書いた文字と記号で一字と数えます。

・。と」が続く場合には、同じますめに書きます。
この場合、「」で一字と数えます。

〔文章B〕

いうまでもなく、上達するためには練習が必要不可欠の要素だが、練習がもたらす効果には、どのようなものがあるのだろうか？

一つは、「将棋に慣れる」という効果がある。

「習うより慣れよ」という言葉があるように、慣れることによって、よりスムーズに洗練された将棋が指せるようになる。

また、慣れてくれば疲れないので、次にすることへの負担も小さくなるし、余裕を持って取り組めるようになるという効果もある。

さらに、余裕が出てくれば、一つの戦法だけに集中する必要もなくなるので、応用の幅が大きく広がっていくという効果も期待できる。

ここでちょっと、子供の頃に自転車の練習をしたことを思い出してみてほしい。

「こうすれば自転車に乗れるようになる」と理屈を教えてもらうだけでは、誰も乗れるようにならなかったはずだ。実際に動かしてみても、何度も転んだりしながら、自転車に慣れていったと思う。そうして慣れることによって、初めて転ぶことなく乗れるよう

になるわけである。

しかし、自転車に乗れる人はたくさんいても、なぜバランスを崩さずに乗り回せるのか説明できる人は少ない。

きちんと説明できるようにするためには、もっともっと練習をして自転車に対する理解を深めるか、仮に乗れなくても一つひとつの動作を分析し、理論を構築できるようにしなければならぬ。それができて初めて、論理的な説明が可能になる。

将棋や自転車に限らず、ものごとを言語化して説明できるようになるためには、対象に関するより深い理解と洞察が必要のよう※どうさつうだ。そのためにも練習は大切だと思う。

練習は、たくさんすれば良いのだろうか？

将棋を始めたばかりの時は、何よりも練習量が必要ではないかと思う。

基本や基礎をしつかりと固めるためには、とにかくある一定のまとまった時間を費やさなければ身に付かないし、そこから大きな進歩も考えられない。

最初のうちは練習量に比例して上達していくが、いずれその伸びが止まり、※ていたいき停滞期に入ることもある。その時はどうしたら良いか？

量によってその壁を乗り越える方法もある。とにかく多くの時間を使って、繰り返し、繰り返し、練習を重ねてレベルアップをして突き抜けるのだ。

また、この時期に練習の質について見直すアプローチもあるのではないかと思っている。メソッドを変えることによって現状を打破し、ブレイクスルーを起こすやり方だ。

停滞期には、どうしてもモチベーションが落ちてしまうので、練習の質を見直すアプローチは、気持ちを切り替える意味でも効果があるような気がする。

さらに私は、練習をする意味として、安心を買っている面もあると思っている。

「これだけ努力をしたのだから大丈夫だろう」「これだけ頑張ったのだからミスをするわけがない」という気持ちになるために、たくさん練習をするわけだ。

練習をまったくせずにそんな気持ちになれる人は、とても少ないだろう。安心も自信も、そんな小さな積み重ねのなかから、徐々に育て上げていくものではないかと思っている。

昨今の将棋界は変化がとても速く、そして激しい。

私が十代の時に一生懸命に研究し、練習した型は、今ではす

でに古くなってしまい、使えることはとても少ない。

それでも稀に、そんな知識が役に立った時はとても嬉しい。「自分の努力は無駄ではなかった、徒労ではなかった」と思えることも、練習の大きな意義の一つなのである。

さらに、練習を続けることによって重要なことを忘れずにすむという利点もある。

人間は、加齢とともに忘れてしまうことが増える。どうでもいいことや必要でないことは、どんどん忘れた方がいいと思うが、重要なことを忘れてしまうのは深刻な問題だ。

だが、それは練習を続けることによって未然に防げる。

おそらく人間の頭の中では、覚えることと忘れることの順位付けが、加齢とともに上手になっているのだろう。練習をすることで、それがさらに上手になり、より洗練されたものになるのだと、私は思っている。

(羽生善治「大局観」による)

〔注〕

※
洞察——物事をよく観察して、その本質を見通すこと。

※
停滞期——あるところにとどまって、進まない時期。

※
アプローチ——近づく方法や道。

※
メソッド——方法。

※
ブレイクスルー——難関を突破すること。

※
モチベーション——何かをしようとしたり、目標をもったりする

ことの動機づけ。

※
徒勞——何にもならない苦勞。

〔問題3〕なぜバランスを崩さずに乗り回せるのか説明できる人は少ない。とありますが、それはなぜですか。本文中

の言葉を用いて、四十字以上五十字以内で書きなさい。

ただし、下の〈注意〉にしたがうこと。

〔問題4〕

練習は、たくさんすれば良いのだろうか？とありますが、練習を続けるのが難しいとき、あなたはどのように考

え、行動しますか。具体例を交えて百八十字以上二百字以内で書きなさい。ただし、次の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉・段落を設けず、一まずめから書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じますめに書きます。この場合、最後のますめに書いた文字と記号で一字と数えます。

・。と」が続く場合には、同じますめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。

〔文章A〕

〔問題 1〕

[illegible]

〔問題 2〕

[illegible]

〔文章B〕

〔問題 3〕

[illegible]

〔問題 4〕

[illegible]

受 検 番 号

--

得点

※のらんには何も記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は2ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立桜修館中等教育学校

次の**文章A**・**文章B**を読んで、あとの**問題**に答えなさい。（*印の付いている言葉には、文章のあとに〈言葉の説明〉があります。）

文章A

わがろうとあせったり、意味を考えめぐらしたりなどしても、味は出てくるものではない。だから早く飲み込こもうとせずに、ゆっくりと舌の上でころがしていればよいのである。そのうちに、おのずから湧然*ゆうぜんとして味がわかってくる。

（和辻哲郎「露伴先生の思い出」による）

文章B

大事なことは、困難こんなんな問題に直面したときに、すぐに結論けつろんを出さずに、問題が自分のなかで立体的に見えてくるまでいわば潜水せんすいしつづけるということなのだ。それが、知性に肺活量はいかつりょうをつけるということだ。

（鷺田清一「わかりやすいはわかりにくい？―臨床哲学講座」による）

〈言葉の説明〉

湧然ゆうぜん…水などがわき出る様子。

問題

右の**文章A**は明治から昭和にかけて活やくした哲学者・和辻哲郎が、小説家・幸田露伴こうだろはんとの思い出について書いた文章の一部分で、師である幸田露伴から学んだ、俳句はいくを楽しむときの心構えを述べたものです。**文章B**は現代の哲学者・鷺田清一わしだきよかずが、知性について書いた文章の一部分で、物事を考えたり判断したりするときの心構えを述べたものです。

この二つの文章は、同じようなことを述べていますが、その中には、ちがいもあります。あなたはこの二つの文章の共通する点と、異なる点^{こと}を、どのように読み取りましたか。解答らん①には、物事に向き合うときの心構えについて共通する点を、二十字以上、四十字以内で分かりやすく書きましょう。解答らん②には、それぞれの筆者が伝えたいことについて異なる点を、「Aは……。」、段落^{だんらく}をかえて「Bは……。」という構成で、全体で百四十字以上、百六十字以内で分かりやすく書きましょう。

また、この二つの文章を読んで、あなたはどのようなことを考えましたか。解答らん③に、あなたの考えを、いくつかの段落に分けて、四百字以上、五百字以内で分かりやすく書きましょう。

(書き方のきまり)

- 題名、名前は書かずに一行めから書き始めましょう。
- 書き出しや、段落^{だんらく}をかえるときは、一まず空けて書きましょう。ただし、解答らん①については、一まずめから書き始めましょう。
- 行をかえるのは段落をかえるときだけとします。会話などを入れる場合は、行をかえてはいけません。
- 読点^{とくてん}↓、や 句点↓。かぎ↓「などはそれぞれ一まずに書きましょう。ただし、句点とかぎ↓。」は、同じますに書きましょう。
- 読点や句点が行の一番上にきてしまうときは、前の行の一番最後の字といっしょに同じますに書きましょう。
- 書き出しや、段落をかえて空いたますも字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。
- 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直しましょう。

(31 桜修館)

解答らん
③

解答らん
②

解答らん
①

解答用紙
適性検査Ⅰ

A blank grid paper with a horizontal axis at the bottom. The axis is labeled with the numbers 500, 400, 300, 200, and 100 from left to right, positioned below the first five columns. The grid itself consists of 20 vertical columns and 20 horizontal rows, creating a total of 400 small squares. The lines are thin and black, and the background is white.[illegible]

40
20

6

※

5	4
※	※
※	
※	
※	

3		2	
※		※	
※			
※			
※			

A schematic diagram of a rectangular domain. The top edge is labeled with the number '1'. The bottom-left corner is marked with a cross symbol '⊗'. The domain is bounded by dashed lines.

受	検	番	号

得	点
※	

※のらんには、記入しないこと

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一

 問1 から

四

 問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから11ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認^{かくにん}しなさい。
- 6 解答用紙は二枚^{まい}あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

ある晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小むすめが山でかれえだを拾っていました。

やがて、夕日が新緑のうすい木の葉をすかして赤あかと見られるころになると、小むすめは集めた小えだを小さい草原に持ち出して、そこで自分の背負^{せお}って来たあらい目かご^{*}につめ始めました。

ふと、小むすめはだれかに自分がよばれたような気がしました。

「ええ？」

小むすめは思わずそういつて、起^たってその辺を見まわしましたが、そこにはだれのすがたも見えませんでした。

「わたしをよぶのはだれ？」

小むすめはもう一度大きい声でこういつて見ましたが、やはり答える者はありませんでした。

小むすめは二三度そんな気がして、初めて気がつく^{*}と、それは雑草の中からただ一ト本^{ひともと}、わずかに首を差し出している小さい葉の花でした。

小むすめは頭にかぶっていた手ぬぐいで、顔のあせをふきながら、

「お前、こんな所で、よくさびしくないのね」

といいました。

「さびしいわ」

と葉の花は親しげに答えました。

「そんならなぜ来たのさ」

小むすめはしかりでもするような調子でいいました。葉の花は、「ひばりのむな毛に着いて来た種がここでこぼれたのよ。こまるわ」

と悲しげに答えました。そして、どうかわたしをお仲間の多いふもとの村へ連れて行って下さいとたのみました。

小むすめはかわいそうに思いました。小むすめは葉の花の願いをかなえてやろうと考えました。そして静かにそれを根からぬいてやりました。そしてそれを手に持って、山路^{やまじ}を村の方へと下って行きました。

路^{みち}にそうて清い小さな流れが、水音をたてて流れていました。しばらくすると、

「あなたの手はずいぶんほてるのね」
と葉の花はいいました。

「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、真ま直ぐすにしていられなくなるわ」

といって、うなだれた首を小むすめの歩調に合せ、力なくふつていました。

小むすめはちよつと当あわくましました。

しかし小むすめには図ずらず、いい考かんがえがうかびました。小むすめは身軽く路ばたにしゃがんで、だまつて菜の花の根を流れへひたしてやりました。

「まあ！」

菜の花は生き返つたような元気な声を出して小むすめを見上げました。

すると、小むすめは宣告せんこくするように、

「このまま流れて行くのよ」

といいました。

菜の花は不安そうに首をふりました。そして、

「先に流れてしまふとこわいわ」

といいました。

「心配しなくてもいいのよ」

そういいながら、早くも小むすめは流れの表面で、持っていた菜の花をはなしてしまいました。菜の花は、

「こわいわ、こわいわ」

と流れの水にさらわれながら、見る見る小むすめから遠くなるのをおそろしそうにさげびました。が、小むすめはだまつて両手うしろを後へまわし、せではねる目かごをおさえながら、かけて来ます。

菜の花は安心しました。そして、^①さもうれしそうに水面から小むすめを見上げて、何かと話しかけるのでした。

どこからともなく気軽な黄ちようが飛んで来ました。そして、うるさく菜の花の上について飛んで来ました。菜の花はそれをも大変うれしがりました。^②しかし黄ちようはせっかちで、^{*}うつり気でしたから、何時いつかまたどこかへ飛んで行ってしまいました。た。

菜の花は小むすめの鼻の頭にポツポツと玉のようなあせがかび出しているのに気がつきました。

「今度はあなたが苦しいわ」

と菜の花は心配そうにいいました。が、小むすめはかえつて不愛想に、^③

「心配しなくてもいいのよ」

と答えました。

菜の花は、しかられたのかと思って、だまつてしまいました。

間もなく小むすめは菜の花の悲鳴におどろかされました。菜の花は流れに波打っているかみの毛のような水草に根をからまれて、さも苦し気に首をふっていました。

「まあ、少しそうしてお休み」

小むすめは息をはずませながら、そういつてかたわらの石にこしを下おろしました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、気持きもちが悪いわ」

菜の花はなおしきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」

小むすめはいいました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気持が悪いの。どうかちょっとあげて下さい。どうか」

と菜の花はたのみましたが、小むすめは、

「いいのよ」

と笑って取り合いません。

が、そのうち水のいきおいで菜の花の根は自然に水草から、すりぬけて行きました。そして不意に、

「流れるう！」

と大きな声をして菜の花はまた流されて行きました。

小むすめも急いで立たち上あがると、それを追ってかけ出しました。

少し来た所で、

「やはりあなたが苦しいわ」

と菜の花はコワゴワいいました。

「何でもないのよ」

と小むすめもやさしく答えて、

そうして、菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より二三ふたさん

間先げんをかけて行く事にしました。

ふもとの村が見えて来ました。小むすめは、

「もうすぐよ」

と声をかけました。

「そう」

と、後で菜の花が答えました。

しばらく話はたえました。ただ流れの音にまじって、パタパタ、パタパタ、と小むすめのぞうりで走る足音がきこえていました。

チャポーンという水音が小むすめの足元でしました。菜の花は死にそうな悲鳴をあげました。小むすめはおどろいて立たち止どまりました。見ると菜の花は、花も葉も色がさめたようになって、

「早く早く」

とのび上っています。小むすめは急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」

小むすめはそのむねに菜の花をいだくようにして、後の流れを見回しました。

「あなたの足元から何か飛びこんだの」

と菜の花はどうきがするので、言葉を切りました。

「いぼがえるなのよ。一度もぐって不意に私の顔の前にうかび上ったのよ。口のとがった意地の悪そうな、あの河童かわづなのような顔に、もう少しで、わたしはほつたをぶつける所でしたわ」

といいました。

小むすめは大きな声をして笑いしました。

「笑い事じゃあ、ないわ」

と菜の花はうらめしそうにいいました。

「でも、わたしが思わず大きな声をしたら、今度はかえるの方でびっくりして、あわててもぐってしまいましたわ」

こういつて菜の花も笑いしました。

間もなく村へ着きました。

小むすめは早速自分の家の菜畑にいっしょにそれを植えてやりました。

そこは山の雑草の中とはちがって土がよくこえておりました。

菜の花はどんどんのびました。そうして、今は多勢おおぜいの仲間と仕し合せにくらす身となりました。

(志賀直哉「菜の花と小むすめ」問題のため一部改編)

〔注〕

* 目かご…竹などで編んだ目のあらいかご。

* 一ト本…一本のこと。

* 当わく…どうしてよいか分からなくて、とまどうこと。

* 図らず…思いがけず。

* うつり気…興味の先が変わりやすいこと。

* 二三間…「間」は長さの単位、一間は約1・8メートル。

* 仕合せ…めぐりあわせ、幸せのこと。

問1

さもうれしそう 大変うれしかったです ①
とあります
が、この場面で「菜の花」にとつてどんなことがうれし
いのですか。「小むすめ」と「黄ちよう」という二つの
言葉を用いて「くがうれしい」に続くように答えなさい。

問2

小むすめはかえって不愛想に、③「心配しなくてもいい
のよ」と答えました とありますが、なぜ不愛想に答え
たのですか。「かえって」という言葉に着目して、その
理由を「くから」に続くように答えなさい。

問3

④ 菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より二三間
先をかけて行く事にしました とありますが、「二三間
先をかけて行く」ことが、なぜ「気をもませ」ないこと
になるのですか。その理由を解答らの言葉に続くよう
に答えなさい。

問4

⑤ そのむねに菜の花をいだくように について (1)、
(2) の問いにそれぞれ答えなさい。

(1) この表現から、小むすめから菜の花に対するどのよう
な思いが読み取れますか。漢字二字で答えなさい。

(2) (1) の解答をふまえて、あなた自身が「むねにいだ
くように」している物事について、自らの体験を交えた
具体例を挙げ、その理由とともに次の条件にしたがつて
書きなさい。

条件

書き出しは一まずめから書き始めなさい。

また、文章は、六十字以上七十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

〔二〕 次の文章Aと対談Bを読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章Aは、将棋棋士の羽生善治さんの講演です。また、対談Bは、羽生善治さんと科学者の永田和宏さんによる対談です。問題文中では羽生善治さんの発言を「羽生」、永田和宏さんの発言を「永田」と表記しています。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

文章A

「棋はアなり」という言葉があります。将棋では、相手と対局中に言葉を交わすことはほとんどありませんが、駒を動かしながら「ここまで取らせてください」「わかりました。そこまではいいでしょう」「じゃ、これもいいですか」「いや、それはちよつと欲張りでしょう。こちらも戦いますよ」というふうに盤上で話をしているようなものだ、ということなのです。

対局中は、もちろん自分の作戦や方針をいろいろ練っているわけですが、実はそれよりも大事なものは、相手が何を考えているのかを読むことです。

私（わたし）がたいへんお世話になった原田泰夫九段という大先輩は、色紙を頼まれると「三手の読み」と書いておられました。「三手の読み」とは、自分が指す、次に相手がこう来て、それに対

して自分はこう指すという三手で、最短のシミュレーションということになります。三手先を読めばいいだけですから、簡単そうに思われるかもしれませんが。

ところが、この「三手の読み」が実は難しい。最初の手は自分の好きなようにやればいいだけです。問題は二手目に相手が何をやってくるかです。みなさんは子どもの頃、「相手の立場に立って考えましょう」と言われた経験があると思います。が、相手の立場に立って相手の価値観で考えるということは、大人でもかなり難しい。

将棋でも、相手の立場に立って、自分の価値観で考えてしまうことがよくあります。一応、盤面をひっくり返して、相手だったらどう指すかと考えてみるんですが、つい、相手のほうから見たときに自分だったらどう指すかというふうに考えてしまう。そうすると、当然ながら相手と自分とは発想の違いがあるのです。現実の場面では、予想外の手が入ってくることがあるわけです。

その二手目の読みを間違ってしまうと、それから先、何百と読もうが何千と読もうが、結果として自分が考えている通りにはならない。非常に難しいところです。ですから、とにかく一生懸命想像する、推測する、推察する。それが、様々な物事

に挑戦^{ちようせん}するとき、何が来ても動じないために大切な要素になるのではないかと思っています。

ある程度、リスクがとれるようになってきた、経験もそれに積^{*}んできたという段階^{だんかいはん}になっても、新しい挑戦は必要でしょう。私もいろいろなデータを見て分析^{ぶんせき}しながら、新しいアイデアや発想が湧^わいてこないかいつも考えています。

ところが最近、それがなかなかうまくいかなくなってきました。自分で「これはすごいいい手を思いついた、実戦^{じせん}の場で試^{ため}してみよう」と思っても、調べてみると、すでに誰^{だれ}かがそのアイデアを思いついている可能性が非常に高い。

将棋の世界も、私たちの社会と同様に情報化の波にさらされています。ですから今、新しいアイデアといっても、すでに今までにあったアイデアとアイデアを、過去に例がない組み合わせで用いている場合が多い。そういうものが、新しいアイデアということになっているようです。もちろん、既存^{きそん}の考えを根本から覆^{くつがえ}すような発想をしようと心がけていますが、見たこともない斬新^{ざんしん}な発想は、全体の一割^{いちわり}にも満たないのではないかと思います。

そしてもう一つ、最近、将棋の世界で変わってきたと思うのは、以前は一人で考えて、一人で分析して、一人で研究をして

いる世界だったのが、ここ二十年くらいの間に、何人かで一緒^{いっしょ}に研究することが多くなってきた点です。

将棋は個人競技ですから、チームメイトがいるわけではない。ただし、ひとりでやっている、限界があるのも事実です。三人寄れば文殊^{もんじゆ}の知恵^{ちえ}ということわざ通り、一足す二になるのではなくて、掛け算^{かさん}になって、様々なアイデアや発想が生まれる。そこで、いかにして目標や価値観を共有できるチームやグループをつくるかということも大切になってきています。これは、将棋の世界だけではなく、どの分野にも共通している傾向^{こうきやう}ではないでしょうか。

情報化社会の恩恵^{おんけい}を受ける一方で、逆に難しくなっているのが、スタートラインに立つために必要な情報や知識がものすごく多くなっているということです。それらを記憶^{きおく}し、習得するのに、かなりの時間を費^{つい}やさなくてはいいけません。

もちろん、それはそれで大切なことですが、なんとかそれを習得したうえで、いざ新しいことをやろうと思うと、身に着けたものが先入観や思い込み^{おもひこみ}になって、なかなか新しいものが生まれてこないという壁^{かべ}にぶつかります。

クリエティブなことをしようと思ったら、先入観を完全に頭の中から消し去るのが理想です。それが難しくても思い込み

はとりあえず脇^{わき}に置いて、様々な可能性を排除^{はいじょ}することなく、まっさらな状態になってどう見えるかを考える。それが、新^①たなものを生み出す第一歩になるのではないでしょう。

対談 B

永田 講演の中で、原田泰夫さんが色紙に書かれる「三手の読み」という、すごく含蓄^{*がんちく}がある言葉を紹^{しょう}介^{かい}してくださいました。三手先とは、そのうちの二手は自分が指しているんですよ。で、二手目だけが相手。でも、考えてみると、棋士はその二手目に全部賭^かけているということになりますね。自分の立場を離^{はな}れて相手の気持ちになっていかないと、相手の手を読めないということなんでしょうか？

羽生 そうですね。一つの場面で八十通りぐらいの可能性があるので、その中から相手がこう考えているんじゃないかとか、こういう手は指さないんじゃないかとか、今まで類似^{るいじ}した場面だとかいうことをやってきたから、今回はこの手じゃないかというふうに考えていきます。

ただし、意外とお互^{たが}い相手の手が予想できないときのほうが、熱戦とか名局といわれるものになりやすい。自分が相手の読^よみ筋^{すじ}をちゃんと予測できたときより、何を考えているかまったく

わからなくて、意外な手が続いたときのほうが、内容的にはいいものになるんです。しかも、自分の手も、感覚的に確信が持てないほうがいい手であることが多い。つまり、これはいいと思^②って指す手は、相手から見ても狙^{ねら}いがはつきりしているわけです。いいかどうか自信がないけれど、深みを持たせるために打った一手が、のちのちいい展開^{てんかい}になるというケースはけっこう多いんです。

永田 おもしろいなあ。でも、あまりにも考えすぎて悪い手になるということもあるんでしょうか。

羽生 ありますね。例えば二択^{にたく}で散々迷ってしばらくすると、そうじゃなくてこっちのほうがいいんじゃないかと三番目の手を思いつくときがあるんです。でも、それはだいたい悪い手のことが多い。

永田 えっ、悪い手なんですか（笑）。

羽生 そうなんです。その状態が苦しいから、そこから逃^{のが}れるために他の手がよさそうに思えてしまうんですね。

永田 われわれ人間は誰でも、ほんとうに迷ったときは視界^{しかい}が狭^{せま}くなってしまう。ちょっと別の視点から見ると、全然違う出口があるのに、その出口が見つからないということがよくありますよね。そう考えると、二択のときに、別の視点から見

第三の手を見つけるといいうのも、大事なことだと思っんですが。

羽生　そうですね。科学の偉大な発見なんかも、そういうモヤモヤとした状態の中から、ブレークスルーが生まれてくるっていうこともありますね。

永田　科学の世界でも一番怖いのは常識にとらわれることです。これまでわかつている知識の中だけでもを考えていると、そこからはみ出したものは、絶対その思考の中に入ってこない。可能性としてはあるのに、その可能性を検証する前に、なんとなく消去してしまう。これが怖いところですね。それからどんなふうにも別の考え方へ飛躍できるかは、大事な点だと思います。

(やまなかしんや 山中伸弥 羽生善治 是枝裕和 山極壽一 永田和宏「僕たちが何者でもなかった頃の話しよう」問題のため一部改編)

〔注〕

*棋…将棋のこと。

*対局…将棋の対戦を行うこと。

*三手…将棋では、駒を一回動かすことを「一手指す」という。つまり「三手」とは、自分が駒を動かし、次に相手が駒を動かし、再び自分が駒を動かすというように自分と相手とで合計三回駒を動かすこと。

*リスク…危険。結果を予測できる度合い。

*含蓄…表面に現れない深い意味、内容。

*ブレークスルー…進歩、前進。ここでは、手がかりやきっかけのこと。

問1

本文中の空らん **ア** にあてはまる適切な言葉を次の語群から一つ選びなさい。また、その言葉を選んだ理由を解答らんに合わせて答えなさい。

語群 一 言葉 挑戦 対話 思いやり 勝負 一

問2

① 新たなものを生み出す第一歩 とありますが、それを難しくしてしまうことは何ですか。対談Bから十字でぬき出して答えなさい。

問3

② 相手から見ても狙い^{ねらい}がはっきりしている とありますが、どうしてそのようなことになってしまうのですか。その理由として考えられることを解答らんに合わせて答えなさい。

問4

文章Aの中に 三人寄れば文殊^{もんじゆ}の知恵^{ちえ} とありますが、本文中で羽生さんは「三人寄れば文殊の知恵」をどのようなことと考えていますか。また、それをふまえてあなたの「三人寄れば文殊の知恵」にあてはまるできごとを、次の条件にしたがって書きなさい。

条件1 段落構成^{だんらく}については、次の①から③にしたがうこと。

① 二段落構成で、内容のまとめりやつながりを考えて書きなさい。

② 第一段落では、本文で用いられている「三人寄れば文殊の知恵」ということわざについて、どのようなものと述べていますか。その部分を要約しなさい。

③ 第二段落では、羽生さんの考えをふまえて、自らの体験を書きなさい。

条件2 解答は原稿用紙^{げんこう}の正しい使い方^{けいり}で書き、書き出しは1

ます空けて書き始めなさい。

また、文章は、二百字以上二百四十文字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数え、改行などで空いた
ますも字数に数えます。

（1枚め／2枚中）

受検番号

10

11

1



から。

解答用紙
(2枚め／2枚中)

受検番号

[illegible]

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

1000

100

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

1 次の文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

① 子どものころからずっと、外国のいろいろな土地を旅してみたいと思ってきました。

大学生になってまもなく、ぼくは夢の実現にむけて行動を開始しました。なかまを集めて、探検部をつくったのです。同じような夢をもつなかまが十人以上も集まりました。

まずはみんなで、本格的な探検にむけて、国内の山登りや川下りの練習をつみます。海外遠征を目標に、一年間に百日以上も山や川ですごしたこともあります。

トレーニングを続けながら、外国の^{*}辺境地帯を探検した人に会っては、いろいろと話をきき、本を読んでは情報を集めました。自分で資金をつくるために、さまざまなアルバイトもしました。とにかく探検にでて、いままでとちがう環境に自分をおいてみたかったです。自然環境もそのほかの文化も、日本とはまるでちがうところへ行って、いままで知らなかった世界を見てみたい、そこに自分をほうりこむことで、いまだ気分がなかった、意外な自分自身が見えてくるのではないだろうか、そんなふうに思っていました。

やがて、ぼくの心の中に、目的地が見えてきました。地球上でもっとも未知な部分を残している、南米大陸を流れる世界最大の大河アマゾンです。アマゾン探検の実現を目標に、大学を一年^{*}休学して現地に入ったのは、大学三年生、一九七一年のことでした。

この最初の旅で、ぼくは南米大陸の魅力にとりつかれました。以来、二十年以上も、南米大陸に通いつづけることになりました。

ギアナ高地、パタゴニア、アマゾン、オリノコといろいろな場所をおとずれ、いくつもの村をたずねました。狩りにつれていってもらったり、魚を捕りにいったり。畑仕事に参加し、祝いの席ではともに歌い、踊ります。

彼ら^{*}インディオたちにとって、ぼくは、日本というどこか遠い所からやってきた、なんの役にもたたない居候です。でも、彼らはぼくを受け入れ、安全にすごせるように気を配ってくれました。食べ物も、「さあ、これを食べてみる、うまいぞ」と、いちばんおいしいところをわけてくれます。

② こんなに親切にしてもらっても、ぼくはなにもしてあげられない。彼らにたいして、申しわけないという思いがつのつてきます。

なにかぼくにできることはないだろうか。

そんなときに、病気で苦しむ子どもの姿が目にはいりました。村の生活でぼくのいちばんの友達^{ともだち}は子どもたちでした。いっしょに森にはいて、木の実やフルーツ集めをしたり、魚を捕ったり、虫を捕ったり。好奇心^{こうきしん}いっぱいの子どもたちは、いろいろなことを教えてくれます。

その子たちが、日本でならば、薬ですぐに治るような病気で苦しむ、ひどいときには命さえも失っているのです。医者になって、この子たちを救いたい——ぼくは医者になることを決意しました。

そして、また受験勉強をして、医学部にはいりました。医学部の学生時代も、医者になってからも、もちろん南米大陸に通いつづけたのです。こうして南米大陸の魅力にとりつかれたことがきっかけで、ぼくはいま、人類の足どりをたどる旅に出発することになったのです。

〔注〕 辺境地帯——国の中心から遠くはなれた土地。

南米大陸——南アメリカ大陸。

休学——学業を休むこと。

インディオ——南アメリカに以前から住んでいた民族。

居候——他人の家に世話になっている人。

パタゴニア グレートジャーニー 人類5万キロの旅①（関野吉晴「嵐の大地」による）

（次のページへ続きます。）

文章2

友情の関係における「待つ」ということについては、「三日会わざれば刮目^{＊かつもく}して待つべし」という言葉がある。これは、三日会わずにいれば相手はその三日のうちに成長しているだろうから、それを見逃さずに心[＊]して会うようにすべきだという意味だ。

「こんなものだろう」というたかをくくった見方を捨てて、相手が常に向[＊]上する人間だという前提で見るということである。

お互いの成長を見逃さないような気持ちで「待つ」友がいるという気持ち[＊]が、互いを成長させるのだ。

「今度会うときに成長した自分を見せることができるようにしておこう」という気持ち[＊]が、友が心に住むということだ。③ 会わない時間に努

力した跡は、友たち同士ならば、すぐにわかる。

僕が中学生のときに聞いた話だが、二人の画家の友人同士がいて、しばらく会わなかったが、ひさしぶりに片方が会いに訪ねてきた。しかし、[＊]あいにく友人の画家はるすで、部屋にはだれもない。このまま帰ろうかと思ったが、みると何も描いていない。キャンバスがたてかけてある。彼は何を思ったか、そこで、絵筆をとり絵の具をつけて、たてにまっすぐ一本の線を引いて、そのまま帰った。

しばらくして、友人の画家が部屋にもどってみると、キャンバスに線が引いてある。それをみて、画家は、「ああ、あいつが来てたのか、会えなくて残念だったな。ずいぶん、あいつは上達したな」と思ったそうだ。一本の線を見ただけで上達がわかるなんて、かっこいい関係だ。ただ、絵画に詳しいからわかるんじゃないかと、お互いの今までの歴史をしっかりと、しかも両方が向[＊]上しているからわかるんだと思っ

自分の向[＊]上を見逃さないでわかってくれる友の存在は、やる気をかきたててくれる。

予想しなかった新しい何かが生まれたり、別れた後に、元気が出て向[＊]上心がわくような関係は、それほどむずかしいことじゃないし、特別才能に恵まれた人たちだけのものじゃない。ふりかえれば、だれにでも、そういう関係はあったはずだ。

友情は、「向[＊]上心」を柱にして、お互いが「自己形成」の醍醐味を味わう関係だ。「ともに高めあう関係」をつくり、自己形成の道を一緒に歩んだ友情の関係性は、何ものにもかえがたい生涯の宝だと、僕は信じている。

（齋藤孝「スラムダンクな友情論」による）

〔注〕 刮目——目をこすってよく見ること。注意して見ること。

心して——十分に気をつかうこと。

たかをくくった見方——たいしたことはない、相手を軽く見ること。

あいにく——つづが悪く、残念なようす。

キャンバス——油絵をかくのに使う、布。

自己形成——自分自身をかたちづくること。

醍醐味——ものごとのおもしろさや楽しさ。

〔問題1〕 ① 子どものころからずっと、外国のいろいろな土地を旅してみたいと思ってきました。とありますが、筆者が「旅」に期待していたことは

何ですか。 **文章1** から読み取ったことを、四十字以上五十字以内で書きなさい。（、や。などもそれぞれ字数に数えます。）

〔問題2〕 ② 彼らにたいして、申しわけないという思いがつのってきます。とありますが、筆者が「申しわけない」と思うにいたったインディオたちの

行動を、 **文章1** のことばを使って、三十字以上四十字以内で書きなさい。（、や。などもそれぞれ字数に数えます。）

〔問題3〕 ③ 会わない時間に努力した跡は、友だち同士ならば、すぐにわかる。とありますが、「友だち同士ならば、すぐにわかる」のはなぜですか。

その理由と考えられることを、 **文章2** のことばを使って、二十字以上三十字以内で書きなさい。（、や。などもそれぞれ字数に数えます。）

（次のページへ続きます。）

〔問題4〕

文章1

文章2

は、どちらも「成長」をテーマに、筆者の体験や意見が書かれています。二つの文章を読んで、あなたは自らを「成長」させるためには何が大切だと考えましたか。次の二つの条件を満たしながら、三百五十字以上、四百字以内で書きなさい。

条件1

第一段落^{だんらく}には、

文章1

文章2

の要点をまとめること。

条件2

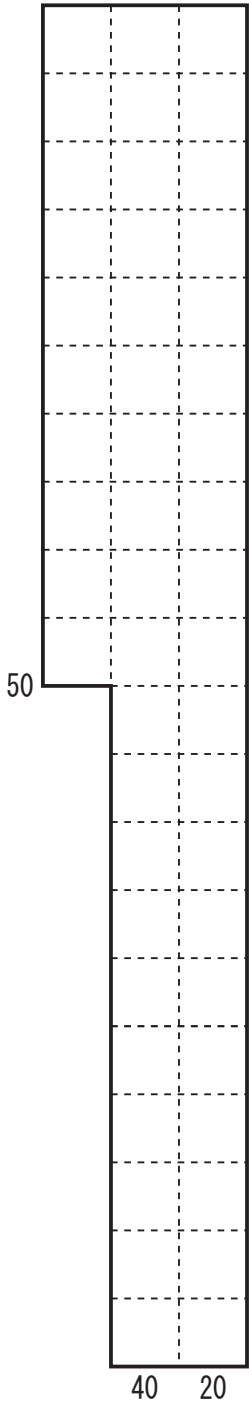
第二段落からは、あなたの経験をいまえた考えを書くこと。

記入上の注意

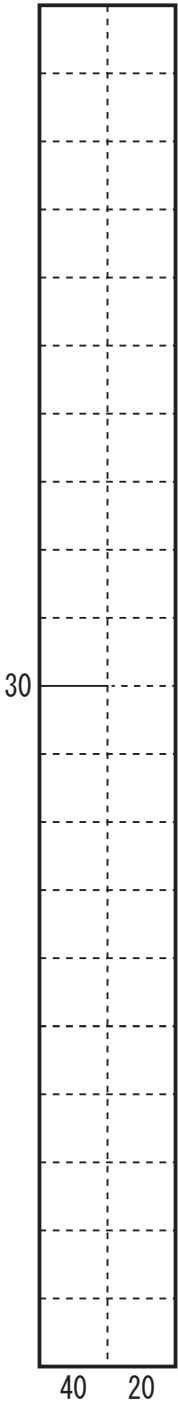
- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。
- 書き出しや段落をかえたときの空らんや、や。や「などもそれぞれ一字に数えること。
- 段落の最初は、一字下げて書くこと。

1

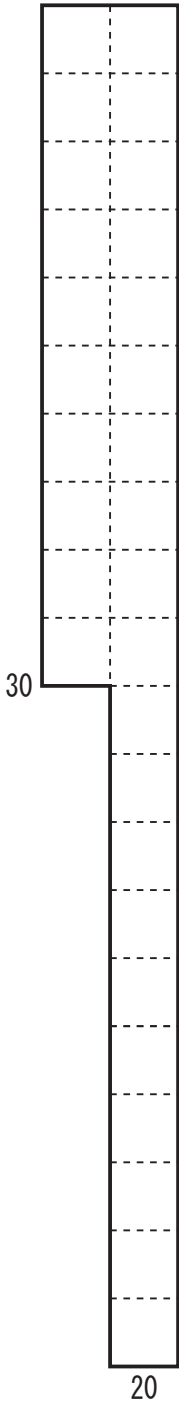
〔問題1〕



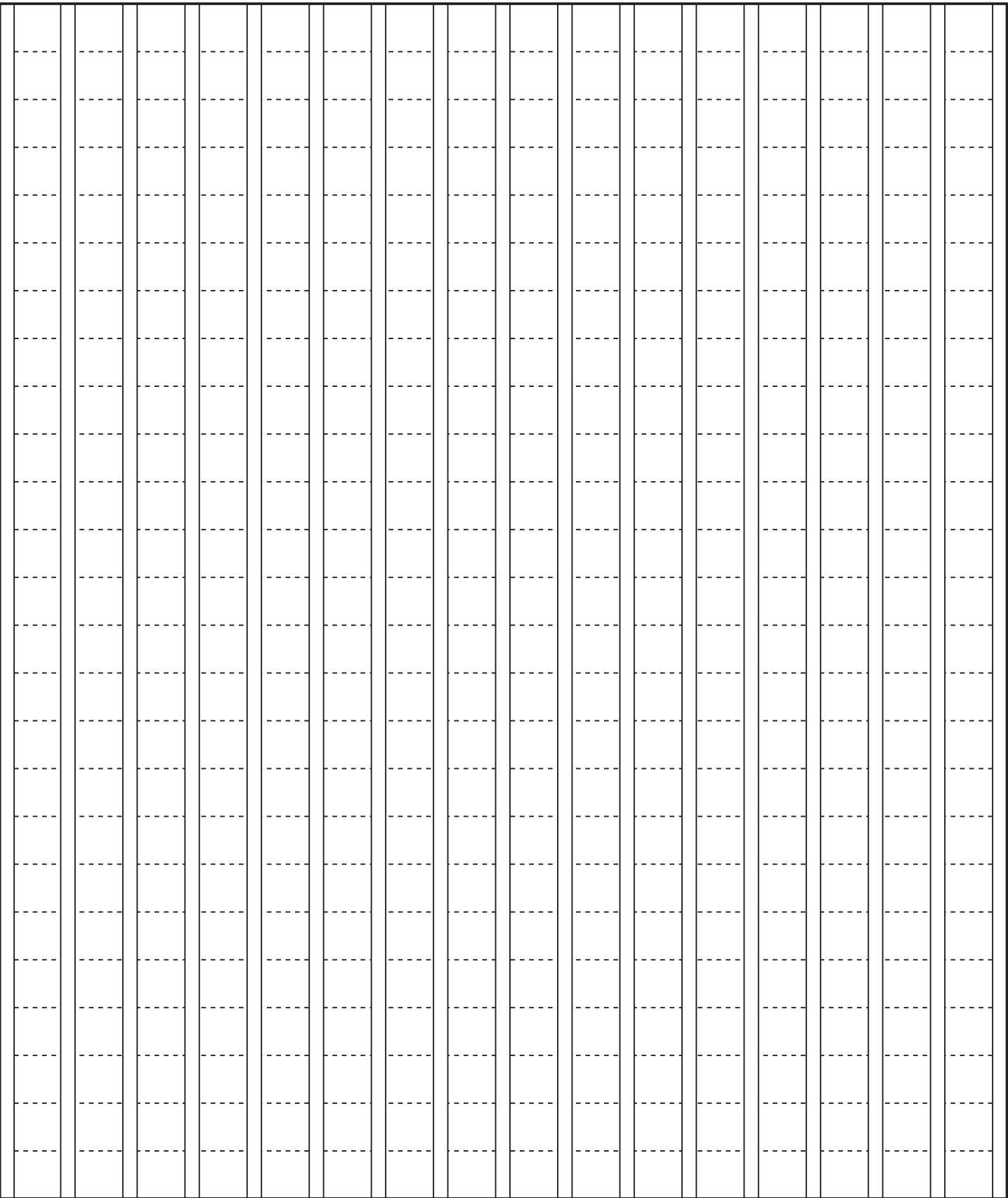
〔問題2〕



〔問題3〕



〔問題4〕



受 検 番 号

得 点
※

※のらんには、記入しないこと

(30 両国)

※

※

※

※

※

※

※

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

1

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

やさしさが *ちまた 巷に溢あふれている。やさしくない人は *けいえん 敬遠される。だからだれもがやさしい自分でありたいと思う。

でも、改めて考えてみると、何がやさしさなのかよくわからない。突き詰めれば突き詰めるほどわからなくなる。そんな迷いを抱かかえる人たちの参考になればと思い、やさしさについていろんな側面から考えてみることにした。

やさしい人が求められる時代のようなのだ。

男性は理想の女性として「やさしい人」をあげ、女性も理想の男性として「やさしい人」をあげる。

やさしい女性が人気なのは昔からだ、男性にも「たくましき」より「やさしき」が求められるようになり、男女ともやさしさが人気の条件になっている。

こいびと けっこんあいて 恋人や結婚相手ばかりではない。肌はだにやさしい、環境かんきやうにやさしいなど、人間関係以外でもやさしいことが絶対的によいことであるかのようなイメージがあり、やさしさが大きな価値かちをもつ時代と言ってよいだろう。

では、どんな人がやさしいのだろうか。今の時代は、人の気持ちを傷きずつけない人がやさしいと言われるようだ。

傷つけられるのはだれだって嫌いやなはずだ。こっちが傷つくようなきつ

いことを平気で言う人にはつい身構みくまえてしまっし、そのような人は敬遠けいえんしなくなる。

人の気持ちを傷つけないように配慮はいりよしてくれる人だと、こちらも安心してかわれる。

でも、そのような配慮の行き届とどいた人とかかわりに、どこか物足りなさを感じることもあるのも事実だ。

傷つくようなことを言いってこないと安心感はあるのだが、なんだか距離きよりを感じさせるのだ。気持ちが触ふれ合っている感じがしない。

傷つけないように気を遣つかうばかりの関係かんけいってなんか淋さびしい。そう思わないだろうか。

もしかしたら、「嫌きらわれたくない」っていう、ただそれだけの思いから、やさしげな態度をとっているのかもしれない。それって、自分のことだけを考えると、*ぶなん無難にかかわろうとしているだけで、ほんとうに親しくかわる気持ちなんかないということではないのか。そう思うと、なんか心の距離を感じてしまっ。

これまでこっちの気持ちを傷つけるようなことを言わない人のことをやさしいと思っていたけど、疑問ぎもんが湧わいてきたという人もいる。よく考えてみると、気を遣*ってホンネを出さないようにしているのかもしれないし、そっだとする、親しくつき合あうようになり、ホンネを出し合あえるようになったとき、ほんとうにやさしい人かどうかかわからない。

もっと単純たんじゆんな状況じやうきやうを想定しても、「今、ここで」傷つけないように

配慮するのがやさしきなのかどうか、簡単に判断しにくいということがある。

たとえば、服を裏表間違えて着ている人や前と後ろを間違えて着ている人を見かけたとき、指摘してあげるかどうか戸惑うことがある。

その場で傷つけないように見て見ぬフリをするやさしさもあるが、この先さらに恥をさらすのを防いであげるためにあえて教えてあげるやさしさもある。

やさしい人がいいとだれもが言うわけだが、このように「人の気持ちを傷つけない人はやさしいのか」という点について考えるだけでも、具体的にどんな人がやさしいのか、どうもよくわからなくなってくる。

ほめてくれればだれだって嬉しい。ほめてくれる人は、こちらを気分よくさせてくれる。

でも、いつもほめてくれる人はやさしいのだろうか。どうしていつもほめるばかりなのだろうか。

人をいい気分にさせてあげたいという思いが、人一倍強いのだろうか。

あるいは、ほめれば何か良いことがある、たとえば、ほめていれば好意が得られる、少なくとも嫌われることはないと思ったりしていいのだろうか。

いつもほめてくれる友だちといえると気分がいいし、そのような友だちをいい人だと思ふものだが、もし向こうが「ほめていれば相手から好かれるものだ」といった意識のもとにほめているとしたら、その人のことをやさ

しいと言っているのだろうか。

一方で、こっちの至らない点などを教えてくれる友だちは、痛いところを指摘してくるため、「嫌なことを言ふなあ」とその瞬間はネガティブな気分になるが、「たしかにそこは自分のダメなところだな」と感じることもある、そのお陰で欠点を意識して修正することができると。

このような友だちは、言いくいことを言うことで嫌われるかもしれないのに、あえて言ってくれているとしたら、むしろやさしいと言えるのではないだろうか。

お年寄りに席を譲るのは人として当然のやさしさのはずだ。だが、傷つけないのがやさしさということになると、そのやさしさの発動にブレーキが掛かることがある。

それは、席を譲るべきお年寄りかどうか微妙なときだ。親切のつもりで席を譲ろうとしたところ、相手はただ老け顔なだけで、まだ席を譲られるような年齢ではなかった。そんなことになったら、相手は気分を害するだろう。

明らかに老人であっても、席を譲られるほど自分は弱っていないといった^{*}、自負をもっている場合、席を譲られることで、自分はやはり弱々しく見えるのだろうかと気にしてしまふかもしれない。

どうみても席を譲るべきだと思えるお年寄りの場合はよいのだが、そうでないときは、席を譲ろうという思いと同時に、相手を傷つけるのでは、

といった懸念^{*けねん}も生じる。

こちらが席を譲ることで、助かるお年寄りが多いはずだ。ゆえに、余計なことを考えずに、お年寄りがいれば席を譲ればいい。それがやさしさのはずだ。

相手が固辞^{*}した場合、引き下がればいい。そのとき相手が傷ついたかどうかなど気にすることはない。万一、

「自分が老人に見えたのか、そんな年でもないんだけどな」

と、相手が内心傷ついたとしても、こっちが親切心から席を譲ろうとしたのはわかるはずだし、意地悪で年寄り扱いしたなどと邪推^{*じやすい}されるようなことはあり得ない。

だが、絶対に傷つけてはならない、それがやさしさだ、というような風潮^{*ふうちよう}が広まることで、本来のやさしさを発揮^{はつき}しにくくなってしまつたのである。

相手が傷つかないように配慮するのももちろんやさしさではあるが、それにとらわれるあまり、本来のやさしさにブレーキが掛かる。二つのやさしさの間で身動きが取れなくなるのである。

相手のためを思う気持ち^{*}が基本にあり、安易^{*}に見返りを求めないのがほんとうのやさしさと言える。

好かれないからほめるというのも、嫌われないから厳しい^{きび}ことは言わないというのも、見返りを求める態度であって、やさしさとは言えない。

そもそも人の内面など、なかなかわかるものではない。相手の気持ちなどお互い^{たが}になかなか読めないし、この先どんな反応をするかなど予想できない。予想外の反応に驚か^{おどろ}されることもある。

ゆえに、相手がこちらの真意を理解せずに、攻撃^{こうげき}的な反応を示すかもしれない。こっちが相手のためを思って、気まずくなるのは覚悟^{かくご}の上で、言いにくいことを言ってやったつもりなのに、まるで意地悪をされたかのように敵意^{*む}を剥き出しにした反応をぶつけられることがある。

それを嫌って、言いにくいことは言わないというのは、ほんとうのやさしさではない。自分のためといった視点^{してん}が、相手のためといった視点^{まき}に勝っているからだ。

こちらの思いが通じず、相手が傷つき、こちらを恨む^{うら}ようなことになるかもしれない。相手のためだと思つたら、あえて厳しいことも言つし、厳しい課題を課^くすることもする。その結果、自分が嫌われても仕方ない。それが最終的には相手のためなのだ。そのような姿勢^{しせい}を取れる人は、ほんとうのやさしさをもつ人と言える。

（榎本博明^{えのもとひろあき}『やさしさ』過剰^{かじよう}社会^{しゃかい} 人を傷^{きず}つけてはいけないのか^か）
による）

〔注〕

巷 ^{ちまた}	世の中。
敬遠 ^{けいえん}	それとなく遠ざけること。
無難 ^{ぶなん} に	安全であぶないところがないように。
ホンネ	「本音」のこと。本当の気持ち。
至 ^{いた} らない	不十分な。
ネガティブな	いやな。
発動	動きだすこと。
自負	自分の能力などへの自信。
懸念 ^{けねん}	心配。
固辞 ^{こじ}	強く断ること。
邪推 ^{じやすい}	ものごとを悪いように考えること。
風潮 ^{ふうちょう}	世の中の傾向 ^{けいこう} 。
安易に	気軽に。かんたんに。
剥 ^む き出し	かくさないこと。

〔問題1〕

「傷つけないように気を遣^{つか}うばかりの関係ってなんか淋^{さび}しい」
のはなぜですか。筆者の考えを四十字以上五十字以内で書き
なさい。

〔問題2〕

「席を譲るべきお年寄りかどうかが微妙^{びみょう}なとき」でも、筆
者は席を譲るべきだと述べていますが、それはなぜですか。
六十字以上七十字以内で書きなさい。

〔問題3〕

「本来のやさしさ」とは、どのようにすることだと筆者は述
べていますか。また、その考えについてあなたはどのように思いま
すか。あなたが今までに実際に受けたやさしさの経験を交え、あ
なたの考えを、四百六十字以上五百字以内で書きなさい。

なお、次の《注意》にしたがって書きなさい。

《注意》

段落^{だんらく}をかえたときの残りのます目は字数として数えます。

ただし、問題1・問題2は、一ます目から書き、段落をかえてはいけま
せん。

ゝや。や」なども、それぞれ字数に数えます。

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**3** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立南多摩中等教育学校

次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

アメリカの心理学者で、最初にアサーションの考え方を紹介したウォルピイは、「人間関係における自己表現」には大きく三つのタイプがあると説いました。

第一に、自分よりも他者を優先し、自分は後回しにする自己表現。第二に、自分のことだけをまず考えて行動し、時には他者をふみにじることにもなる自己表現です。この二つは、対照的というか両極端です。第一の自己表現は「非主張的自己表現」、第二のタイプは「攻撃的自己表現」と呼ばれています。

この二つのタイプに対して、第三のタイプは、第一と第二のちやうどよいバランス^二黄金率^二とも言えるもので、自分のことをまず考えますが、他者のことにも配慮^{はいりよ}する自己表現です。これがアサーションです。それではここから、それぞれのタイプについて見ていきましょう。

最初は、「非主張的自己表現」です。

非主張的自己表現とは、自分の意見や気持ちを言わない／言いそくなう、言っても相手に伝わりにくい自己表現です。これには、あいまいな表現や、人に無視^{むし}されやすい自信なげな小さな声での話し方や消極的態度^{ふく}も含まれます。「自分はダメだ」とか「言っても分かってもらえない」などあきらめの気持ちが潜^{ひそ}んでいたりします。

非主張的自己表現は、相手から理解されにくいことがあります。また、

相手を優先し、自分を後回しにするため、結果として相手の言いなりになってしまふこともあります。相手と意見が異なる^{こと}ときでも自分の意見を言わないため、理解されなかったり、無視されたり、同意したと誤解^{ごかい}されたりします。自分としては主張を抑えて譲^{ゆず}ったつもりでも、配慮したことは伝わらず、感謝されることもないでしょう。

非主張的自己表現をした後には、「やはり分かってもらえなかった」「自分が引いて／譲^{ゆず}ってあげたのに……」「惨め^{みじ}だなあ」という気持ち^{みじ}がどこに残ります。心から相手を配慮し、尊重^{そんちよう}して同意したり、譲^{ゆず}ったりした場合は違^{ちが}うからです。

このタイプの表現をする人は、反論^{はんろん}しないために、葛藤^{かっとう}やもめごとを回避^{かいひ}してくれる「いい人」と思われていますが、一方で「都合のよい人」ともみなされがちです。

二つ目のタイプは、非主張的自己表現の逆で、「攻撃的自己表現」です。攻撃的自己表現は、非主張的自己表現とは対照的に、自分の言い分や気持ちを通そうとするものです。たとえば、「言い放しにする」「押しつける」「言い負かす」「命令する」「操作^{そうさ}する」「大声で怒鳴^{どな}る」などは、攻撃的自己表現です。

攻撃的自己表現では、自分が正しいかのように言い張り、相手を黙^{だま}らせようとしたり、同意させようとしたりします。自分と異なる意見やものの見方に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けようとせず、雑音^{ざつおん}、異物^{いぶつ}、脅威^{きょうゐ}と捉^{とら}えて、無視^{むし}排斥^{はいせき}しようとすることもあります。

このような表現をしている人は、一見堂々としているように見えま

すが、どこか防衛的^{ぼうえいてき}で、必要以上に威張^{いば}ったり強^{つよ}がったりしがちです。

結果としてたしかに意見は通るのですが、本人が後味の悪い思いをすることも少なくありません。自分の言い分が通れば、一時的には満足感も覚えますし、優位^{ゆうい}に立って勝った気分になります。しかし、そんなことを続けていると、利害関係でつきあう人はまわりに残るでしょうが、それ以外の人々には敬遠^{けいえん}され、孤立^{こりつ}することになります。

さて、前の二つの自己表現の黄金率とも言えるバランスの自己表現、それが「アサーション」あるいは「アサーティブな自己表現」です。

その本質は、自分も相手も大切にしたいコミュニケーションをすることです。

アサーションとは、自分が話したいことを非主張的^{そつちよく}にも、攻撃的^{すなわ}にもならず、なるべく率直に、素直に伝えると同時に、話した後には、相手の反応を待ち、対応することも含んだ自己表現です。

たとえば、友人とお茶でも飲みながら話したいと思って率直に「お茶を飲みに行かない？」と誘^{さそ}うことはアサーションです。すると、友人から「行きましょう」と同意されることもあれば、「行けません」と同意されないこともあるでしょう。そのいずれに對しても、きちんと対応をしていくこともアサーションには含まれるということです。

こうしたアサーティブな自己表現の結果、双方が「そうだ」「そうだ」と理解^{なっとく}と納得^{もと}の下で話がトントン拍子^{びょうし}に進むこともあれば、「同意できない」「分からない」といった反応が返ってくることもあるでしょう。率直に話してすぐに意見や考えが一致^{いっち}すれば、それはラッキーなこと

とです。

合意が得られないときは、互^{たが}いに意図を説明して相互^{そうご}に理解し合い、新たな歩み寄りの提案をして、合意点を見つける話し合いをします。もちろん一時的に葛藤^{かつどう}が起る可能性もあります。

無理に相手に折れたり遠慮^{えんりょ}したり、逆に傷^{きず}ついたりムカツとしたりするのはなく、面倒^{めんどう}がらずに意見を出し合い、双方に納得のいく結論^{けつろん}を出すことを目指すのです。

そのようなやり取りは、互いに相手を理解し、歩み寄りのためのアイデアを出し合いますから、思いやりに満ちた率直なやり取りになります。したがって、気持ちのいいものです。本人も相手も大切にされたという気持ちになるでしょう。

アサーションはそんな相互尊重の体験でもあります。

(平木典子「アサーション入門―自分も相手も大切にしたい自己表現法」による)

〔注〕

葛藤^{かつどう}——あれこれと悩^{なや}むこと。

排斥^{はいせき}しようとする——きらって、遠ざけようとする。

敬遠^{けいえん}され——避けられ。

〔問題1〕

「このような表現をしている人は、一見堂々としているように見えますが、どこか防御的ぼうぎょてきで、必要以上に威張いばったり強つよがったりしがちです」とありますが、ここでいう「防御」とはどのように何を守ることですか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まず目から書き始めること。

〔問題2〕

「一時的に葛藤かつどうが起こる可能性もあります」とありますが、「葛藤かつどうが起こる可能性」があるのはどのようなときですか。十五字以上二十五字以内で答えなさい。

なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まず目から書き始めること。

〔問題3〕

自分の主張が受け入れられないとき、あなたはどのような歩み寄りの提案をしますか。

本文の内容をよくふまえ、次の〔手順〕と〔きまり〕にしたがって、四百字以上五百字以内で説明しなさい。

〔手順〕

- 1 自分の主張を理由とともに、具体的に書く。なお、何について主張するのは自分で決める。
- 2 想定される別の意見を書く。
- 3 別の意見を言う人の意図をふまえ、歩み寄りの提案をする。

〔きまり〕

- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。だんらく
- 段落をかえたときの残りのまず目は字数として数えます。
- ゝや。や「なども、それぞれ字数に数えます。ただし、。と」は同じますに入れ、一字と数えます。

1 |

問題 1

25

35

問題 2

[illegible]

〔問題 3〕

[illegible]

この中には何も書かないこと

[illegible]

受 檢 番 号

--

得点

※のらんには、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1

文章1

文章2

を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

これからまたしばらくのあいだ、私どもの周囲にはいろいろな花が咲いたり、飛び交う蝶の姿が見られるようになります。私が、多少普通の人もそういうものに関心を持っていることを知って、近所の子供たちが、時々虫などをつかまえて来て私にその名をたずねるのです。こんな大きな蛾がいたよ、おじさんこれなんていうの？ 彼は少し手に負えないいたずらっ子で、うちの生垣の竹の棒を抜いて、野球のバットにしていたこともありますし、木のぼりをして枝を折ることも専門家です。その子が水色の、大きな蛾を一匹つかまえて来まして、その一枚の翅をつまんで私に名前をたずねるのです。「そんな風に住んでいるとばたばたあばれて翅の粉をみんな落としてしまう、蛾でも蝶でも、こういう風に持たなくちゃあ」そういつて私はまず持ち方を教え、それからその蛾はオオミズアオ、あるいはユウガオビヨウタンという名であることを教えます。どうも忘れそうなので、紙にその名を書いて渡します。この蛾の幼虫がどんな形をして、どんな植物の葉を食べるか、幸いにして私はそれを知ってはいましたけれども、彼はまだ小学校の三年生、ただ名前を知ればよいのです。というより、彼が知りたいと思ったのはその名前だけなのです。

「知識の獲得には、ある不思議な快さと喜びがある」という古い言葉

がありますが、この平素はいたずらの専門家である彼も、確かに満足の色を顔に浮かべて帰って行きます。私は、こういう風に幼いものから何かをたずねられた時、たとえ自分が手を離したくない仕事をしている時でも、少なくともいやな顔は見せないようにして、そうしてその名を知らない時、あいまいな時には、その子供と一緒に本をしらべるようにしています。

詩人の尾崎喜八さんが、昔、あの植物学者の牧野富太郎氏をかこむ植物同好会の人々と採集に行かれた時の文章に次のような箇所があります。それは、先生、これは何ですか、これは何と申しますかと、次々にたずねられる時牧野博士はそれをたちどころに説明されるのですが、それに続いて、次のような文章があります。「先生が日本の植物に対して百の名称を断ぜられるとしても、僕はただ先生の記憶の強さ、知識の広さに驚くだけである。植物学者としての先生の大いなるカルテから見れば、それは当然の事のように思われる。しかし一人の可憐な小学生が――腰に小さい風呂敷包みの弁当を下げ、肩から小さい胴乱をつるした子供が、何か小指の先ほどの植物を探して来て、『先生これ何ですか』ときいた時、『これは松』といいながら、その子の頭へ片手を載せられた時の、あの温顔の美しさを僕は忘れない」

私はこの一節が非常に好きなのです。がそこには、知ること、そのための人間どうしに通うあたたかいものが感じられます。ただ人間としてこれだけのものは知っておかなければならない。そういう気持ちで本を読んだり、学校へ通って勉強をする。それも確かに必要なことな

のですが、そこで、もし一方は教える他方はそれを教わるという関係だけならば、それは全く機械的なものになって、ついには試験のために勉強をするという、^{*}今ではあたり前のことになってしまった現象も生まれて、知ることによって快さや喜びが伴^{ともな}って来るような、ごく素朴^{そぼく}な姿があまり見られなくなっていました。私自身にしましてもそういう傾向^{けいこう}は確かにあるのですが、自分の知らないことでも、もう誰^{だれ}かは必ず知っている、もっと手っ取り早い方をすれば、たいがいのことには本に書いてあると思ってしまつて、特に知ろうとしないのです。さまざまの事典と名のつく本が出ることは、それに誤^{あやま}りが無い限り実^じにありがたいことなのですが、これだけ手もとに持つていれば必要な時にその知識をそこから引き出せるという考え、これは案外恐^{おそ}ろしいことではないかと思ひます。昔の人は私たちより知識の持ち方は少なかつたと思ひます。また、その知識も誤^{あやま}つていたことが多いかも知れません。^{*}コロンブス以前の、大多数の人々は別の大陸があるかも知れないということは恐^{おそ}らく考えなかつたでしょうし、このようにして人間の発見や発明^{いはん}が一般^{いっぱん}の人たちにも知識をふやしていったことも事実であります。しかし、^⑦知ることと、知らされることの違^{ちが}いを考えてみていただきたいのです。

(串田孫一^{くしだまごいち}「考えることについて」による)

〔注〕

生垣 ^{いけがき}	あまり高くない木を植えならべて作ったかきね。
平素	ふだん。いつも。
色	表情。
少なくとも	少なくとも。せめて。
たちどころに	ただちに。すぐに。
断ぜられる	きっぱりと判断なさる。
カルテ	本来は医師が用いる記録のカードのこと。ここでは、経験といった意味をふくむ。
可憐 ^{かれん} な	かわいらしい。
胴乱 ^{どうらん}	植物採集などに用いる入れ物。
温顔 ^{おんがん}	おだやかであたたかみのある顔。
今	この文章が書かれた、一九五四(昭和二十九)年当時。
素朴 ^{そぼく}	ありのままでかざり気が無く自然なこと。
コロンブス	イタリアの航海士 ^{こうかいし} 。ヨーロッパで初めて現在のアメリカ大陸にたどり着いたとされる。

文章2

教養の一つの本質は、「自分の頭で考える」ことにあります。著名^{*ちよめい}な科学史家の山本義隆氏は、勉強の目的について「専門^{*せんもん}のことであるが、専門外のことであろうが、要するにものごとを自分の頭で考え、自分の言葉で自分の意見を表明できるようにするため。たったそれだけのことです。そのために勉強するのです」と語っています。この当たり前のことが、案外置き去りにされている気がします。

「自分の頭で考える」際には、「腑^{*ふ}に落ちる」という感覚が一つのバロメーターになります。本当に自分でよく考えて納得^{*なつとく}できたとき、私たちは「腑に落ちる」という感覚を抱^{*いだ}きます。この感覚は大変重要です。ところが、「腑に落ちる」ことも、また少々軽視^{*けいし}されているところがあります。たとえば、何か分からないテーマや事柄^{*ことがら}があったとして、それについて誰か^{*だれ}が説明していたら、その説明を聞いただけで、もう分かったつもりになっている、といったことはないでしょうか。

とくに最近^{*きん}は安直に「答え」をほしがる傾向^{*けいこう}があり、それに応じてきれいに整えられた「答え」や、一見「答え」のように見える情報が、ネット空間などにはあふれています。ランキング情報やベストセラー情報などは、その最たる例です。あるいは情報がコンパクトにまとめられたテレビ番組もたくさんあります。多くの人が、まるでコンビ二へ買い物に行くかのように「答え」の情報に群がり、分かった気になっています。

誰かの話をちよっと聞いただけで「分かった」と思うのは安易な解

決法です。立派^{*りっぱ}そうな人の本を読んで「なるほど、その通りだな」と思い、翌日^{*よくじつ}に反対の意見を持つ人の本を読んで「もっともだな」と思ったのでは、意味がありません。自分の頭で考えて、本当に「そうだ、その通りだ」と腹^{*はら}の底から思えるかどうかが大切なのです。

① 私自身は、人の話を聞いてすぐに「分かった」と思うことはほとんどありません。心の底から「分かった」と思えない間は、「そういう考え方もあるのだな」という状態で保留^{*あつか}扱いにしておきます。否定^{*ひてい}もしません。結論^{*けつろん}を急いで「分かった」と言おうとするのは間違^{*まちが}いのもとです。「腑に落ちる」まで自分の頭で考え抜^{*ぬ}いているかどうか、私たちはもう少し慎重^{*しんちょう}になったほうがいいと思います。

整えられた「答え」ですませてしまうのは、そのほうが楽だからです。しかし、それは手抜き^{*てぬき}というものです。世の中のたいていの物事には、じつはすっきりした「答え」がありません。それが人生というものです。すっきりしているのは、多くの情報がそぎ落とされ、形が整えられているからです。しかし多くの場合、そぎ落とされた部分がキモ^{**}だったり、形を整える際に、（道理^{**}ではなく）無理^{**}が入り込んでしまっていたりします。

すっきりしない情報をあちらこちらから収集^{*しゅうしゅう}し、自分の頭のなかで検証^{**}し、本当に納得^{**}することが、「自分の頭で考える」ということです。物事^{*みあやま}を見誤^{**}らないための、とても重要な作業です。私は、多少へそ曲がりの性格ということもあって、子供のころからずっとその姿勢^{*しせい}を貫^{*つらぬ}いてきました。

「何となく腑に落ちないな」という感覚が少しでもあれば、安易な妥協はせずに探求を続けることが大切です。別の見方を考えてみる、さらに情報を探してみるなど、いまでは情報を探る方法はたくさんあります。探求を続けるうちに、あるところで、本当に「腑に落ちる」という感覚が得られるはずで、それが納得できたということです。

(出口治明「人生を面白くする 本物の教養」による)

〔注〕

著名な——よく知られた。有名な。

科学史家——科学の歴史を研究する人。

「腑に落ちる」という感覚——何かが体の底にすんと落ちるように、心に入ってくる感覚。

バロメーター——本来は気圧を測る計測器。ここでは、もの事のようすを知るものになるもののこと。

安直に——手軽に。気軽に。

ネット空間——インターネットの世界。

最たる——最も代表的な。

コンパクトに——大切なところがむだなく簡単に。

キモ——ここでは、最も大切な点や事なら。

道理——物ごとの正しいすじみち。

無理——りくつに合わないこと。

検証——ものごとを調査して、事実を証明すること。

〔問題1〕 ⑦ 知ること、知られること について、次の問いに答えなさい。

(1) 「知られること」とちがって、「知ること」の出発点にはどのような気持ちがありますか。 **文章1** の中の言葉を使って書きなさい。

(2) 「知ること」ができれば、どのような気持ちが生まれますか。 **文章1** の中の言葉を使って書きなさい。

〔問題2〕 ① 私自身は、人の話を聞いてすぐに「分かった」と思うことはほとんどありません。とありますが、それはなぜですか。

文章2 の中の言葉を使い、解答らんに合わせて書きなさい。

〔問題3〕 あなたは、これから学校生活や日常生活の中で、何を大事にし、どのように行動していこうと思いますか。 **文章1** と

文章2 、それぞれの内容に関連づけて、四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の

〔きまり〕にしたがうこと。

条件 次の三段落構成さんだんらくこうせいにすること。

① 第一段落で、**文章1** と **文章2**、それぞれの内容にふれること。

② 第二段落には、「①」をいまえ、大事にしたいことを書くこと。

③ 第三段落には、「②」をいまえ、行動を具体的に書くこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落だんらくの最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合は行をかえてはいけません。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じように書きます。(まず目の下に書いてもかまいません。)

○ 。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「。」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

1

問題 1

(1)

(2)

問題 2

筆者は、

まで、

ことを心がけているから。

問題 3

(30 小石川)

20

100

200

300

400

440

受 検 番 号

得点



※のらんには、記入しないこと。

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**8** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

1

次の「文章A」と「文章B」を読んで、それぞれの文章に
関する問題に答えなさい。（※印の付いている言葉には本文のあ
とに「注」があります。）

「文章A」

秋になってから、はじめての寒い日がありました。もうじきに冬
になるのです。鳥はみんなあったかい南のお国のほうへおひっこ
しをしてしまいました。また春になったら、帰ってまいります。
羽を折った一羽いちわの小鳥がありました。ほかの鳥といっしょに飛ん
でいくことができませんので、寒い冬の間じゅう、どこにいたら
いいかと、たいそう心配いたしました。森の中に何本なんぽんもなんぽん
も大きな木が立っているのを見ましたから、

「ああ、あの大きな木にたのんだら、きっと冬じゅう、あたしを
世話してくれるだろう」

と思いました。

バサリ、バサリとやっとのことで、森まで飛んでいった小鳥は、
一番はじめに、大きな、大きな、かしの木のところへ来ました。

「あのう、大きなかしの木さん、どうかお願いですから、春にな

るまで、私わたしをあなたのあったかい枝の中に、泊とどめてくださいま
せんか」

かしの木はむずかしい顔をして、

「うるさいことをいう小鳥だな。おまえみたいな者を冬じゅう、
泊めておくなんていうことができるものか。せっかく、わたしが
大事にしているどんぐりを、おまえに食べられてしまったらたい
へんじゃないか。さっさとあっちへいきなさい」

と言いました。

かわいそうな小鳥は、なみだが出そうになるのをがまんして、
またいたい羽根で、バサリ、バサリ、バサリンと飛んで、こんど
は川のそばのきれいな柳やなぎのところへ来ました。

「ああ、きれいな柳のおばさん、どうか春がくるまで、私をその
枝に泊まらせてくださいませんか」

とたのみますと、柳はこわい眼めをして、小鳥をにらめながら、
「まあ、とんでもないことを言ってる。わたしは知らない鳥なん
ぞとは、口をききませんよ」

と言ったきり、横を向いてしまいました。かわいそうな小鳥は
どこへ行っていいのかまるでわからなくなりましたが、ただマゴ
マゴと、折れた羽根であっちゃこっちを、飛んでおりました。

そのうちに、杉すぎの木がこの小鳥を見つけてまして、むこうからこえをかけました。

「小鳥ちゃんや、あんたどこへ行くつもりなの」

さつきから意地わるなことばかり言われていた小鳥は、しんせつな杉のおばさんのこえを聞くと、もうがまんができなくなつて、ポロポロなみだをこぼしながら、

「どこへ行くんだか、知りません。森の木はだあれも、あたしを泊めてくれないんです。あたしは羽根が折れていて、とおくへは飛んでいけません」

「それじゃあ、わたしの枝の中へおはいりなさい。ソラ、この枝が一番あったかそうよ」

「あのう、これからずうっと、冬じゅういてもいいでしょうか」

「ええええいいとも、いいとも、ゆっくり泊まっていられっしょい」

杉の木となり、松の木が立っていましたが、さつきからはなしを聞いていて、申しますには、

「わたしの枝は、あんまりあったかくはないけれど、風があたりないようにここに立っていて、風をとめてあげましょう。わたしはせいがたかくて、じょうぶだから、風をとめるには、ちようどいいですよ」

羽根の折れた小鳥は、杉の木のあったかい枝の間へはいりました。そうして、松の木はピンとまっすぐに立って、ヒュウヒュウ吹いてくる風が、よわい小鳥のところまで行かないように、とめてやりました。

小鳥はやっとこさで、冬のおうちができましたので、ホッと安心いたしました。

森のおくのほうで、見ていたかしの木や、柳の木は、顔を見合せて、いろいろのわるくちを言いました。

「まあ、どうでしょう。今まで見たこともない鳥を、泊めてやるなんて、ずいぶんおどろいてしまいますわね。どこの者だかわかりやしませんわね。おお、きもちがわるいこと」

こう言ったのは柳の木でした。かしの木も、すぐ柳の木のあとから、

「ほんとだとも、わたしだって、どんぐりが大事でさあね。あんなわけのわからない鳥はきつとどろぼうもするにきまっていますからね」

と言いました。

柳の木とかしの木は、いろいろなことを言いながら、杉と松のほうを見て、わざとゆびをさしたり、わらったりしました。

ちょうどそのばんです。北風が森へあそびにきました。つめたい、つめたい氷のようないきを吹きながら、北の風はヒュウヒュウと森じゅうをはしりました。

そのつめたいいきがあたった葉っぱは、みんなバサリ、バサリとじめんへおっこちてしまいました。北風はそれがおもしろくておもしろくて、たまらなかったのです。

もっともっと、たくさん、森じゅうの木をみんなはだかにしてしまったら、おもしろいだろうと思いましたが、北風はお父さんしむおうさまの霜王様におききました。

「ねえ、お父さま、ぼく、森じゅうの木の葉をみんな吹き飛ばしてやりたいの。いいでしょう、このはじからずうっと、あっちまで、かたっぱしから、ありったけの木を、はだかにしてしまったら、おもしろいだろうな。」

ねえ、お父さま、いいでしょう、よろしいっておっしゃってちょうだい」

けれども、霜王様はくびを振りしました。いくらかわいい子どもということでも、これはよろしいとおっしゃらなかったのです。

「いや、それはいけない。わしはけさから、見ていたが、この森の中には、たいへんに、しんせつな木と、いじわるの木とりよう

ほうある。羽根の折れた小鳥にしんせつにして、冬の間泊めてやる、杉の木と松の木の葉はおとしはいかん。しんせつをした杉の木と松だけでなく、森じゅうの杉と松はみんな、たすけてやれ。しんるいからあんな、えらいしんせつ者をだしたのだから、せかいじゅうの杉と松はこれから、ずっと、いつまでも、冬が来て、ほかの木の葉がなくなるときにも、青い葉をつけていられるようにしてやろう。」

おまえも、わしの言ったことをよくおぼえていて、大きくなってからも、けっして、杉と松の仲間には、つめたいいきを吹きかけてはいけないぞ。わかったか。せかいじゅうで、一番えらいのは、しんせつなことをする者だ、よわい者にいばらずに、やさしくしてやるのが、ほんとうにつよいのだ」

とたいへんにながく、北風にはなして聞かせましたので、子どもの北風でしたが、よくお父さまのおっしゃったことがわかりました。

それで、北風はそのばん杉や松のおなかまの葉っぱには、吹きつけませんで、そうっと、よけてとりました。

北風は、そのばんからずうっと今まで、よくお父様の霜王様のおっしゃったことを、おぼえておりますから、松や杉は一年じゆ

う、ああおおとした葉をして、森にも、山にも、道ばたにも立っております。

(村岡花子^{むらおかはなこ}「村岡花子童話集 たんぽぽの目」による)

〔問題1〕「ポロポロなみだをこぼし」とありますが、このときの小鳥がなみだを流した理由を、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

〈注意〉・一まず目から書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。(まず目の下に書いてもかまいません。)

・。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

〔問題2〕「お父さまのおっしゃったこと」とありますが、霜王様^{しもわづなさま}

の言葉から北風はどのようなことを学びましたか。本文中の言葉を使いながら、あなた自身の体験も交えて、百八十字以上二百字以内で説明しなさい。

〈注意〉・段落^{だんらく}を設けず、一まず目から書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。(まず目の下に書いてもかまいません。)

・。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

〔文章B〕

全ての言葉には意味がある。

通常、知らない言葉が出てきた時には、国語辞典を引くことで、その言葉本来が持っている意味や正しい用法を調べることになる。こうした辞書に載っている意味は、言葉の成り立ちも含めた本質的な意味である。

その一方で、言葉の用いられ方や、言葉の持つ印象は時代によって変わっていく。

分かりやすい例では「全然」という言葉の使用法を挙げる事ができる。本来であれば「全然くではない」というように、否定語とともに用いることで、否定の意味を強める用法が正しい。しかしながら、現代では必ずしも「くではない」という否定語を伴わない使われ方をされている。「全然大丈夫」「全然いいよ」などである。

意味が大きく変わっている言葉では「適当」は分かりやすいだろう。本来の意味では「ぴったりと丁度いい」というよい意味の言葉なのだが、現在では中途半端に行うといった否定的な意味が先行している。もしも、しっかりやりますという意味で「適当

にやります」と発言しようものなら、「適当にやるとはなににごだ」と口論になるだろう。話している側は正しい用法で用いているのに、受け手が間違った意味で捉えてしまったならば、コミュニケーションは成立しないことになる。

このような状況を「言葉の乱れ」として憂うことは簡単なのだが、言葉の意味が時代によって変わることは致し方ない。ただでさえ、インターネットやスマートフォンが普及することで、コミュニケーションの方法が激変しているのだ。メディア環境が変わっているのに、そのメディアに乗る言葉だけが形や意味を変えずにいられるはずはない。

そこで重要なのは、言葉の意味が広がることを楽しむ姿勢なのではないだろうか。本来は誤用だが、新しい意味や用法も無視しない。そんな曖昧さを受け入れる姿勢である。

人は言葉で考え、言葉で発信し、言葉で理解し合う。その言葉が変化していくことは概念や価値観の変化をもたらし、世の中をより自由なものにする可能性すらあると思う。

ここでは積極的に言葉の概念を刷新することで、言葉に新しい意味を持たせる方法について述べていきたい。この方法は言葉の意味を拡張するだけでなく、言葉の新しい意味を発明する方

法であるとも言える。

言葉に新しい意味を発明するには簡単な方法がある。それは、新しい名前を付ける、というものである。より具体的に言えば、対象となるモノが本来持っている価値ではない、別の役割を与えらるのだ。

その方法は非常にシンプルで「○○って、△△だ。」という構造の中に、2つの言葉を入れるだけである。たったそれだけのことで、新しい意味を発明することができるようになる。中に入れる2つの言葉は、できるだけ真逆の意味を持っている言葉のほうが効果を発揮する。

実際にいくつかの例を挙げてみよう。

「生徒って、先生だ。」

本来、先生と生徒の関係は教える教えられるという関係であるものの、先生も生徒から学ぶことがたくさんある。その関係を逆転させることで、新しい名前を付けることができるようになる。

このように、相対する言葉を「○○って、△△だ。」の型に入れることで、新しい名前を付けることができるようになる。そのため、私はこの方法を「命名法」として、今までの常識を打ち

破る概念を打ち立てる必要がある時に用いている。

この構造を理解してしまえば、自分が文章や言葉にしたいことを想定しながら「○○って、△△だ。」の箇所を埋めていけばいい。

「大人って、子どもだ。」

大人にも、子どものような好奇心や遊び心がある。

「仕事って、遊びだ。」

仕事を楽しくてやろうという気持ちを持つことで、遊びのようになる。

「言葉って、武器だ。」

コミュニケーションを円滑にするために、言葉は大きな役割を担っている。

「欲張りって、長所だ。」

欲張りであることを好奇心が旺盛な状態と捉えるならば、よい意味に変わる。

これらの例を見て分かる通り、新しい名前を付ける際は、今までのイメージと真逆の名前を与えたほうが効果を得られる。さらにひと手間加えてみると、それだけで1つの文章が完成してし

まう。

「生徒って、実は、先生なんだ。」

「大人も、案外、子どもだね。」

「仕事なんて、遊んじゃえ。」

「言葉にできるは武器になる。」

「欲張りは、私の長所です。」

新しい発見をしたかったり、今までとは違ったものの見方を求められている時には、「○○って、△△だ。」という構造を思い出して、ぜひ活用してみていただきたい。そして、新しい文脈が発見できた後は、文章にひと手間を加えて、より心に響く形へと変換すればいいのだ。

名前が変われば、意識が変わる。常識が変わる。

(梅田悟司「『言葉にできる』は武器になる。」による)

〔注〕

※^{うれ}憂う——心配する。不安に思う。

※^{ごよう}誤用——あやまって用いること。

※^{がいねん}概念——それぞれのことがらから、共通するところを

取り出して、まとめた考え。

※^{しん}刷新——悪いところをなくして、すっかり新しくする

こと。

〔問題3〕「言葉の用いられ方や、言葉の持つ印象は時代によって

変わっていく。」とありますが、時代によって変化していく言葉をどのように受け入れていけばよいと筆者は説明していますか。五十字以上六十字以内で書きなさい。

〔注意〕・一まず目から書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（まず目の下に書いてもかまいません。）

・。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「で一字と数えます。

〔問題4〕「名前が変われば、意識が変わる。常識が変わる。」と

ありますが、このことから筆者はどのようなことを伝えたいと考えていますか。あなたが考える「○○って、△△だ。」という命名法を用いた具体例を挙げながら百八十字以上二百字以内で説明しなさい。

〔注意〕・段落だんらくを設けず、一まず目から書きなさい。

・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（まず目の下に書いてもかまいません。）

・。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「で一字と数えます。

受	検	番	号
得			点
※			

※のらんには何も記入しないこと

[illegible]

〔問題 2〕

[illegible]

〔文章B〕

〔問題 3〕

[illegible]

〔問題 4〕

[illegible]

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は2ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立桜修館中等教育学校

次の**文章A**・**文章B**を読んで、あとの**問題**に答えなさい。

文章A 水を飲んで楽しむものあり。錦を衣て憂ふるものあり。

文章B 出る月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。

(井上哲次郎「新訂日本陽明學派の哲學」による)

問題

右の文章は江戸時代のある学者が、自分のもとで学ぶ若者のために示したいくつかの文章の一部分です。

文章A は「水を飲んで愉快に思う人がいる。また、豪華で美しい着物を着てなげき悲しむ人がいる。」という

意味です。**文章B** は「出る月を待つのがよい。散る桜を追ってはいけない。」という意味です。

この学者は、この文章を通して、どのようなことを言いたかったのだとあなたは考えますか。

解答らん①に「Aは……。」、段落をかえて「Bは……。」という構成で、全体で百六十字以上、二百字以内で分かりやすく書きましょう。

また、この二つの文章に共通する物事のとらえ方・考え方はどのようなものだと思われるか。あなたは考えますか。そして、その物事のとらえ方・考え方について、あなたはどのようなことを考えましたか。あなたの考えを、解答らん②にいくつかの段落に分けて、四百字以上、五百字以内で分かりやすく書きましょう。

(書き方のきまり)

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めましょう。
- 書き出しや、段落だんらくをかえるときは、ますを一字空けて書きましょう。
- 行をかえるのは段落をかえるときだけとします。会話などを入れる場合は、行をかえてはいけません。
- 読点とくてん↓、や 句点↓。かぎ↓「などはそれぞれ一ますに書きましょう。ただし、句点とかぎ↓。」は、同じますに書きましょう。
- 読点や句点が行の一番上にきてしまうときは、前の行の一番最後の字といっしょに同じますに書きましょう。
- 書き出しや、段落をかえて空いたますも字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。
- 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直しましょう。

(30 桜修館)

解答らん②

解答らん①

A blank grid paper with a horizontal axis at the bottom. The axis is labeled with numbers 500, 400, 300, 200, 100, and 20 from left to right. The grid consists of 20 columns and 20 rows. The columns are defined by vertical lines, and the rows are defined by horizontal lines. The grid is used for plotting data.

解答用紙 適性検査Ⅰ

5	4	3	2	1
※	※	※	※	※
	※	※	※	※
	※	※	※	※
	※	※	※	※

受	検	番	号

得	点

※

※のらんには、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

1 次の **文章1** と **文章2** を読み、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

みなさんのご両親が中高生だったころ、また、おじいちゃんやおばあちゃんが若^{わか}かったころ、^①疑^{うたが}う力は、それほど重^{じゅう}要^{よう}視^しされていませんでした。むしろ当時は、「なんの疑いももたず、あたえられた課題をガンガンこなす人」が求められていました。数学の問題集をたくさん解いていくような、「課題解決」の力です。

それでは現在、みなさんにはどんな力が求められているのか？
答えはひとつ。「課題発見」の力です。

課題発見の意味について、わかりやすい事例を紹介^{しょうかい}しましょう。

二十世紀の初頭に「自動車王」として一時代を築^きき、世界初の量産型大衆車^{たいしゅうしゃ}を製造したアメリカの実業家、ヘンリー・フォードはこんな言葉を残しています。

「もしも人々になにがほしいかたずねたなら、かれらは『もっと速い馬がほしい』と答えていただろう」

自動車^{自動車}が普及^{ふく}する前の時代、人々の乗り物は^{*}もっぱら馬車でした。遠くに移動したい、もっと速く移動したい、と思ったとき、ほとんどの人々は「もっと速く走れる馬を手に入れよう」と考えました。「馬車」という常識にしばられ、それ以外の乗り物のことなんて、想像することさえできなかったのです。

しかし、フォードの発想はちがいます。

馬よりも速く、馬よりもつかれを知らない、もっと便利な「なにか」があるはずだ。

そう考えたフォードは、人間は馬車で移動するものだ、という当時の「あたりまえ」を疑い、^②まったく別の道をさぐっていききました。そうしてたどり着いた答えが、ヨーロッパで発明されたばかりの自動車だったのです。

当時の自動車は、まだまだ数が少なく、一部の貴族^{きぞく}やお金持ちにしか買えない「超^{ちやう}ぜいたく品」でした。現在でいうなら、自家用ヘリコプターや自家用ジェット機のような感覚です。自動車が馬車の代わりになるなんて、だれも想像していませんでした。

フォードは、この「超ぜいたく品」である自動車を、どうすれば安く製造できるか考えました。あたりまえの話ですが、自動車にはエンジンがあります。これは複雑で、つくるのにかなりのお金がかかる装置^{そうち}です。そしてその他の部品も、馬車とは比較^{ひかく}にならないほど多くなります。このあたりのお金をけずるわけにはいきません。

それではどこをけずるのか？ フォードが目をつけたのは、「時間」でした。

ひとつの部品をつくるのに一時間かかっていたところを、五分でつくるようにすればいい。そうすれば一時間で十二個の部品ができる。一時間分のお給料で、十二倍の仕事をしてくれるようになる。

そこでフォードは、のちに「フォード・システム」と呼^よばれる、^{*}べ

ルトコンベアを使った流れ作業による大量生産システムを開発します。よく火災訓練のときにおこなうバケツリレーのように、流れ作業で自動車を組み立てれば大量生産できることに気づいたのです。こうして自動車の価格は大はばに引き下げられ、馬車の代わりとなる自家用車が爆発的に普及していったのです。

もしもフォードが「課題解決タイプ」の人間だったら。つまり、「もっと速い馬」を探すような人間だったら。自動車の普及はおくれていたでしょう。それどころか、「流れ作業でたくさんつくる」というシステムそのものの誕生がおくれ、重工業全体の発展にも大きな影響があらはれません。

もともと「発明王」トーマス・エジソンの会社に勤務していたフォードは、あたえられた課題を解決するタイプの人間ではありませんでした。

〔注〕 普及——社会一般に広くいきわたること。

もっぱら——そのことばかりする様子。ひたすら。

ベルトコンベア——長くかけわたしたベルトの上に物を乗せ、ベルトを回して物を運ぶ装置。

バケツリレー——人々が一列になって水の入ったバケツを次々に手わたしすること。

みずからあたらしい課題を見つける「課題発見タイプ」の人間だったのです。

さて、そうやって考えると、^①いまの日本はたかさんの「馬車」がふれていることに気がつくでしょう。ほんとうは抜本的な変化が必要なのに、みんなこれまでの延長線上にある「もっと速い馬」のことしか考えていない。「課題解決」にしか、頭が回っていない。馬車を捨てて、自動車に切りかえるような発想ができない。

みんなが「課題解決」ばかり考えてしまつのは、疑う力が足りないから。世間で常識とされていることを疑い、「課題発見」のできる人になりましょう。

（瀧本哲史「ミライの授業」による）

（次のページへ続きます。）

文章2

ぼくは中学生のころに友人と二人で* キャンピング・テーブルを作ったことを思い出します。学校の宿題で、工作を一つ提出しなければならなかったのですが、どうせなら実際に使えるものを共同で作ろうということになりました。

まず地元の製材屋に行って、杉すぎの丸太を一本買い、寸法すんぽうどお通りに切り出してもらいました。それをかたに担かついで自転車で友人宅まで運び、のこぎりで加工し、* カンナをかけ、* ラッカー塗装とそうをほどこし、組み立てました。設計図はできあいのものを使ったのですが、丸太をゼロから加工しているというこの意味をかみしめながら作ったのを覚えています。丸太の値段ねだんがいくらか知ること自体が社会科の勉強になりました。

単純たんじゆんな工作ですが、一日二時間、週に五回、二週間は友人の家に通って作業をしました。カンナが木の節にあたって大変だったり、寸法を間違まちがえて* のこぎりを入れてしまったり、失敗の連続でしたが、最終的には見事なテーブルができあがりました。

③ 社会は複雑な分業によって成立しています。分業の利益といえ
ば、* アダム・スミスが例として用いたクギの製造過程が有名です。
ひとりでクギを一本、最初から最後まで作るよりも、クギの先端せんたんを

作る、頭を作る、それぞれの工程を多くの職人で分担ぶんたんしたほうが作業がはかどる、つまり生産性が高いという主張です。

④ ぼくは後に 経済学けいぎがくを学んで、分業の利益や 規模きぼの経済について 抽象的な理解を手に入れました。そのときに常に頭のなかには、ある意味で分業を否定ひていし、ゼロから自分たちで作ったこのキャンピング・テーブルがありました。家具店に行けば、仕上りっぱがりが立派で、しかも値段も安いテーブルが売られています。それは工業的な分業の成果です。しかし分業の利益を理解するうえで、分業がない状況じやうきやうとの比較ひかくがあることが有益だったのです。

たたみの上の水練のたどえではありませんが、どんな些細ささいなものであっても、体験の価値というのは貴重きちゆうなものです。誤解ごかいをおそれずにいえば、けがだって大事な経験です。転んでひざをすりむく、刃は物ものだけがをしまう、よそ見をしていて電信柱にぶつかることで、自然に危険きけんの 閾値いきち、つまりこえてはならない限界を学びます。体験の機会はどこにでも見つけられます。

(齊藤淳「10歳から身につく問い、考え、表現する力 ぼくがイェール大で学び、教えたこと」による)

〔注〕

キャンピング・テーブル—— キャンプをする際に使う持ち運びできるテーブル。
寸法すんぽうどお通り—— 測った通り。

カンナ——材木の表面をけずってなめらかにする道具。

ラッカー塗装——ラッカーというつやのある塗料で表面をぬってきれいにすること。

のこぎりを入れて——のこぎりで切って。

アダム・スミス——十八世紀のイギリスの学者。

経済学——物を生産したり売り買ひしたりする働きやしぐみについての学問。

規模の経済——生産する規模が大きくなるにつれ利益が増えること。

抽象的——頭の中で考えただけで実際からはなれている様子。

些細な——ちよつとした。

閾値——ここでは、限界値のこと。

〔問題1〕 ① 疑う力 とありますが、何を疑うのですか。 **文章1** の中のことばを使って、十字以上十五字以内で答えなさい。

〔問題2〕 ② まったく別の道 とはどのようなことですか。 「……ということ」につながるような形で、 **文章1** の中のことばを十五字以内でぬき出して答えなさい。

〔問題3〕 ③ 分業の利益 とはどのようなことですか。 **文章1** の中から具体的なことがらをあげて説明しなさい。

〔問題4〕 ④ たたみの上の水練 とありますが、このことわざはどのようなことの重要性を述べたものですか。 **文章2** の中のことばをぬき出して答えなさい。ただし、「水練」とは水泳の練習のことです。

(次のページへ続きます。)

〔問題5〕

④ いまの日本はたぐさんの「馬車」があふれているとありますが、あなたは「いまの日本」にはどのような「馬車」があると考えますか。また、あなたが考えたその「馬車」の問題を課題発見的に解決するためにはどうすればいいと考えますか。筆者が述べている「課題解決」や「課題発見」ということばの意味をいまえて、あなたの考えを三百五十字以上四百字以内で答えなさい。

記入上の注意

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。
- 書き出しや段落をかけたときの空らんや、や。や「などもそれぞれ一字に数えること。
- 段落の最初は、一字下げて書くこと。

[illegible]

<p>問題1</p>	<p>問題2</p>	<p>問題3</p>	<p>問題4</p>
<p>問題1の回答欄</p>	<p>問題2の回答欄</p>	<p>問題3の回答欄</p>	<p>問題4の回答欄</p>

受 検 番 号

得	点
※	

※のらんには、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1

文章1

文章2

を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

うちにある鍋^{なべ}は、そうとう古い。若い頃^{わがころ}、実家から出たときに買ったもので、今もそのまま使っている。そのころそろえたのは、鉄製のフライパンと中華鍋^{*ちゅうかなべ}、大小の片手鍋^{*かたてなべ}に寸胴鍋^{*すんどうなべ}の五つである。一人暮らし^{ひとりぐ}しを始めたばかりにしては、けっこう多い気もするが、二十五年間、それだけで巻き寿司^{まきずし}やら、ギョーザ^{*}やら、くん製^{*}やら、いろいろつくってきたわけで、この先もこの五つで十分だろうと思う。

そう人に話すと、なぜヤカンがないのかと言われた。考えてみれば、私は自分でヤカンを買ったことがない。お茶を入れるときは、小さい方の片手鍋^{わたくし}を使っていた。その姿^{すがた}がよほど情けなく思えたのか、母が一万七千円のケトル^{*}を買ってくれたが、気がつけば、やっぱり片手鍋で湯をわかしている。

洗いやすいし、沸騰^{ふっとう}するのがすぐわかって空^{*}だきすることもないし、使う分だけわかせるし、とっても便利だと思^{*}うのだが、母は「もう、情けない」と嘆^{なげ}く^{*}のだった。お湯は、ヤカンでわかすものという頭^{*}なのだろう。

そういえば、うちはコンロの下についている魚焼きグリルでパンを焼く。これも、母いわく「情けない」ことらしい。トースターぐらい買^{*}えと怒^{おこ}る。が、私は、そんなものは、かき張^{*}るので買いたくない。魚

焼きグリルで焼くとパンが生臭^{なまぐさ}くならないのかと心配する人がいるが、そんなことはなく、トースターで焼くより、うまそうに仕上がるのである。買ってきたヒザやフライを温め直したりと、とても便利に使っているのだが、みんなはそんなふうに使っていないのだろうか。使っていないのなら、魚焼きグリルという名前^{*}がよくないのではないかと思う。

〇〇用と言われると、それ以外のことで使うのは、ちよつと気がひける。犬用の食器と言われれば、新品でも人間が使うのは、ちよつとなあと思^{*}ってしまふ。最近^{*}は、しょうゆでも用途^{*ようど}がさままで、卵かけ飯^{たまご}用というのもあったりする。普通^{ふつう}のしょうゆを切^{*}らして、しかたなく卵かけ飯^{*}用でさしみを食^{*}べたりすると、なぜかもの足りない気がする。私の舌^{*}が、そこまで敏感^{びんかん}だとは思^{*}えない。しょうゆの成分など、さほど変わらないはずなのに、なぜだろう。

私たちは、一旦^{いったん}、コトバに縛^{しば}られてしまふと身動き^{*}ができなくなってしまうようだ。こんな状態^{*}を「フレームがかかっている」と呼^よぶ。ものを書く作業は、このフレームをうまく外^{*}すことである。つまり世の常識的な考え方から自由にならないと、なかなか人に納得^{なっとく}してもら^{*}う作品にならないのである。なので、私たち夫婦^{ふうふ}は、よくでたらめな話をしては、二人でゲラゲラ笑^{*}っている。人が聞いたら、ばかばかしいと思^{*}える話で、それはお金にはならない創作^{そうさく}なのだが、私たちの場合、こんなことが、けっこう重要な作業なのである。

しかし、バレンタインデーのチョコや、節分の巻き寿司など、これがないと季節を感じないというものもある。私自身も、いまさらやめる

のもなあという感じで、ずるずる続けている。

最近、仕事が忙しくなって、なかなか本も読めない状態が続いている。なので、思い切ってメールをやめることにした。ケータイからもパソコンからもアドレスを削除してしまうと、今まで何だったんだろう、というほど静かになった。本当に用がある人だけから、フアックスや郵便で要領よくまとめたものが送られてくる。けっこう儀礼的なやりとりが多かったんだなあ、あらためて思う。不思議なことに、そんな生活を始めると、人によく会うのである。会って、少し立ち話をし、バイバイと別れる。なくても大丈夫と、自分で確認するのは、そんな悪いことではないような気がする。

(木皿泉「木皿食堂2 6粒と半分のお米」による)

〔注〕

中華鍋 底の丸い浅い鍋。(図1)

片手鍋 持ち手が一つの鍋。(図2)

寸胴鍋 太さが変わらず、底の深い鍋。(図3)

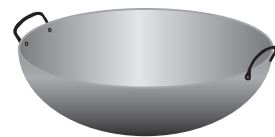


図1



図2



図3

くん製 肉や魚などをけむりや熱などで加工し、長

持ちするようにした食べ物。

ケトル やかん。

空だき 火にかけた鍋などの中の水がなくなっ

てしまうこと。

かさ張る 場所を取る。

用途 使いみち。

フレーム わく。

削除してしまう 消してしまふ。

ファックス 紙にかいた文字や図を、電話回線などを

使って送受信する装置。

儀礼的 礼儀として型どおりにすること。また、型

どおりで心のこもっていないようす。

文章2

僕の書は、よく批判ひはんされることがあります。

「あんな絵のようなもの、書ではない」

たとえば、そんな指摘しってきです。

けれど、そもそも「文字」の多くは、本を正せば、形から着想を得た象形文字*しやうけいもじがとても多いですね。

たとえば、僕が大好きで、自分の雅号*がこう「双雲そうつん」にも使っている「雲」という字。

まず上部にある「雨（あめかんむり）」は、いうまでもなく天から雨水が落ちてくる様子からできあがったものです。そこにもくもくと立ちのぼる煙けむりのような雲の姿を表した「云うん」という象形文字をくっつけることで、「雲」は形作られています。

こんなふうに、文字の多くは、そもそも絵みtainなものです。

つまり、絵みtainなものが、書なのです。

ならば、僕はどんな視覚しかくてき的な表現を使うべきじゃないかなと思ってます。「伝わる」ことにこだわる僕は、だからこそ絵のような要素を、もつと書にも取り入れたい。そう思い、書に取り組んでいるのです。

だって同じ雲でも、いまにも雷雨らいうをもたらしそうな、黒々とした大きな雲と、さわやかな秋の夕暮ゆぐれに、薄く流れるように敷しき詰められた静かな雲とでは、人が受ける印象はまったく違いますよね。もちろん、線の細さや文字の勢い、かすれや濃淡のうたんなどでその差を書き分けることはできますが、さらに「雲」をそもそもの象形文字のレベルにまでさか

のぼれば、もつともつと自由な書き分けができる。「いかにも荒々しい雨を持ってきそうな雲」から「ずっとながめていたくなる、心地こちよ良い空の雲」まで、幅広い表現ができるからです。そのほうが、伝わりやすいと考えているからです。

僕はいつでも自由に、視覚的な表現を駆使くしして書に取り組むようにしています。伝えるためなら、どんな欲*よくに表現にこだわるのです。

たとえば、文字の「大きさ」。

当たり前のことですが、大きな声を出したほうが、声が聞こえる範囲は広がり、言葉は伝えやすくなります。当然、書にもそれはあります。大きく力強い文字を書けば、それだけ遠く離れても、見えるし、読める。ただ、それだけじゃないのが、伝えることのおもしろさでもあるんですね。

ずっと普通の音量で話していたのに、ある箇所かしよにきたら、ふと声が小さくなる。

「え、何？ なんていったの？」と思わず聞き耳を立てることってありますよね。むしろ、声を小さくしたほうが、注意*かんきを喚起する。そんなことは、日常会話でもあるものです。

だから、僕は、あえて字を小さく書くことがあります。

ちよつと顔を近づけて、じつとそれを見つめてもらうことで、じんわりと誰かに伝えたい言葉があるからです。

「筆*の入れ方」は、言葉の質感を変えます。

ぐつと鋭く筆を入れたら、線はそのまま鋭さを帯び、書いた言葉も

鋭く読む方に刺さってくる。あるいは、丸く入れると、丸い柔らかな言葉となって響いてくる。

だからこそ、「刃」「強」「岩」といった、こわもての文字をわざと丸く書いたりすると、ものごとの多面性や多様性を、わかりやすく表したりもできるわけです。

「墨の色」は、あふれる思いのようなものを、表すことができます。

たとえば「愛」という文字を書く際、墨をじわりとにじませ、ほうほうに広がるように大きく書くことで、「愛」という言葉に収まりきらない愛情みたいなもの。あるいは、特定の誰かではなく、周囲へ、世の中へ、世界へ向けて放射される大きな愛情みたいなものを表せます。

(武田双雲「伝わる技術」による)

〔注〕

書——書かれた文字。

象形文字——ものの形をかたどって作られた文字。

雅号——芸術家が本名以外につける名。

どん欲——ひじょうに欲が深いこと。

喚起——よび起こすこと。

筆の入れ方——線の書きはじめの筆の使い方。

こわもて——ごつごつして荒々しい印象のこと。

〔問題1〕

⑦ コトバに縛られてしまつとありますが、このこと具体例を一つ、本文中から探して書きなさい。ただし、二十字以上三十字以内で、解答らんに合わせて書くこと。（、や、などもそれぞれ字数に数えます。）

〔問題2〕

① それだけじゃないのが、伝えることのおもしろさでもあるとありますが、そのような「おもしろさ」が表れている筆者の工夫の具体例を一つ、本文中から探して書きなさい。ただし、何のためにそうするのかがはっきり分かるように、解答らんに合わせて書くこと。

〔問題3〕

文章1 と 文章2 それぞれの「自由」についての考え方に共通する内容をまとめた上で、それについてのあなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〔きまり〕に従いなさい。

条件1 三段落構成にし、第一段落には、文章1 と 文章2 に

共通している考え方を書き、第二段落および第三段落は、内容やまとまりに応じて、自分で構成を考えて書くこと。

条件2 あなたの考えは、一つにしぼり、理由をふくめて書くこと。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合も行をかえてはいけません。
- 、や・や などそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じます目に書きます。（まず目の下に書いてもかまいません。）
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

問題 1

30
20
10
0

11

20

受 検 番 号

得 点

<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> <p> 1. Identify the problem. The problem is that the company is not meeting its sales targets. </p> <p> 2. Analyze the problem. The problem is caused by a combination of factors, including a weak marketing strategy, poor product quality, and inefficient sales processes. </p> <p> 3. Develop a solution. The solution is to implement a new marketing strategy, improve product quality, and streamline sales processes. </p> <p> 4. Implement the solution. The solution will be implemented over the next six months. </p> <p> 5. Evaluate the results. The results will be evaluated at the end of the six-month period. </p> </div> <div> <p> 6. Monitor progress. Progress will be monitored on a weekly basis. </p> <p> 7. Adjust the plan. The plan will be adjusted as needed based on progress. </p> <p> 8. Report results. Results will be reported to the board of directors. </p> </div> </div>	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> <p> 9. Identify the problem. The problem is that the company is not meeting its sales targets. </p> <p> 10. Analyze the problem. The problem is caused by a combination of factors, including a weak marketing strategy, poor product quality, and inefficient sales processes. </p> <p> 11. Develop a solution. The solution is to implement a new marketing strategy, improve product quality, and streamline sales processes. </p> <p> 12. Implement the solution. The solution will be implemented over the next six months. </p> <p> 13. Evaluate the results. The results will be evaluated at the end of the six-month period. </p> </div> <div> <p> 14. Monitor progress. Progress will be monitored on a weekly basis. </p> <p> 15. Adjust the plan. The plan will be adjusted as needed based on progress. </p> <p> 16. Report results. Results will be reported to the board of directors. </p> </div> </div>
--	---

※のらんには、記入しないこと。

問題 2

--	--

ために

5

書くこと。

問題 3

20

5

5

☐

(29 小石川)

[illegible]

440

400

300

200

100

20

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、7ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立三鷹中等教育学校

1

次の〔文章A〕と〔文章B〕を読んで、それぞれの文章に関する問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には本文のあとに〔注〕があります。）

〔文章A〕

「人生を変える！」という一心でインド旅行へ行った主人公の「僕」^{ぼく}。帰国後、インドから買ってきたゾウの置物にそっくりで、関西の方言で話す神様「ガネーシャ」^{ガネーシャ}が突然現れる。ガネーシャは僕を変えるために、次々と課題を出題する。今回の課題は、「一日何かをやめてみる」だった。

「で、何をやめたん？」ガネーシャは僕に聞いてきた。

「今日は、とりあえず、テレビとインターネットをやめてみました。その代わりに本を読んでいます」

「本か。ええ、ここがけや。一つええこと教えたろか。リンカーンておるやろ。昔アメリカ大統領やっとなつた子やな。あの子めっちゃ本が好きでな、いつも本読んでたんや。で、あの子の有名な演説くらい知っとるやろ。人民の……いうやつ」

「はい。『人民の、人民による、人民のための政治』ですね」

「そや、それ『ゲティスバーグ演説』いうんやけど、実は似たようなセリフが、ある牧師の演説集に載^のつったんや。いつも本読んでったリンカーンくんはたまたまそれ見つけてな、そのまま使^{つか}ったわけや」

「マジすか」

「マジやねん。引用やねん。そういうの多いんやで。たとえば、福沢諭吉^{ふくざわゆきち}くんの学問のススめの『天は人の上に人を作らず人の下に人を作らず』いう有名な台詞^{せりふ}あるやろ」

「はい、はい。知ってます」

「あれな、アメリカ独立宣言^{せんげん}からの引用なんやで」

「へえ……」

「ま、テレビもちゃんと意識してみたら勉強になる部分あるんやろうけど、受身^{うけみ}になりがちやからな。見るのって結局『楽』やしなあ。あ、これ覚えときや。楽なもんで体にええもんほとんどないで。筋肉^{きんにく}も、筋肉痛^{きんにくつう}になつてはじめて成長するやろ。脳^{のう}みそもいっしょやで。楽なことはつかしてたらどんどんふやけていつて使い物にならんようになるで」

たしかに、楽な^なこととして成長できるなら、みんな成長してるもんなあ。

「だからテレビやめたんはええ心がけや。ただ……」

「ただ……？」

「まだ足りひんなあ」

「といますと？」

「自分テレビ見んこうと思ても、また何日かしたら、なんとなく見てまうやろ？」

「いえ、これからはテレビを見るのはほどほどにして、時間の使い方を改めようと思います」

「そう思えるだけやろ？」

「いや、大丈夫です。できるだけ見ないと決めました」

「でも、たぶん見てまうやろ？」

僕はガネーシャの言葉にイライラしてきた。どうしてガネーシャは僕が頑張ろうとしているのに足を引っ張るようなことを言うのだろう。

「なぜ僕がテレビを見てしまうと決めつけるんですか？」

するとガネーシャはさっさと流すように言った。

「そら、今までかてそうやったからや」

そして、ガネーシャは僕が今、ちように読んでいた本を指差した。

「この本、いつ買ってきたん？」

僕はぎくりとした。実は、この本は、何ヶ月か前に「今月からは一ヶ月に五冊は本を読もう」と決めて買ってきた本だった。結局最初の数ページだけ読んで、そのまま本棚で眠っていたのだ。

決める。でもできない。僕の生活はその繰り返しだった。

「なんででけへんか教えたらか？」

「……はい。お願いします」

「自分は、今日、テレビを見いひんて決めたやんな？」

「はい」

「これ、何が変わった？」

「何が変わったか、ですか？」

「何も変わってへんやろ」

「い、いや、そういうわけではないでしょう。僕はテレビを見ないと決めたんですから、意識が変わったんじゃないですか？」

「今から言うことは大事なことでやから覚えときや。人間が変わろうと思っても変わられへん最も大きな原因は、このことを理解してないからや。ええか？『人間は意識を変えることはできない』んやで」

「意識を変えることはできない……」

「そうや。みんな今日から頑張って変わろう思うねん。でも、どれだけ意識を変えようと思っても、変えられへんねん。人間の意志なんてめっちゃ弱いねん」

「それは、そのとおりです。人はみんな自分で決めたことがなかなかできません」

「それでも、みんな『意識を変えよう』とするやん？それなんで分かるか？」

「さあ？どうしてですか？」

「『楽』やからや。その場で『今日から変わるんだ』て決めて、めっちゃ頑張っ

てる未来の自分を想像するの楽やる。だってそんな時は想像しとるだけで、実際にはぜんぜん頑張っへんのやから。つまりな、意識を変えようとする、[※]いうんは、言い方変えたら『逃^にげ』やねん」

意識を変えようとするのは、逃げ。僕はそんなことを今まで考えたこともなかった。「一ヶ月で本を五冊読^む」そう決めてこれから変わっていく僕の人生を想像するのは、確かに楽しかったし興^{こう}奮^{ふん}した。でもそれが逃げだったなんて。

「それはある意味、自分に『期待』してるんや」

「期待、ですか」

「そうや。たとえば自分は『今月から本を毎月五冊読^む』と決めても実際はでけへんのに、未来の自分に期待してしまいうる。読める思てしまいうる」

確かに、「○○をやる!」と決めて興奮している時は、それを実際に行動に移すときの、つらい作業を忘^{わす}れているのかもしれない。

「本気で変わる思たら、意識を変えようとしたらあかん。意識やのうて『具體的な何か』を変えなあかん。具體的な、何かをな」

ガネーシャは繰り返すようにゆっくりとした口調^{くちよう}で話した。

「『テレビを見ないようにする』この場合の具體的な何かって分かるか？」

答えられずにじっとうつむく僕の横を通り過ぎ、ガネーシャはテレビの近くで立ち止まった。

「それは、こうすることや」

ガネーシャはテレビのコンセン^ぬトを抜いた。

「テレビのコンセン^ぬト抜いたら、テレビ見たくなっても、一度立ち止まるやろ。そしたら今までよりテレビ見んようになる可能性は、ほんの少しだけやけど、高くなるやろ。もっと言えば、テレビ捨^すててもたら見られへんようになるわな。だって無いんやもん。見ようがないやん。いや、ワシはテレビ捨^すてなあかん言^いうてるわけやないで。テレビを見るとか見いひんとか、そんな細かい話をしとるんやない。ええか? ワシが言いたいのな、自分がこうするて決めたことを実行し続けるためには、そうせざるを得ないような環^{かんきょう}境を作らなあかんということや。ただ決めるだけか、具體的な行動に移すか。それによって生まれる結果はまったく違^{ちが}ってくるんやで」

そしてガネーシャは鋭^{するど}い視線^{しせん}を僕に向けた。

「覚^さえとき。それが、『変わる』ってことやねんで」

(水野敬也「夢をかなえるゾウ」による)

〔注〕

※ でけへん——できない。

※ 見いひん——見ない。

※ 変わられへん——変わることができない。

※ いうんは——というのは。

〔問題1〕ガネーシャが、『人間は意識を変えることはできない』と言っ

たのはなぜですか。本文中にある「楽」「期待」の二語を必ず
用いて、五十字以上六十字以内で書きなさい。

〔注意〕・一まず目から書きなさい。

・、や。や「なども一字として数えます。

〔問題2〕『変わる』とは、この場面ではどのようなことを意味してい

ますか。あなた自身の具体的な体験を交えて、百六十字以上
百八十字以内で説明しなさい。

〔注意〕・段落だんらくを設けず、一まず目から解答を書きなさい。

・、や。や「なども一字として数えます。

【文章B】

明治のはじめ、日本は固有の文化はすべて価値なしと考えた。わけのわからない人間だけでなく、国中が外国のもの、舶来※はくらいのものはすぐれている。※在来のものはガラクタであると、知識人も一般※いっぱんも思いこんだ。

そんなとき、フランスへ陶器とうきを輸出することになった。陶器をそのままでは破損するおそれがあるので、詰めものを入れた。適当なものがないので、古い浮世絵うきよえを丸めて入れた。浮世絵は紙くず同然、タダみたいだったらしいから、陶器を送るときに詰めものにすれば、もってこいである、と考えたのであろう。

買入れたフランス側がおどろいた。陶器ではなく、詰めものにされている浮世絵である。

ヨーロッパの人がまったく知らない美の世界である。しかも、すばらしい。荷物そっちのけで、詰めものに用いられた浮世絵が評判になったという。浮世絵の注文もあつたにちがいない。

フランスの印象派※いんしょうはは、写楽※しやらくをはじめ日本の浮世絵によって生まれた新風しんふうだとされているが、きっかけは、こういう偶然ぐうぜんであつたのである。

日本では見る人もなく、捨てるには、上紙うわがみがもったいないというので、くず紙あつか扱いをされていたものが、まったく違った文化の人からすると、美※の典型のようになったというのは、おもしろい。

鎖国さこくを解いて、外国に学ぼうとした明治の日本にとって、浮世絵は古

い文化である。おもしろくもなければ、美しくもない。そのように思われたのは是非※ぜひもない。焼きすてられなかっただけ幸運であつた。

まったく別世界にいる人たちは、そういう偏見※へんけんから自由である。偏見は見えているものを見えなくするが、局外者※は花は花・紅くれないに見えるのである。本場で認めないものを見つける。りっぱな発見である、としてよい。

軽井沢※かるいざわはおそらく日本一の避暑地※ひしよちであるうが、軽井沢の住人がこしらえたのではない。

東京の暑さ※にへきえきした、イギリス人たちがつくった名所である。

日本人は、軽井沢のよさを知ることができなかった。外国人に教えられ、そのよさを知り、いまではたいへんな賑わいにぎわいになっている。

上高地※かみこうちは、ウエストンという開発者が伝わっている。毎夏、ウエストン祭が行われる。土地の人々には上高地のよさがわからなかったのである。外国人に見つけてもらうまで、その土地のよさがわからなかった、というのは、いくらかおかしいようでもある。それだけアウトサイダーの眼めはすぐれている、ということにもなる。

奥入瀬※おいらせの溪流けいりゅうも、土地の人が見つけた景勝※の地ではなかった。東京から訪れた文人おとす、大町桂月※おうちんが、天下の絶景と賛えたたのが広まって、有名になった。

土地の人にはただの溪流、渓谷けいこくで、荷物をはこぶのはたいへんである

から、景色をめぐるゆとりなどあるわけがない。遊びに来た人は、土地の人がわからなかった美しさを、一目でとらえる。アウトサイダーだからである。

※ インサイダーでは、アウトサイダーの美をとらえることができないから、人は旅をする。アウトサイダーになるのである。

近年、観光が産業のようになったのは、アウトサイダーの快感を求める人が多くなったためであろう。

住めば都ともいうが、未知の土地へ行けば、ものみなおどろきである。人生が変わったような気がする。ヒマがなければ時間をつくっても、カネがかかっても、疲れても、海外旅行へ行きたいという人間が世界的に急増しているようだ。

外国の真似をすればいい、と誤った観念にしばられていては、アウトサイダーとして独立するのは困難であろう。

(外山滋比古「消えるコトバ・消えないコトバ」による)

〔注〕

※ 舶来——外国から来たもの。

※ 在来——もともとあったもの。

※ 印象派——芸術家の流派の一つ。

※ 写楽——江戸後期の浮世絵師。

※ 典型——そのものの特徴を一番よく表しているもの。

※ 是非もない——仕方がない、どうしようもないということ。

※ 偏見——かたよったものの見方。

※ 局外者——外部にある人。

※ 花は花・紅——花が自然のままで美しいさま。

※ 軽井沢——長野県東部の地名。

※ 避暑地——暑さを避けるために適した土地。

※ へきえき——うんざりすること。

※ 上高地——長野県西部の地名。

※ ウェストン——イギリスの登山家。

※ アウトサイダー——ある組織や集団の外側にいる人。

※ 奥入瀬の溪流——青森県十和田湖から流れる川のこと。

※ 景勝——景色がよいこと、またその土地。

※ 文人——文学や絵などを親しんだり書いたりする人。

※ インサイダー——ある組織や集団の内側にいる人。

〔問題3〕「明治のはじめ、日本は固有の文化はすべて価値なしと考えた。」

とあるが、そのように考えたのはなぜであると、筆者は説明しているか。本文で挙げられている例を出しながら、四十字以上五十字以内で書きなさい。

〔注意〕・一ます目から書きなさい。

・、や。や「なども一字として数えます。

〔問題4〕筆者の言うような、「外国の真似まねをすればいい」と誤あやまった観

念にしばらく「ない考えをもつためには、あなたはどうすればよいと思いますか。具体的な取り組みや手立てを挙げながら、一八〇字以上二〇〇字以内で書きなさい。

〔注意〕・段落だんらくを設けず、一ます目から解答を書きなさい。

・、や。や「なども一字として数えます。

適性検査Ⅰ

1

〔文章A〕

〔問題 1〕

[illegible]

〔問題 2〕

The image shows a blank graph grid. The vertical axis (y-axis) is on the left, with labels 160 and 180. The horizontal axis (x-axis) is at the bottom, with labels 175, 100, and 25. The grid is composed of solid vertical lines and dashed horizontal lines. There are 8 solid vertical lines, creating 7 columns. The x-axis labels are positioned below the columns: 175 is below the 2nd column from the left, 100 is below the 5th column, and 25 is below the 8th column. The y-axis has labels 160 and 180, which correspond to the 6th and 8th horizontal dashed lines from the bottom, respectively. The top of the grid is at the 9th horizontal dashed line, which is unlabeled. The right side of the grid is at the 8th solid vertical line, which is unlabeled.

〔文章B〕

〔問題 3〕

[illegible]

〔問題4〕

[illegible]

※のらんには何も記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

1 次の文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

最初に日常のことと学問の関係から入ります。

野鳥の会が野鳥観察会を開いたときの話です。その話によると、あの観測会でこういうことがあったというのです。今日は――^①目玉商品をつくっておいた。おもしろいものが出て来た^きら言うから、鳥の名を当ててくれ、とそう言っておいて、会員にいつもどおりの観察をそれぞれさせておいた。しばらくして、いまあそこに目玉商品である鳥がいるから、何か当ててごらん、と言うと、みな、双眼鏡^{そうがんきょう}を手に手に集まって来た。もちろんそういう会に出ていて、しかも珍鳥^{ちんちよう}の名をあててみようというぐらいの人ですから、かなり勉強した人でしょう。そういう人がたくさん出て来て、これは何とか鳥だ、いや、何とか鳥だと、いろいろ名前をあげた。それが全部ちがう。

結局のことを言うと、正解はスズメなのです。つまり、人が悪いんですが、その指導員は、目玉商品と言って珍鳥^{＊そうき}を想起^{＊そうき}させておいて、正解に、スズメをおいた。それで野鳥観測に相当自信をもった^②ベテランは――まさかスズメと思わないから――スズメに似てスズメでない珍鳥をそれぞれ思いうかべて、それをあげた。

この話は、大事な教訓をふくんでいるように思います。

^{わたくし}私たちは、スズメにとりかこまれて住んでいて、ふだん[＊]見付けていながら、実はよく見ていない。慣[＊]れで見ているから、よく見ていない、ということにさえ気がつかない。だから、とんでもない状況[＊]の中[＊]で、^③素人[＊]にはスズメをスズメだと言い切る[＊]ことができない。

他方、素人[＊]でない観測[＊]ずれをしたベテランもまた、珍鳥に心をうばわれ、眼^めをうばわれて、スズメをスズメと言い当てられない。

スズメをも、珍鳥を見るのと同じように正確に――学問的にいろいろなチェック・ポイントにそくして――見ていなければならないわけです。

その人は「キミたちはスズメも知らずにこんな難^{＊むずか}しい鳥の名前ばかり覚えたってしょうがないではないか。それでは野鳥の会ではなくて、珍鳥の会になってしまふ。スズメだって野鳥だらう。原点にもどれ。」という痛棒^{＊つうぼう}を、まことに上手^{＊じょうず}に、ユーモアをふくんであたえた。感

心しましたが、他人事ではありませんね。珍鳥にこだわった学問の眼で見ると、スズメがそれに似た特ちょうをもつ珍鳥に見えてきて、スズメが見えない。といって、素人の眼では、やはりスズメをスズメと言[＊]い当てることはできない。下手^{＊へた}をすると珍鳥の会になりかねないようなチェック・ポイントを勉強[＊]し、駆使^{＊くし}して、はじめてスズメを見るこ

とができるはずです。つまり、学問の眼を、日常見聞きする現実

生かす、これが重要です。

(内田義彦^{うちだよしひこ}「生きること 学ぶこと」による)

〔注〕 想起^{そうき}——思い起こすこと。

見付けて——見慣れて。

観測^{くわんそく}ずれ——観察したり測定したりすることに慣れきってしまっていること。

痛棒^{つうぼう}——手^て厳^{きび}しくしかることのたとえ。

ユーモア——おもしろみ。

駆使^{くし}——思いのままに使いこなすこと。

(次のページへ続きます。)

文章2

④ 富士山は二十分も見ているとあきる、と言う人がある。⑤ 富士山

が美しいって言っているようでは日本人はだめだって言う人もいる。

そうかもしれない。見てあきれば、あきると言えるでしょう。でも、

⑥ ほんとうに美しいと思えるほど、見たことがないのではないかしら。

私わたくしみたいにながめてみると、こんなに富士

山ってすごいのかと思う。ぜんぜんいままで見たことのない富士山を、

いつも見る。赤富士になる前の、しらじらと夜が明けるか明けないかっ

ていうときの、なんともいいようなない色、かたち。太陽が上がるにつ

れて、真っ赤に染そまっていくときの、一刻一刻と変わっていくその美

しさといったら、この世のものとは思えない。

夜、月の光に照らされる真っ白の富士山は、神々こうごうしくて、きれいも

美しいも、言葉なんかありませんね。夜中に起きて、雪が降ふっている中、

富士山の中腹ちゅうふくぐらいから、雪けむりが夜の天に巻まき返かえっているさまを

見たときはおどろきました。ほんとうにすごかった。こんなすさまじい

景色があるのかと、立ちすくみました。

三段さんだんに、色が染め分けられている富士山を見たことがある。その三段の

色のきれいなこといったら、上は朱色しゆいろ、その次はむらさき、下は緑。そ

れは見事な三段だった。人に話しても、私の知るかぎり、三段に染め分け

られた富士山を見たことのある人はいない。あれは、忍野村おしのむらのかやぶき屋

根の家に行ったときで、夕方でした。見ることができて、私は運がよかった。

富士山は、毎回、見るたびにおどろきがありますし、いつ見ても美

しいんです。完かんぺきな美しいかたちです。あきないです。どうしてこん

な美しい山を、自然というものはつくるんだらうと、不思議な気がしま

すね。

ヨーロッパやアジアなどにも、標高の高い山はたくさんあるけど、

どの山も続いていて連山です。その中に一つ高いみねがあったりしま

けど。富士山は一つだけの、単山なんです。そういう不思議な山だから、

二つとない、不二ふじ、と万葉時代まんようの人がつけたんですね。

不尽ふじん、不死ふじとも表現されていましたが、私は、富士というのは、不

二だなど。二つとないなど。だから、「不二」という字をあてるのがい

ちばんいいような気がしますね。それにしても『万葉集』の歌人は、

奈良ならのあたりからどのようにして、あの時代、富士山を知り、見たのか。

旅は容易えいなことじゃないですよ。

富士山の頂上ちやうじやうの雪は絶えることがない。六月の十五日に消えた

思ったら、その夜、降ったという歌が『万葉集』にありますね。

「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」

（高橋虫麻呂*たかはしのむしまろ）と。よくまあ、書き残してくれたと思って。燃ゆる火、

という歌もありますから、活火山だったことがわかる。

「燃ゆる火を雪もち消ち降る雪を火もち消ちつつ」（高橋虫麻呂）。

燃える火を雪が消し、降る雪を火が消しながら、と言つのだから、やはり、富士山はすべてを超越してますね。

火と水、両極がふくまれるっていうことは、一切がそこにある、と

〔注〕『万葉集』——奈良時代の終わりにできた、今残っている最も古い和歌集。

容易な——かんたんな。

高橋虫麻呂——奈良時代の歌人。『万葉集』に作品が収められている。

真理——もつともだと思われること。

① 目玉商品
とありますが、本文中ではなにを目玉商品としているのですか。五字以内で答えなさい。

【問題2】
文章1
の中で
ベテランと
素人
の観察のし方を次のようにまとめたとき、空らんに入る言葉をそれぞれ二十字以内で答えな

たい。

ベテランはスズメを見ても

[illegible]

スズメと言いついて当てられない。

素人はスズメを見ても

[illegible]

スズメと言いついて当てられない。

上も下も、右も左も、一切がある。みんなその中にくくまれている。

（篠田桃紅「百歳の力」による）

〔問題3〕

富士山は二十分も見ているとあきる、と言う人 ^④ 富士山が美しいって言っているようでは日本人はだめだって言う人 ^⑤ に対して、

筆者は ^⑥ ほんとうに美しいと思えるほど、見たことがないのではないかしら ^⑦ と感じています。筆者はそうに言う人にどのような言葉をかけると考えますか。 **文章2** の内容を、ふまえて書きなさい。

〔問題4〕

冷たさも熱さも ^⑦ とありますが、「冷たさ」「熱さ」にあたる言葉を、それぞれ四字以内で、和歌の説明部分から具体的にぬき出しなさい。

〔問題5〕

文章1 と **文章2** はどちらも「ものの見方」について書かれています。これらの文章を読んで、あなたは今後どのような「ものの見方」を

していきたいですか。次の二つの条件を満たしながら、三百五十字以上、四百字以内で書きなさい。

条件

1. 二つの文章に書かれている「ものの見方」について、それぞれの筆者の考えをまとめること。
2. あなたがこれまでにやってきたこと、これからやりたいことをそれぞれ具体例として挙げること。

記入上の注意

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。
- 書き出しや段落をかえたときの空らんや、や。や「などもそれぞれ一字に数えること。
- 段落の最初は、一字下げて書くこと。

〔問題 1〕

〔問題 2〕

ベテランはスズメを見ても

[illegible]

素人はスズメを見ても

[illegible]

スズメと言いついて当てられない。

スズメと言いついて当てられない。

〔問題3〕

--	--	--

〔問題4〕

冷たさ

熱七

〔問題5〕

[illegible]

100

200

300

350

400

(28 両国)

得点

[illegible]

受 検 番 号

※のらんには、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立大泉高等学校附属中学校

1

文章1

文章2

を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

小さいころ、私は「おはなし」が大好きな女の子でした。けれどとくに本が好きだったわけではないのです。子供向けの本も家にはほとんどありませんでした。

好きだったのは祖母や母が話してくれた昔ばなしの「語り聞かせ」です。絵もなく文字もなく、語り言葉と語る人の表情や仕草だけをたよりに想像する世界——しかしながら祖母たちの話し方が上手だったのか、私がそういう質だったのか、話したされるや否や私の頭や心の中で、色鮮やかに登場人物たちが確かなものとなって動き始めるのですから、「想像する」という遊びは私にとってはことのほか楽しく、外でおてんばするのと同じくらい魅力的な遊びのひとつでありました。幾度も幾度もせがんで「おはなし」をしてもらったものです。

小学校入学の前になると、今度は母が図書館へよく連れていってくれるようになりました。足を運ぶ先は「こどものへや」です。「こどものへや」はいわゆる児童コーナーで、ありとあらゆる絵本、児童書、図鑑や紙芝居などがたくさん集められています。アンデルセン物語やイソップ物語の、知らなかった異国の空気、ファール昆虫記の独特の世界——今まで想像さえしなかった、いえ、できなかった「おはなし」が、突如「本」という現実のカタチとなって目のまえに溢れだしました。

「おはなし」といえば「語り聞かせ」の世界だった私にとって、はじめての図書館は、世界がわっと広がったような、ついでに自分の可能性までもがわっと広がったような、なんともいえない興奮に包まれたものです。新しい遊び場を得たり！と、その後は夢中になって数年間の図書館通いが始まります。自分の好きな本を棚から選び、小さな机とイスに座って本と向き合う。思えばここからが「読書」という域に達したスタート地点のように思います。理解できなくてもできなくても最後まで読めても読めなくても、この時の財産はたくさんの本を広げ、たくさん本があることを知り、限り無い読書への「欲」を持てたことです。

さて、その欲にまかせて図書館に通う日々は、一方で「おはなし」が文字と挿し絵で現実的な世界観をもって目のまえに差し出される日々でもあります。もう以前のようにすべてを想像する必要はなくなりました。はたして私は「想像すること」をやめてしまったでしょうか。いいえ、その逆です。図書館に通いはじめてまもなく「語り聞かせ」で慣れ親しんでいた「昔ばなし」の本を広げてみたときのこと。「はなさかじいさん」が枯れ木に咲かせた花は、絵本の挿し絵よりも私が想像して咲かせた花たちの方が数段見事でしたし、「ももたろう」の川から流れてくる桃は、私の想像したそれの方が大きくて立派で、それはそれはおいしそうな桃であったことから、やめるどころか「想像すること」の無限の力を再確認してしまったのです。

ですから、その頃の私の本の読み方は少し変わっていて、目で見える挿し絵ばかりにたよらず、「私だったら、こんなふう……」と自分な

りに絵を想像したり、文章だけの部分は勝手に想像をいくらまして、気がつけば全く違うおはなしになってしまったりすることも多く、本を觀賞かんさうしているようで自分の想像の世界をも同時に觀賞かんさうしているような、そんな腕白わんぱくすぎる想像力の翼つばさとともに巡る読書でした。私の中であらずじがあらゆる絵本や児童書が多いのは幼少ようしょうの時のこの悠々自適ようようじてきな読書のせいかもしれません。

⑦ 小学校四年になってその一風変わった読書も落ち着きはじめて頃、

芥川龍之介*あくたがわりのすけ、宮沢賢治*みやざわけんじ、夏目漱石*なつめそうせきなどの日本文学の先生方の作品

に出会いました。そのはるかなる想像力とどうい追いつかない世界観に、想像力の翼は夢中になって文字を忠実に追いつ始め、新たに本の世界に身を委ねる楽しさを知りました。その後はといいますと、成長とともにジャンルを問わず本が溢れているところへ出向いてはその時自分が求めている「本」に出会い、想像力の翼を広げ続けて、今の私につながってゆきます。

みなさんも読書を通して想像することの楽しさを発見した人も多いでしょうね。そうです。「想像する」という行為こそが、読書の醍醐味*だいごみです。

* 文字を紡いで思いを重ね、多種多様に自分の心に彩りを与えていく読書の喜びのすべては自分の現実からではなく「想像することから得られるものです。目で見えるもの、目で見えないもの、時としてどちらも本物であり、同じく力をもっていることを読書を通してたくさん実感してください。

現実世界に生きる私たちは、極論をいえば、想像力なくしても生きられるのかもしれませんが。けれど、どうかおおいに想像力をもって生きてください。なぜなら人は、想像できるからこそ創造できるといことを忘れないでほしいからです。「本」はまさにそれを証明してくれる賜物*たまものであり、傍らかたわにいて思い出させてくれる友です。

たくさん本と出会って下さい。想像力の翼とともに――。

(菊田まりこ「想像力の翼とともに」による)

〔注〕 質―― 人や物ことの性質。

おてんばする―― 活発に行動する。

悠々自適な―― 心のおもむくままの、自由な。

芥川龍之介―― 「蜘蛛の糸」「トロツコ」などの作者。

宮沢賢治―― 「注文の多い料理店」「やまなし」などの作者。

夏目漱石―― 「坊っちゃん」「吾輩は猫である」などの

作者。

ジャンル―― 種類。

醍醐味―― 本当のおもしろさ。

文字を紡いで―― 言葉を選んで文章を作って。

極論―― ひじょうにかたよった意見。

賜物―― いただいたもの。

文章2

最近はまだ本が読まなくなると言われる。とりわけ、重厚な内容の本格的な本が売れなくなってしまったと嘆く声を聞く。

私自身の経験に照らして言えば、本を読むことはやはりかけがえない経験であり、欠かすことのできない魂への滋養であるように思う。

【中略】

小学校一年生のときに夢中になって読んだ本は、学習漫画だった。『虫の国をたずねて』『光・音・熱の魔術師』『こちらアポロ』といったタイトルを次から次へと読んで、広い世界を知り、科学的なものの考え方を学んだ。

『大きい1年生と小さな2年生』という本も懐かしい。登場人物は一年生の男の子と二年生の女の子の二人で、男の子は森の中に冒険に行き、綺麗なホテルブクロを見つける。最初は反目し合っていたがやがて仲よくなっていくストーリーが面白く、何回も繰り返し読んだものだ。

小学校三年生のときには、学校の図書館にあるSF童話シリーズにはまって読破した。この頃には、クラスの中でも読書量が一番になっていたのではないかと思う。

当時は、図書館から借りてきた本を休日に五冊くらい一気に読んで、夕方頃には心地よい疲れでぐったりしてしまったこともある。何とも言えない満足感があった。

自分の小さい時の体験を振り返ると、かなり初期の頃に読書体験を積んだのが、ずいぶん役に立っているように感じられる。コンピュータ、インターネットなど、新しいメディアが登場するにつれて本の持つ意味は相対的なものになるという考え方もあるが、まだまだ本は廃れないと思う。

本がよいのは、何よりも「没入感」があることである。一冊の本を読むことは、山を登ることに似ている。とりわけ、長編小説を読んでいると、現実の世界を離れ、遠い仮想の空間に遊ぶ。読んでいる間は本以外のことは消える。脳が、読書という活動モードにぐっと惹き付けられていく。

映像に比べて、言葉は情報の圧縮度が際だって大きい。大脳新皮質の側頭葉の視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの感覚が統合される領域で生み出されるのが人間の言葉である。たった一言の表現の中に、人生の万感の思いが込められたり、その人の世界観が表れたりする。ぎゅっと濃縮された読書する時間を何度も経験することによって、私たちの脳はたくましく鍛え上げられていく。

万有引力を発見したアイザック・ニュートンは、「もし私が遠くまで見ていたとしたら、それは巨人の肩に乗っていたからである」と手紙に書いた。本を読むということは、先人の体験を濃縮した形で知ることである。いままでに読んだ本が足下にうずたかく積み上げられ、その上に立つことで私たちは遠くまで見ることができると。

一〇〇冊読んだ人は一〇〇冊の高さから、一万冊読んだ人は一万冊

の高さから、世界を見ることが出来る。読書するということは、「ニュートンの巨人」を自らの足の下に作り上げる、大切なきっかけになるのである。

デジタル情報が主流の今日の世界の中で、本を読むと心がやすらぐ。本に触れていると何となくほっとするのは、それが紙でできているからだろう。原料である樹木の肌に、森の中で触れている思いがする。やさしい手触りが、未だ見ぬ世界に私たちを誘う。

やがて自らが立って遠くを見る土台をつくるためにも、子どもたちにはたくさんの本に触れて欲しい。

(茂木健一郎「あるとき脳は羽ばたく」による)

(注)

滋養——栄養になること。

ホタルブクロ——山や野に咲く花の一種。

反目——にらみ合うこと。仲たがいすること。

SF 童話——科学をもとに、空想の世界をえがいた子供向けの物語。

相対的なものになる——絶対になすぐれているものとは言えなくなる。

廃れない——捨て去られることはない。

没入感——入り込む感じ。

圧縮——おし縮めること。

大脳新皮質の側頭葉——脳の一部分の呼び名。
視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚——外界のものを感ずる

さまざまな感覚。

万感の思い——さまざまな思い。

万有引力——全ての物体が持っている、たがいに引き

合う力。

アイザック・ニュートン——イギリスの物理学者。

〔問題1〕

⑦ 小学校四年になってその一風変わった読書も落ち着きはじ

めた頃、芥川龍之介、宮沢賢治、夏目漱石などの日本

文学の先生方の作品に出会いました。とありますが、この

「出会い」によって筆者の本の読み方は、どのような読書の

しかたからどのような読書のしかたに変わっていきました

か。この「出会い」の前と後について、それぞれ二十五字

以上三十五字以内で書きなさい。ただし、それぞれ文の終

わりは、「読書のしかた。」とすること。（、や。などもそ

れぞれ字数に数えます。）

〔問題2〕

⑧ 巨人の肩に乗っていたとありますが、筆者はこの言葉を

どういうこととしてとらえていますか。三十字以上四十

字以内で書きなさい。ただし、文の終わりは、「ということ。」

とすること。（、や。などもそれぞれ字数に数えます。）

〔問題3〕

あなたにとって「読書が与えてくれるもの」とは何ですか。

文章1と文章2、それぞれの要点にふれ、あなたの考

えを四百字以上四百四十字以内で適切にまとめなさい。

ただし、次の条件と、左の〔きまり〕に従いなさい。

条件1 三段落構成にし、第一段落には、文章1、文章2、そ

れぞれの要点をまとめること。

条件2 あなたの考えは、一つにしばって書くこと。

条件3 考えの根拠・理由を書くこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入

れる場合は行をかえてはいけません。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号

が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じます目

に書きます。（ます目の下に書いてもかまいません。）

○ 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

問題 1

前

後

〔問題 2〕

〔問題 3〕

(28 大泉)

[illegible]

440

400

300

200

100

20

40

20

20

20

受 検 番 号

得	点
※	

※のらんには、記入しないこと。



適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、^{すべ}解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

1 次の **文章1** と **文章2** を読み、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

アメリカの心理学者でノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンが、幸福のとらえ方にはふたつの要素があると語っています。

① 「経験の自己」と「記憶の自己」というものですが、これらは自分の中にふたつの自己が存在し、それぞれ幸福に対してとらえ方が異なるということです。

簡単にいうと、幸せを感じるときにはふたりの自分がいるということです。

たとえば、今このときを楽しむというのが好きという人がいますね。

経験の自己というのは、今を楽しむことで幸せを感じることです。そしてもうひとつは、* 紆余曲折や苦しいことを経験しながらも、振り返ると「あれをやった」「あれができたからこそ、今自分は幸せを感じることができる」という満足感が生み出す幸せというものもあります。

これが記憶の自己というものです。

では、どちらの幸せが重要かといえば、やはり人間にとって大事なのはふたつめの幸せ、記憶の自己がとらえる幸福感だといわれています。

人間の脳というのは、簡単に手に入れられた喜びはすぐに忘れてしまうようにできています。

日々の出来事は時間の流れに沿って進んでいきますが、人間の記憶というのは時間の流れに沿うものではなく、思い出や出来事単位で編集されていく性質を持っています。だから、印象に残らないことはすぐに忘れてしまうのです。

旅行で考えると、わかりやすくなります。

ひとつは、旅行中はすぐ楽しくて、すべて予定どおりに終わる旅行。もうひとつは、途中でトラブルに巻き込まれたりして、予定どおりにいかない旅行です。

あとでこのふたつの旅行を振り返ったとき、楽しかった記憶とし

て鮮明^{せんめい}によみがえるのは、波乱^{はらん}に満ちた旅行だといわれています。

穏やか^{おだ}に暮^くらすことに幸せを感じる人もいるでしょう。

ですが、時間が経^たって振り返ったときに「あのときは大変だったけど、今考えるといい経験になった」と思えることのほうが、脳は幸福を感じるのです。

では、どうすればいいのか。

私^{わたし}は、やはり夢を追いつづけることだと思います。

夢に向かって努力をしていれば、苦勞したり、大きな壁^{かべ}があったり、残念ながら叶^{かな}わなかったとしても、脳にとっての満足度は高

〔注〕 紆余曲折^{うよよくせつ}——事情がこみ入っていて、いろいろ変わることに。

いのです。

脳が幸福を感じられるのは、夢を追いつづけて努力することで、さまざまなことを乗り越^こえたときに感じる充^{じゅう}実^{じつ}感^{かん}なのです。

あなたにも、夢があるはずです。

今このときも大切ですが、同時に夢のために努力することも大切なのです。

振り返ったときの満足度こそ、幸せの条件なのですから。

（茂木健一郎^{もぎけんいちろう}「茂木健一郎の脳がときめく言葉の魔法^{まほう}」による）

（次のページへ続きます。）

文章2

幸福に関係のある性格として、好奇心^{こうきしん}を挙げることができます。好奇心は探究心^{たんきゅうしん}と熱中^{ねっしゅう}に分けることができます。探究心は不安を忘れさせてくれるものです。冒険家^{ぼうけんか}を見れば明らかのように。探究心は、いかなる困難^{こんなん}も喜びに変えてしまいます。パズルのピースが喜びへのステップになるように。私^{わたし}にとっては哲学^{てつがく}もそうです。自由とは何か、幸福とは何かということを考えるのは、喜びなのです。そして熱中すると、もう不安は完全に消え去ってしまいます。これほど幸せなことはいでしよう。何かに熱中している人と、そうでない人とは人生の充実度^{じゅうじつど}が異なります。だから私もよく若い人に、熱中できるものを何か1つでも見つけるようにアドバイスするようにしています。時には面白^{おもしろ}そうなこと、その人が興味を持ちそうなことを勧^{すす}めてあげることもあります。それはより経験が豊富な大人の役目だと思っていますからです。

② もちろん熱中できるものは、自分で見つけるに越^こしたことはありません。^{*} アランもこういつています。「人は、棚^{たな}からばた餅^{もち}のよう^{*}に落ちてきた幸福はあまり好まない。自分でつくった幸福が欲しいのだ。子どもはわれわれ大人の庭など虚仮^{こけ}にするだけだ。子どもは自分で、砂山^{すなやま}と麦藁^{むぎわら}とでりっぱな庭をつくっている。自分の手で収集^{しゅうしゅう}したことの無い収集家^{しゅうしゅうか}など想像できるだろうか」と。

ここでは、幸福が自らの行動に端^{たん}を発するものである必要性を論じているわけですが、つまるところそれは好奇心こそが行動に結びつき、それが幸福という結果につながることをいっているわけです。好奇心によって幸福を見つけ出すことのできる人は、何事に対しても積極的です。反対に、何も見つからない人は、とにかく行動することです。アランはこうもいっています。「何もしない人間はなんだって好きになれないのだ。そういう人間に、まったく出来合^{*}いの幸福を与^{あた}えてごらん。彼は顔^かをそむける。それにまた、音楽を自分で演奏^{えんそう}するよりも聴^きく方が好きな者がいるだろうか。困難なものがわれわれは好きなのだ。だから、行く道に何か障^{しょう}害^{がい}があるたびごとに、血^ちが湧^わき、炎^ほが燃えあがる」と。幸福は困難の先にあるものなのです。

③ 「おさるのジョージ」というアニメをご存^{ぞん}じでしょうか？ 彼はいつも色んなものに興味を持ちます。そして失敗を通じて学ぶのです。それが子どもにとっては望ましい態度だということなのでしょう。たとえば、こんな感じ^{*}です。ある日ジョージはじめて映画館^{えいがかん}に行きます。ところが、彼^そが映写機^{えいしゃき}に好奇心^{こうきしん}を抱^{いだ}いて映写室^{えいしゃしつ}に入り込んだことで、映写技師^{えいしゃし}を驚^{おどろ}かしてしまいます。その結果、映画がストップしてしまうのです。ただ、その中断の間に映写機の仕組みを理解したジョージは、手で影絵^{かげえ}をつくって観客を楽しませます。

みんな幸せな気持ちになって、めでたしめでたしというわけです。

ここでのポイントは、単に本人が学ぶだけではなく、いつも周りの人を幸せな気持ちにしてくれるという点です。ここが重要なのです。子どもたちが好奇心にかられて何かをしているのを見ると、

微笑^{ほほえ}ましくなるものです。そして思わず幸せな気持ちになります。

もちろん子どもたちのほうも幸せな気持ちでやっているのでしょう。

(小川^{おがわ}仁志^{ひとし}「絶対幸せになれるたった10の条件」による)

〔注〕 哲学^{てつがく}——人生や世界などの根本的な原理についてはつきり知ろうとする学問。

アラン——フランスの哲学者。

虚仮^{こけ}にする——ばかにする。

端^{たん}を発する——それがきっかけになって物事が起こる。

出来合い——注文によって作ったのではなく、すでに出来上がっていること。

映写機^{えいしゃき}——映画^{えいが}を映^{うつ}すための機械。

映写室^{えいしゃしつ}——映画を映^{うつ}すための作業をする部屋。

映写技師^{えいしゃぎし}——映写機^{えいしゃき}を操作^{そうさ}して映画を映^{うつ}す人。

〔問題1〕 文章^{ぶんしょう}1 ① 「経験^{けいけん}の自己^{じこ}」とありますが、あなた自身の「経験^{けいけん}の自己^{じこ}」がこれまでにとらえた幸せについて、具体的に一つ書きなさい。

ただし、どんな出来事によってどのように感じたのかを明らかにして書くこと。

〔問題2〕 文章^{ぶんしょう}2 ② もちろん熱中^{ねっしゅう}できるものは、自分で見つけるに越^こしたことはありません。とありますが、その理由と考えられる

ことは 文章^{ぶんしょう}1 にも書かれています。 文章^{ぶんしょう}1 から理由と考えられることを読み取って書きなさい。

(次のページへ続きます。)

〔問題3〕

文章2

に

「おさるのジョージ」というアニメをご存じぞんでしょうか？

とありますが、筆者はどのようなことを伝えるために

このアニメの例を使ったのでしょうか。

文章2

を読んであなたが考えたことを書きなさい。

〔問題4〕

文章1

と

文章2

は、どちらも「幸福」をテーマに書かれたものですが、それぞれの文章における幸福についての考えは、どのような点が共通していますか。解答らんに合うように、二十字以内で書きなさい。

〔問題5〕

文章1

と

文章2

を読んで、あなたの人生を幸福にするためには、どのようなことをしていきたいと考えましたか。次の二つの条件を満たしながら、三百五十字以上、四百字以内で書きなさい。

条件

1. 「記憶きおくの自己じこ」・「好奇心こうきしん」というそれぞれの言葉が、本文で示している内容にふれること。
2. あなたがこれまでにやってきたことと、これからやりたいことをそれぞれ具体例として挙げること。

記入上の注意

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。
- 書き出しや段落だんらくをかえたときの空らんや、。や「などもそれぞれ一字に数えること。
- 段落の最初は、一字下げて書くこと。

解答用紙 適性検査Ⅰ

1

〔問題1〕

〔問題2〕

〔問題3〕

〔問題4〕

幸福とは

ものだと考えている点。

〔問題5〕

(27 両国)

400 350 300 200 100

受 検 番 号

得 点
※

※のらんには、記入しないこと

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**3** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立大泉高等学校附属中学校

1

文章1

文章2

を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

世の中には、ことに実務の面では、はっきりものを言わなければならぬ場面がたくさんある。そういうときに相手をおもんぱかって敢えて自分の考えを明言せぬ言語習慣が、私たちの社会の風通しをわくしている。また、科学(自然科学とかぎりなく社会科学でも人文科学でも)は冷たく澄んだ世界で、そこではとことんまで突きつめた明確な表現が必要なのだが、私たちはとかく表現をぼかし、断言を避けて問題をあいまいにし、論争を不徹底にしていまいがちである。

私は、むきつけな言い方を避けて相手が察してくれることを期待する日本語のものの言い方の美しさを愛する。そういう言い方を、これから育った人たちにも大切にしてもらいたいと思う。しかし、理科系の仕事の文書は、がんらい心情的要素をふくまず、政治的考慮とも無縁で、もっぱら明快を旨とすべきものである。そこでは記述はあくまで正確であり、意見はできるかぎり明確かつ具体的であらねばならぬ。

もっとも、いざそれを試みようとする読者は予想外の困難を免見されるにちがいない。日本文学者トナルド・キーンが次のように言っている。

「鮮明でない言葉はフランス語ではない」という言葉があるが、日本語の場合、「はっきりした表現は日本語ではない」といえるのでは

ないか。……数年前に日本人に手紙を出したが、その中に「五日間病気でした」と書いたので、友人は「日本語として正確すぎる」と言って「五日ほど」と直してくれた。小説の人物の年齢も多くの場合、「二十六、七歳」となっていて、二十六歳とも二十七歳ともはっきり定められていないようである。……

キーンの言は的を射ている。こういう風土に育った私たちは、折あることにぼかしことをばを挿入する言語習慣が深くしみついていて、容易なことではへはっきり言い切る文章は書けないのである。しかし私たちは、こと理科系の文書に関するかぎり、敢えて「日本語でない」日本語、明確な日本語を使うことにしようではないか。

(木下是雄「理科系の作文技術」による)

〔注〕

実務

実際の仕事。

おもんぱかって

よくよく考えて。

自然科学

主に自然を対象とした科学。

社会科学

主に社会を対象とした科学。

人文科学

主に人間の文化を対象とした科学。

むきつけな

遠慮のないようす。

理科系

(ここでは)自然科学の分野。

政治的考慮

実際の状況にもとづいて物事をこなす際、いろいろなことを考え合わせる。

旨とする

重んじる。

折

機会。

挿入する

はさみ入れる。

文章2

春から夏は虫捕り、秋から冬は仕事。まあそう完全に振り分けられるわけではないが、そんなふうな感じで、このところ数年を過ごしている。虫を捕るならなんといっても五月、六月である。私が調べている虫は葉っぱを食べるグループだから、若葉のある季節に出てくる。だから虫捕りは春がいい。

真夏はむしろ子どもたちの相手で、虫捕り教室をする。なにも教えるわけではない。ただ虫のいそうなところに一緒に出かける。あれこれ指図もしない。子どもの顔を見て、ただニコニコしているだけ。

それで子どもたちになにが伝わるか。むずかしいというと、メタメッセージである。メッセージなら、こういう虫はこれこれこういうところにいて、などと具体的な説明をする。それを聞いた子どもたちは、その具体的な説明を覚える。そう思っている人が多い。メタメッセージとは、そういうことではない。そういう具体的な説明を通して、この人はなにを面白いと思っているのかとか、なにを大切だと思っているのか、そういうことが間接的に伝わる。それをメタメッセージという。要するにわかって欲しいのは、虫捕りは面白いとか、一生やることができる仕事だとか、そういうことなのである。でも直接にそういつてみても、納得もいかないし、面白くもないだろうと思う。だから黙って野山に連れて行く。私が虫の世界を本気で面白いと思っていれば、それがいつの間にか子どもたちに伝わる。伝わるかもしれない。大切なのはそこである。

テレビのコマーシャルを含めて、現代人はおびただしいメタメッセージ

ジにさらされている。だから私は子どもたちに、違う時間を過ごさせてあげたいと思う。そこではなにも知識は入ってこない。でも身体中が反応している。陽の当たり方がどんどん変わる。野原から森に入れば、たちまち涼しくなる。時間が経てば、日差しが変わってくる。風向きが変わる。湿度が変化する。鳥が鳴き、蝶が飛ぶ。一歩歩けば、歩いただけ、世界が変化する。

そういう時間が過ぎると、気持が良く、おなかが空いて、ご飯がおいしい。でもそんなことはいちいち説明できない。説明する必要もない。生きていることを実感するのに、説明は不要である。

「情報化されるものだけが存在する。」それがネット社会のメタメッセージである。すべてが言葉になり、写真になり、図表になる。それがいかに貧しい世界か。それを子どもたちに確認してもらいたい。それが虫捕りの①最終のメタメッセージである。

(養老孟司「メッセージのメッセージ」による)

〔注〕 ネット社会——インターネットを通じて情報のやりとりができる社会。

〔問題1〕 ⑦ こと理科系の文書に関するかぎり、敢えて「日本語でない」

日本語、明確な日本語を使うことにしようではないか。とありますが、「理科系の文書」で「明確な日本語」を使わなかった場合、どのようなようになってしまふと筆者は述べていますか。「……になってしまふ。」に続くように、十五字以上二十字以内で書きなさい。ただし、や。や」なども、それぞれ字数に数えます。

〔問題2〕 ① 最終のメタメッセージとありますが、ここで筆者の言う

「最終のメタメッセージ」の内容を、本文中の言葉を使って、三十字以上四十字以内で適切にまとめなさい。ただし、や。や」なども、それぞれ字数に数えます。

〔問題3〕 人が何かを伝え合うときには、どのようなことが重要だ

と思いますか。

文章1

と

文章2

、それぞれの要点を

ふまえ、あなたの考えを、三段落構成にまとめ、四百字以上四百四十字以内で書きなさい。また、下の「きまり」に従いなさい。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合は行をかえてはいけません。
- 、や。や」なども、それぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じます目に書きます（ます目の下に書いてもかまいません）。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

〔問題 1〕

20

になってしまう。

受 検 番 号

得	点
※	

※のらんには、記入しないこと

〔問題 2〕

[illegible]




30



〔問題 3〕

[illegible]

(27 大泉)



適性検査Ⅱ

注 意

- 1 問題は、文章を読んで答える問題で、5ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前11時30分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

次の①と②の文章を読み、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。）

①

通常は、英語名で「クローバー」とよばれる植物があります。茎は、地面を這うように伸びます。節から芽を出しながら、長い柄をもつ葉を立ち上げます。葉は、卵形の三枚の小葉からなります。稀に見つかる四枚の小葉からなる葉っぱは「四つ葉のクローバー」とよばれ、幸運をもたらすものとされています。

江戸時代にオランダからガラスの器や装飾品などの輸入品を運ぶとき、割れないように、乾燥させた、この草が詰めてありました。そのため、この草は「詰草（ツメクサ）」といわれました。春から夏にかけて、葉っぱよりも長い花茎を出して、その先端に花を咲かせます。小さなチョウチョのような形の花が三〇〜八〇個集まって、直径一〜二センチメートルくらいの球状になります。花が白いとシロツメクサ、花が赤いとアカツメクサ、または、ムラサキツメクサです。

この植物は、野や空き地に群落をなして繁殖します。このような場合には、仲間が寄り添って仲良く生活しているように見えます。仲間が助け合って生活しているような印象をもつ人も、少なくありません。

ところが、このような場合、異なる種類の植物が同じ場所で育っている場合よりもきびしい闘いがおこっているはずです。なぜなら、同じ仲間の個体なので、欲しがる条件がまったく同じだからです。快適な生活場所、最適な光の量、必要な栄養物、温度、水分など、その他の種々の要因について、個々の個体が同じものを同じように欲しがります。

もし少しでも好みが変われば、折り合うこともできます。たとえば、光の強さの好みが変われば、少し弱い光でよいものは、強い光が必要なものの陰になって育つことができます。ところが好みがまったく同じ場合、折り合いをつけるのは困難です。

だから、群落の中でこれらの奪い合いは、熾烈なものとならざるを得ません。でもそんな競争をしている中でも、クローバーは、みんなが共存して共栄していくための努力をし、なんとか折り合いをつけようとします。

もっとも大切なのは、仲間のみんなが同じように光を受け取ることです。そのため、群落の真ん中の植物たちは、光がたくさん当たるように、背を高く伸ばします。「まわりの仲間に負けないように、背を高くして、光をたくさんもらおう」ということでしょう。

群落の端の植物は、光がよく当たるので、真ん中の仲間に光が当たると邪魔しないように、背丈を伸ばしません。その結果、群落の真ん中の方がぼつこりと背が高くなります。四つ葉のクローバーを探しているときに気づく人がいるかもしれません。

このようなしくみが、仲間との共存共栄を支えています。だからこそ、クローバーは群落をつくり、仲間と切磋琢磨しながらも、共存共栄ができるのです。植物たちの、仲間とともに生きるために「譲る」という知恵に「あっぱれ！」と感服せざるを得ません。

（田中修「植物のあっぱれな生き方」による）

〔注〕 柄…ここでは、葉と茎がつながる細長い部分のこと。

装飾品…美しくかざるための品物。

花茎…花をつける茎。

群落…同じなかまの植物の集まり。

繁殖…動物や植物などが数を増やすこと。

要因…ものが起こる主な原因。

折り合う…対立していたものがゆずり合ってうまくまとまること。

熾烈…勢いが強く、激しい様子。

切磋琢磨…同じものをめざす者同士が、競い合って向上していくこと。

あつぱれ…みごとだとほめたたえる時に言う語。

感服…すっかり感心すること。

（次のページへ続きます。）

⑧

この世の中は、自分といつも気が合い、フィーリングが合い、波長^{*}が合う人ばかりではありません。むしろ自分と気が合わない、フィーリングが合わない、波長が合わない人のほうが多いのです。またそれまでは波長が合っていると思っていた人でも、あるときから波長が合わなくなることがあります。そんなとき、どうすれば波長を合わせることができるのか。「気を合わせる」にはどうしたらいいのでしょうか。

人はみな性格も環境^{かんきょう}も違い、性差^{ちが}もあれば世代も違います。違う人同士がすぐに「気が合う」ことのほうが少ないのです。人と人との関係は、人はみな違うということを前提にして始めなければなりません。

音楽の話でいえば、オーケストラの楽器はみな違う。弦楽器^{げん}もあれば管楽器もあれば打楽器もあります。性格の違う楽器を合わせてひとつの音楽をつくるわけです。それらまちまちの楽器で演奏^{えんそう}を始めるには、それぞれの楽器の音程を合わせなければなりません。コンサート会場でよいよ開演というとき、オーケストラの団員^{だんぎん}がコンサートマスターの合図によってオーボエのA音^{*}に合わせて一斉^{いっせい}に各自の楽器の音程を微調整^{びていせい}する場面があります。チューニング（調弦）といいますが、このチューニングがうまくいくと演奏がうまくいくのです。

このチューニング、平たくいえば「音合わせ」は、人と人とが何かをしようにするとき、いちばん最初にやるべきことです。

③

「気を合わせる」ということは、この「音合わせ」と同じようなものかもしれません。チューニングのように相手の音程や音色に合わせていくこと、あるいは自分の音程や音色に合うように相手の音程や音色を

それとなく微調整させていくことです。この微調整というところが大切なところですよ。ひとつの音楽にするために、各自の楽器をわずかずつ慎重^{ちゅうじやう}に調整していくのです。あるいは合唱や重唱のように、違った声部^{せいぶ}をうまく重ね合わせてひとつのハーモニーをつくっていくことです。

「気を合わせる」のは、弦楽四重奏^{*}の場合には同じ弦楽器同士なので合奏しやすいですが、弦楽器に鍵盤楽器^{けんばん}のピアノが加わったピアノ三重奏などでも名演奏は生まれます。人間関係も同じで、気質や環境の違った人同士でも「気を合わせる」ことができます。むしろ気質や環境の違った者同士のほうがうまく「気を合わせる」ことができます。

声楽家の大野^{おの}一道^{かずみち}さんがラジオで話しておられたのですが、大野さんが外国のオーケストラで日本の歌曲を歌うとき、どうも気持^{きもち}がしっくり合わない。そのとき外国人指揮者^{しきしや}から指揮をしてみてくださいといわれ、タクトを振^ふったところオーケストラが願った通りの音を出してくれた。

④

大野さんはこのことを話されるとき、オーケストラ団員と「気が通じ合った」といわれました。西洋の演奏者たちと日本の歌曲を歌うという難しい場面で、「気が合う」という日本の言葉が無意識に出てきたのです。この話は、「気が合う」ということは、日本人同士だけに限られたことではなく、外国人とのあいだでも「気が合う」ことは可能で、「気」は民族や国境を超えて普遍的^{ふくへん}にグローバルに存在^{そんざい}していることを証^{あかし}してくれる実例ともいえます。

自己^{じこ}中心に気が合いそうな人とはばかり付き合うのではなく、気が合いそうでない人たちと付き合うことこそ、若い人^{わか}にはとくに大事なことです。

「気が合う」「気が合わない」ということは、さまざまな楽器を一緒に演奏するのと同じように、常に自己と他者との相互関係です。自己と他者とのコミュニケーションを成り立たせるいちばん基本的な手段は、言葉による「対話」、あるいは「会話」です。「気が合う」ということは「話し合う」ことができるという関係です。対話が続けられる関係です。比喩的にいえば、合奏や合唱は音による対話です。

とはいえ、場合によっては、苦手と思う人、話しづらい相手と対話しなければならぬときがあります。そんな場合、女優の森光子さんがシンガーソングライターの松任谷由実さんとの対談でいわれている次の言葉はたいへん示唆的です。「ちょっと嫌だなと思う人と会話をすることが必

〔注〕 波長：ここでは、話をする時などのおたがいの心の動きのこと。

性差：男女の性別によるちがひ。

コンサートマスター：管弦楽団の中心的な演奏者。

A音：オーケストラで音合わせをするときに、その基準となる音。

声部：音楽で、声の高さや楽器などによって分けられたそれぞれが受け持つ部分。

ハーモニ：高さのちがう二つ以上の音が重なって調和したひびき。

弦楽四重奏：第一バイオリン・第二バイオリン・ビオラ・チェロの四つの楽器による演奏。

ピアノ三重奏：ピアノ・バイオリン・チェロの三つの楽器による演奏。

タクト：音楽で、指揮をする人が持つ棒。指揮棒。

普遍的：いろいろなものに広くあてはまる様子。

グローバル：世界的な規模である様子。

比喩的にいえば：たとえていえば。

シンガーソングライター：自分で作詞、作曲し、その歌を歌う歌手。

示唆的：それとなく伝えている様子。

要だなどと思う時があります。自分の目が曇っていることもあります。逃げないで声をかけると、その人と仲良くなれたり、『ごめんなさい』を言ったりできます。このような心がけでいれば、嫌だなと思う人とも「気が合い」、対話することができるのです。

対話が継続されているうちに「気が合っていく」のです。「気が合う」とおたがい「気が軽く」なり、「気が軽く」なると「気が楽に」なります。おたがいに楽しくなり、日常生活も仕事もうまくいきます。「気が合わない」と、おたがい「気は重く」なり、「気まずく」なり、日常生活も仕事もうまくいきません。

（立川昭二「『気』の日本人」による）

（次のページへ続きます。）

(問題1) ① (A)の文章に通常は、英語名で「クローバー」とよばれる植物があります。とありますが、この植物の日本でのよび名はどのようなことから付けられたと筆者は述べていますか。読み取ったことを書きなさい。

(問題2) ② (A)の文章にみんなが共存きょうぞんして共栄していくための努力をしますとありますが、筆者は具体的にクローバーのどのような様子をこのように表現したのですか。読み取ったことを二十五字以内で書きなさい。

(問題3) ③ (B)の文章に「気を合わせる」ということは、この「音合わせ」と同じようなものかもしれませんが、どのようなところが「同じよう」なのですか。読み取ったことを三十五字以内で書きなさい。

(問題4) ④ (B)の文章に大野さんはこのことを話されるとき、オーケストラ団員と「気が通じ合った」といわれました。とありますが、なぜ大野さんが指揮をしたら気が通じ合ったのでしょうか。 (B)の文章を参考にしてあなたの考えを書きなさい。

(問題5) (A)と(B)の二つの文章を読んで、あなたは周りの人とよりよい関係を築いていくことについてどのように考えましたか。考えたことを次の二つの条件を満たしながら三百五十字以上、四百字以内で書きなさい。

条件1 周りの人とよりよい関係を築いていくために大切だと思った言葉を(A)と(B)の文章から合わせて三つぬき出し、それらの言葉をすべて使うこと。なお、ぬき出した言葉は次の例にならって形を変化させて使ってもよい。

例

「出す」→「出した」「出して」「出せば」など

「小さい」→「小さく」「小さかった」「小さければ」など

条件2 あなたがこれまでにしてきたことか、これからやっていきたいことを具体的に書くこと。

記入上の注意

○ 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。

○ 書き出しや段落だんらくをかえたときの空らんや、や。や「などもそれぞれ一字に数えること。

○ 段落の最初は、一字下げて書くこと。

解答用紙

適性検査Ⅱ

(問題 1)

--	--

(問題 2)

[illegible]

(問題 3)

[illegible]

(問題 4)

--	--

(問題5)

ぬき出した言葉

--

[illegible]

受検番号

--

得 点

--	--

適性検査Ⅱ

注 意

- 1 問題は、文章を読んで答える問題で、4ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前11時30分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立両国高等学校附属中学校

次の①と②の文章を読み、あとの問題に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

① この文章は、日本人で初めて国際宇宙ステーションのコマンダー（船長）に選ばれた宇宙飛行士の若田光一さんが、自身が目指す「リーダー像」について述べたものです。

中国の老子は「有能なリーダーが仕事を終えた時、人々にはその事柄が自然に起きたように見える」という言葉を残しましたが、それが私にとつての理想像です。

私の1回目と2回目のスペースシャトル飛行の時の船長で、アメリカ空軍のテストパイロット出身のブライアン・ダフィーさんは、まさにそんなリーダーでした。特に強いリーダーシップでみんなを率いているという感じは受けないんですけど、彼と訓練をしていると、いつのまにか仕事をするためのノウハウが身についてしまっている。

彼はふだんのなにげない会話を通して、チーム一人ひとりの能力や特性をきちんと把握してくれているんです。それで、それぞれの欠けているところ——たとえば人工衛星をロボットアームで捕まえる時の心構え——をさらっと、気づかないうちに教えてくれる。だから、次の機会に訓練をすると、教えてもらったことが自然に出てきて、課題だったことがいつのまにかクリアできている。それにダフィーさんはチーム一人ひとりの能力を信頼し、しっかりと監督しながらも多くの仕事を任せてくれます。

私が目指すのも、そういうリーダーです。訓練中はもちろん、宇宙に行つて、帰つて気づいてみたら、自然にミッションが成功していたなとメンバーに思ってもらえる。透明人間のようなリーダーになりたいですね。まだまだダフィーさんにはほど遠いですけど。

彼に限らず、航空会社の技術者の仕事をしていた時の上司や、ヒューストンで宇宙飛行士訓練を開始した当時のNASDA（現JAXA）のヒューストン駐在事務所の所長……この人だったらついていっているんなことを学びたいな、と思うすばらしいリーダーの方々に恵まれたことに本当に感謝しています。自分がリーダーシップをとつていて困った時は、彼らがどうやって苦境を乗り切つていったかを思いだすようにしているんですよ。

たとえば「相手に逃げ道を残す」。問題解決には、寛容さをもつて、相手が逃げられるスペースを残しながら議論する必要があります。最後まで自分の意見を押し通してチームのハーモニーを維持できなかったり、パフォーマンスが落ちたりしては意味がないですからね。

海軍のテストパイロット出身でNASA宇宙飛行士候補者クラスの高級生から聞いた言葉もよく覚えています。「心の中では危機を感じていても、態度は平静に保て」ということです。宇宙飛行士は、宇宙でどんなに危機的な状況が訪れても、軌道上のクルーと地上管制局を含めた運用チーム全体が冷静に行動できるように言動をとる必要がある。もし

クルーがパニックを起こしたら、地上で支援^{しえん}してくれる仲間も落ち着いた状態で作業を行うことが難しくなるんだ、と教えてもらいました。宇宙飛行士になったばかりの年に聞いた言葉ですけど、今も心に残っています。

もう一つ、「状況判断能力」について尊敬^{そんけい}するリーダーが言っていたことがあります。「運用上の小さなミスは、あとで是正^{*せせい}できる。でも、状況判断能力自体は簡単^{かんたん}には変えられない」。状況を瞬時^{しゅんじ}に的確^{はあく}に把握し、適切な行動に移していく能力を向上させるには、とにかく場数^{*}を踏^ふんで、ちよつとずつ能力を磨^{みが}き上げていくしかないと思つて、努力^{どりよく}をしてきました。

(モーニング編集部+門倉紫麻^{かどくらしま})

「We are 宇宙兄弟 宇宙飛行士の底力」による)

〔注〕老子^{らうし}…古代中国の思想家。

ノウハウ…やり方。

ミッション…任務。

ヒューストン…宇宙センターのあるアメリカの都市名。

NASDA (現JAXA) …日本の宇宙航空研究の機関。

寛容^{かんよう}…心が広く、人の立場をよく理解すること。

パフォーマンス…発揮^{はっき}される力。

NASA…アメリカ航空宇宙局。

クルー…乗組員。

是正^{ぜせい}…正しく直すこと。

場数^ふを踏^ふんで…経験を^ふつんで。

(次のページへ続きます。)

⑤ この文章は、北海道でリサイクル用機器の製作販売会社を営んでいる植松努さんへのインタビューをもとに書かれたものです。植松さんは社員とともに、本業のかたわらロケットの開発に打ち込み、子供たちを対象にモデルロケットの製作と打ち上げの体験教室を開いています。

「僕は、『小学生のうちからロケットくらい飛ばしておけ』っていう環境になるのがいなと思っていて。大学生でせっかく宇宙開発の勉強をしていますが、ロケットどころかプラモデルさえも作ったことがなくて、特に成果の出せないまま卒業してしまう子も結構いる。もったいないです。

去年から今年にかけてうちの工場で使ったモデルロケットの数は2万発くらいになっています。それだけの子たちと、僕はロケットを飛ばしています。

幼稚園、小学生くらいまでは、彼らはみんなやりたがり、知りたがりです。どうせ無理と思わない、諦めない大人になってもらうには、諦め方をまだ知らない子どもに、諦め方を教えないのが一番いいのかなあ」と。

モデルロケットは、紙とプラスチックでできた、オリジナルのもの。エンジンを装着すれば打ち上げができる本格的な仕様だ。組み立て説明書を見ながら、プラモデルの要領で組み立てていくのだが、けっして子ども向けに書かれているわけではない。

「最初にね、^②『作り方は教えませんが、頑張ってください』って言うんです。たぶん、すぐには作り方がわからないと思います。でもね、

わからなかったら、わかるまで調べればいいだけなんですよ。

調べる方法には、二つあって。まずわかっている人のしていることをこっそり見る。もう一つは、わかっている人と仲よくなって、教えてもらう。そうして自分ができるようになったら、人に教える。それだけのことなんですよね。

最初から何でも知っている必要なんてないんです。わからないことがあるのは恥ずかしいことじゃない。わからなかったら、調べればいい。人に聞けばいい。

社会に出てからも、同じようなことが起きます。トラブルがあってもどうしたらいいか人に聞けない人は、問題を前に一人で固まる。要領のいい人は言われたことだけさっさとやって、あとは暇をつぶすのみになる。でも、誰かに何かを教えてもらう経験をしたら、今度は自分が誰かの役に立ちたい、必要とされたいと思うようになります。

じゃあ、必要とされるためにはどうしたらいいかというと……得意技を持ってばい。そのためには、これをやりなさいと言われた勉強、人に聞けばわかる勉強以外に、自分で考えたことを自分でやるしかない。そうやって、自分だけの得意技を獲得していくんです。

たぶんあと15年もしたら、僕らと関わった子どもたちが、JAXAとか宇宙に関する場所でたくさん働いているはず。やりたがりを知りたがり、宇宙開発の現場にあふれるようになったらいいと思います。

こないだね、チャック・ラワーとリーダーシップってなんだろうね、という話をしていて。命令を出すことではない。命令を出す人やカリスマが出てくると、指示待ち族が増えるから。指示されたことだけやるなら、

ロボットでいいわけ。

僕らの結論^{けつろん}としては、自ら動く人を育てるためには、リーダー自身がかく行動して、先に行くことが大事なんじゃないかと。夕陽^{ゆうひ}に向かってひたすら走っていれば、そのうち誰かがついてくるでしょう。もし誰もついてこなくても、走るのをやめてはいけません。いったん

〔注〕 チャック・ラワー…ロケットの共同開発者の名前。

カリスマ…人をひきつけるような資質・技能を持った人。
指示待ち族…誰かに指示されないと何もしない人たち。

(問題1) ① ④の文章の^{とうめい}透明人間^①のようなリーダーとはどういうリーダーのことですか。五十字以内で答えなさい。なお、や。や「などもそれぞれ一字に数えなさい。」

(問題2) ② ⑤の文章の『作り方は教えませんが、頑張^{がんば}ってください』という言葉にこめられた植松さんの子供たちに対する思いを五十字以内で書きなさい。なお、や。や「などもそれぞれ一字に数えなさい。」

(問題3) ③ ⑥の文章を読んで、「リーダーのあるべき姿^{すがた}」についてあなたはどのように考えましたか。次の二つの条件を満たしながら、三百五十字以上四百字以内で書きなさい。

- ・ 文章は三つの段落^{だんらく}に分けて書くこと。
- ・ 本文中に挙げられている「リーダー像」にふれること。

○ 題名、名前は書かずに一行目から書き始めること。

○ 書き出しや段落をかえたときの空らんや、や。や「などもそれぞれ一字に数えること。」

○ 段落の最初は、一字下げて書くこと。

○ 段落をかえたときの残りのます目も字数に数えること。

考えよう、と足を止めるなんてもつたない。走りながら考えることだってできるんです。泣きたくなったら……走りながら、泣けばいいんですから。」

(モーニング編集部+門倉紫麻^{かどくらしま})

「We are 宇宙兄弟 宇宙を舞台^{ぶたい}に活躍^{かつやく}する人たち」による)

適性検査Ⅱ

[illegible][illegible][illegible]

受検番号	
------	--

得点	
----	--

[illegible]